

新人提督が弥生とケツ  
コンカツコカリしたり  
するまでの話

水代

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

弥生可愛いよ、弥生。あらすじ？　タイトルが全て。

# 目 次

一話 新人提督が鎮守府に着任したりする話	67	79
二話 新人提督が弥生と出会つたりする話	14	1
三話 新人提督が工廠で建造したりする話	28	14
四話 新人提督が初めて出撃させたりする話	40	92
五話 新人提督が弥生たちと作戦会議したりする話	53	107
六話 新人提督が空母を建造したりする話	154	120
七話 新人提督が再び出撃させたりした話		142

m m e r	d a y	—	—	169
十三話	新人提督が演習とかしたりする話	—	—	183
十四話	新人提督が演習を見届けたりする話	—	—	198
十五話	新人提督が弥生に色々見られたりする話	—	—	215
十六話	新人提督と弥生が謝つたり許したりする話	—	—	229
十七話	新人提督が電話を受けたりする話	—	—	250
十八話	新人提督が弥生を沖ノ島海域に行かせたりする話	—	—	264
十九話	新人提督と弥生が沖ノ島を攻略したりする話	—	—	277
二十話	新人提督が上官から指示を受けたりする話	—	—	293
二十一話	弥生が南方海域で姉妹を拾つたりする話	—	—	308

# 一話 新人提督が鎮守府に着任したりする話

ざあ、ざあと波の音が耳に届く。

蒼い空に白い雲。そこに浮かぶ真夏の太陽が強い日差しで自身の肌をジリジリと焼く。

潮の匂いのする浜風が自身の髪をさあつ、とたなびかせる。

なんとも詩的だ。言葉にするなら。

実際には、真夏日と生暖かい風が自身の不快指数をひたすらに押し上げて いるだけだ。

「…………暑い」

帽子を脱ぎ、ポケットに常備したハンカチで汗を拭う。汗だくの髪に風が吹きつけ、僅かにひんやりとした心地よさを感じ、目を細める。

何故こんなクソ暑い日に、外で何十分と待たなければならぬのか。だが仕方あるまい、自身の提督としての任は、今日やつてくる上官に任じられて初めて正式なものになる。

それだけなら何も問題は無い…………そう、問題はだ。

その上官が今から向かうと告げたまま一向に来ないことだ。

上官は隣の鎮守府の提督であり、いざとなつたらいつでも手助けができるようになると、わざわざ自分の隣にあるこの鎮守府に自身を配置した出来た上司であり、自身も尊敬する人である。

正式に任官を言い渡すため現在こちらに向かつてやつてきているはず、なのだが。

「…………また迷子になつたな、あの人」

堅実な指揮により、着任から数年、一切の轟沈を出すことなく成果を出し続ける全体から見ても指折りの有能な提督なのだが、少し欠点を上げるとしたら、極度の方向音痴であり、何故か迷つていてる時に限つて自身の選択に絶対の自信を持つことだろう。

船舶免許も持つてるので自分で船を使つてやつてくる、などと言つていたが、以前気分転換と言つてクルージングに赴きそのまま行方不明になつて鎮守府総出で探したら何故か鎮守府の裏にある山に船ごと遭難していた、などと言うわけの分からぬ事態を引き起こしたのを忘れたのだろうか。どうやつて船を山まで運んだのか、未だに鎮守府の七不思議として語り継がれる謎である。

予定の到着時刻はすでに三十分以上過ぎている。だがここから離れるわけにも行かない。いくら親しくても上官がやつてくるのだ、その出迎えに誰もいない、などと言う

のはあり得てはならない。

普通の提督ならば代理を立て、鎮守府まで案内させるのだが、生憎着任したての自分には代理としてこの場を任せられる人材がない、故に自身がこの場で待つしかないのである。例え遭難していることが確実であり、いつ来るか分からなくても、次の瞬間には来るかもしれない、それだけの理由で自分がこの場に立ち尽くしている理由には十分なのである、軍隊とはそう言うものだ。

「とは言つたものの…………さすがに遅過ぎる」

時間はすでに到着予定期刻から一時間過ぎようとしている。

また本格的に遭難している可能性もある、前言を撤回するような形になるが、さすがにこれ以上は待てない。

携帯を取り出す。鎮守府には備え付けの固定電話があり、防犯上の理由から機密事項を話す際は、そちらを使うことが推奨されているが、この場合は特に問題も無いだろう。個々の鎮守府の番号は一応とは言え機密に入るるのでアドレス帳には無く、けれど何度とかけた番号だ、暗記しているので問題は無い。よどみの無い手つきで番号をプツシユしていく。

T r r r r r r r

呼び出し音が数秒鳴り、直後ガチャツ、と誰かが受話器を取った音がする。

『はい、こちら横須賀第六鎮守府』

電話越しに聞こえた聞きなれたその声にどこか安堵を覚えながら口を開く。

「提督が迷子です。予定時刻より一時間になりますが、未だに着ません」

前置きも無しに告げた言葉に、電話の向こう側の誰かが口を閉ざす。  
数秒置いて、そうですか、と言う言葉と共に。

『早急に対処します、一時間で片付けるので鎮守府の中で待つておいてください』

電話の向こうで『提督がまた迷子よ、鎮守府内の全艦出撃、一時間以内に見つけて今度こそ仕留めなさい』などと言う言葉が聞こえた気がするが、多分気のせいだろう。

ぶつり、と電話が切られ、思わずため息を吐く。全く、初日からこれが……これから先が全く持つて思いやられる。

とは言うものの、さすがにそろそろ暑さで体調が悪くなつてくる。確かに一度鎮守府に戻つたほうが良さそうだった。

振り返り、鎮守府へと歩き出す。と言つても目と鼻の先の距離だ、すぐに入り口へとたどり着き……立ち止まる。

「…………今日から提督。ようやく、ここまで來た」

長かつた…………などと言えば他の提督や候補生たちに怒られるだろう。上官である提督に目をかけてもらい、ここまでほぼ最短でやつてきたのが自分なのだから。

ここで自身が一体何を体験するのか、この鎮守府はどうなつていくのか…………自分は一体、どんな提督になるのか。

不安があつた…………だがそれ以上に期待があつた。

自ら選らんで進んだ道…………逃げ出せはしない。

ぎゅつと目を瞑る。身の内から勇気が逃げ出さないように。不安が溢れてこないようにな。

そうしてゆつくりと目を開く。

覚悟は決まつた。

さあ、一步、踏み出そう…………

「あ、お邪魔してるよ」

として、思いつきり足を滑らせた。

お約束のようなずつこけ方をしてしまつたが、当然腰を強打して非常に痛い。  
だがそんなことよりも優先すべきことがあり、痛みを堪えて即座に立ち上がつた。  
「て、提督?!」

そこにいたのは自身が一時間も待ち続けていた、自身の上官にあたる提督だつた。そ

の提督が何故か受付の人と一緒になつて優雅に珈琲を飲んでいる光景に絶句する。

「いやー、この受付の方の珈琲は美味しいね」

「あの…………何時ごろ到着なされたので…………と言うか一体どこから入つてきたのでしようか？」

少なくとも唯一の船着き場はずつと自分がいたはずなのだが。問うた自身の言葉に、けれど提督が笑いながら答える。

「いやー不思議だね。ちゃんと港に向けて船を発進させていたはずなのに、いつの間にかこの鎮守府の工廠にてね、妖精さんたちに怒られてしまつたよ、ハハハ」

ハハハじやない!!!! どうやつたら工廠に船ごと入れるんだよ?! ワープ機能でもついてるのかそのクルーザー!? とツッコミを入れることが出来ればどれほど気が楽だろうか。

だがこんなのも上官であり、尊敬する人物なのだ。本当に、これさえなければ誰からも尊敬される素晴らしい提督なのだ。

「ど、とにかく…………到着お疲れ様です。お迎えすることできず申し訳ありませんでした」

一体どこに自分の非があつたのだろうか、とも思うが、それでも上官を迎えるべき寄越さずここまで通してしまつたのだ、頭を下げるべきなのは自分である。

と言つても人の良い提督であり、こちらに非が無いことは分かつてゐるのか、構わない、と一言告げ、頭を上げるように言つた。

「さて、そちらが問題ないならば、今ここで略式ながら任官の辞令を読み上げたいと思うのだが?」

一瞬執務室で、とも思つたが、まだ正式に任官を言い渡されていない以上、ここはまだ自分の鎮守府ではない、だつたらここでも構わないだろう。そう考え、問題が無いことを告げると、提督が鷹揚に頷く。

「うむ、ではこの正式な辞令と共に、貴君にこの鎮守府への着任を言い渡す」

そうして差し出された辞令を恭しく受け取り。

「謹んで拝命いたします」

そう告げ、一つ頭を下げる。

そうして、現時点を持つて、ようやく自身はこの鎮守府へと着任したのだつた。

\* \* \*

「ああ、そうそう。そもそも工廠へ向かつてみたまえ」

カップにたっぷりと注がれた珈琲（三杯目）を飲む手を止め、提督が自身に向かつて

そう呟いた。

「工廠へ？」

「ああ、一足先にキミの秘書艦を用意させている、今頃建造されているころだろう、キミの配下となるものだ、キミ自ら迎えてあげると良い」

艦娘。それはかつて第二次世界大戦時に戦場へと赴いた艦隊たちの名を冠する少女たちの名称だ。

深海棲艦と呼ばれる海の怪物たちを相手に対抗することのできる唯一の存在。人の感情を宿し、人の形をした兵器。それが艦娘。

提督とは、その艦娘たちを指揮し、深海棲艦を打ち倒すことを目的とした将のことだ。艦娘たちは妖精と呼ばれる謎の存在によつて作られ、艦娘たちが作られる施設を工廠と呼ぶ。

工廠の中でどうやつて艦娘たちを建造しているのか、それは提督である自身たちには分からぬが、とにかく艦娘たちは工廠で作られる。

秘書艦とは文字通り、提督の秘書を勤める艦娘であり、第一艦隊旗艦を勤める艦娘が秘書艦を兼任することが通例らしい。

提督が今言つたのは、つまりその秘書艦を建造させている、と言うことだ。

自身が待つっていた一時間の間でそんなことをしていたらしい。ただ珈琲飲んでいた

だけなんてことは無いとは思っていたが…………。

「これから向かう先にいるのはキミの…………キミの部下となる艦娘だ。ほぼ全ての提督にとつて最初期の艦娘とは特別なものだ。何せ最初期のまだろくな艦隊も組めていないころからの…………ある意味最も大変な時期を最も長く共にすることになる存在なのだから。妖精たちは気まぐれだからな、どんな艦娘が来るかは分からんが、それがキミにとつて生涯に渡つて共に歩めるものであるよう、祈らせてもらおう」

工廠へと足を向けようとした自身の背に、そんな提督の言葉がかけられる。

特別、確かに特別だ。何せ初めて自身の采配で動かすことになる最初の部下だ。歩を進めていた足を止める。振り返り、珈琲を片手に微笑む提督に問いを投げかける。

「提督にとつても、特別、ですか？」

自身が最も尊敬する提督。その彼にとつても最初の艦娘とは特別だったのか。その答えは。

「ああ、勿論だとも…………私の秘書艦は私の着任からずつと彼女だけだよ」

その答えに。その笑みに。その思いに。確かに自身の心まで届くものがあつた。だから。

「…………行ってきます」

そう呟き。

「ああ、行つてらつしやい」

そう返した。

\* \* \*

「いやーそれにしても、受付さんの珈琲は美味しいね。ウチの秘書じやこうは行かない  
ね」

「そんなにも不知火の淹れる珈琲は不味いでしようか」

「いや、不味いとは言わんが、どうにも薄……い…………不知火さん?」

「はい、不知火ですが、何か?」

「何故こちらに主砲を構えているのでしょうか?」

「出かける前、不知火は再三申したはずですが? また迷つてはいけないので、先導に數  
人連れて行くよう、と」

「あ、いや…………大丈夫だと思つてだな」

「その結果、一時間もあの子を待たせたのですか?」

「…………いや、そのだな…………えつと」

「提督」

「…………なんだ？」

「何か遺言はありますか？」

「問答無用で死ぬの俺?!」

「それが遺言ですか」

「ちよ、ま…………ア――――ツ」

…………。

…………。

…………。

「ふう、不知火の愛は相変わらず痛いな」

「愛…………？」

「そんな冷めた目で見るなよ、照れるだろ」

「…………ハア、バカ」

「ん？ 何か言つたか？」

「いえ、何でも。それより勝手に他人の鎮守府で建造なんてして、越権行為だと思われますよ?」

「それで俺と同じ間違いを犯したらどうするんだ」

「ああ……資源全てつぎ込んだんでしたね、補給もままならなくて大変でしたね、あの頃は」

「う…………いや、まあすまん。と、とりあえずだ。最初期は全資源初期値で回すのが最適だつたと後になつて気づかされたからな、俺と同じ轍を踏ませるないためにも、最初の艦くらいはこちらで用意してやろうと思つたんだよ」

「そう言うところは相変わらず心配性ですね。司令」

「愛弟子の独り立ちなんだ、ちょっとくらい世話を焼いてやつたつて、罰は当たらんだろう？」

「…………全く」

「ハハ…………楽しみだろ？ これからあいつがどう成長していくのか」

「まあ…………否定しませんが、そろそろ帰りますよ、もうあの子だつて一人の提督なのですから」

「分かつてている…………だから、お節介はこれで最後だ」

「…………」

「頑張れ、辛くとも、苦しくとも、悲しくとも、痛くとも…………お前の隣にいる彼女たちと共に、乗り越えろ、踏み越えろ、歯を食いしばって進め、そうして共に成長していく。それが…………提督だ」

「……………司令、格好つけても誰も聞いてませんが?」

「……………嫁がセメント過ぎて泣ける」

「誰が嫁ですか……………司令?」

「ケツコンしたなら嫁でいいだろ?」

「カツコカリが抜けています」

「不知火、俺のこと嫌い?」

「いえ? 愛していますよ? 司令」

## 二話 新人提督が弥生と出会つたりする話

ゆっくりとした足並みは、やがて先を急ぐように早歩きへと代わり、最終的に全力で工廠へと走る。

早く、早く、一刻も早く自身の初めての艦娘を迎えてやりたかった。

鎮守府内はそれなりに広いが、それでも全力で走れば工廠まで一分とかからない。すぐにその入り口にたどり着き、重々しい金属扉をゆっくりと扉を開いていき。

扉の向こう側に、一人の少女がいた。

艦装を持つている、と言うことは艦娘だろう。紺のセーラー服、薄紫色の髪色、月を模つた髪飾り、艦装に括られたボロボロになつたりボン。

扉を開ける音に気づいたらしい少女がこちらを振り返る。

無表情、と言つた言葉が出てくる。

こちらの姿を確認し、それでもぴくりとも変化しない表情。

眉根をひそめたようなその表情は、見ようによつては怒つているように見える。

自身の艦娘、その様子に僅かに呆然としていると、少女がゆつたりとした歩みでこちらへとやって来て。

「初めまして、睦月型駆逐艦三番艦『弥生』…………」

少女…………弥生は、びくりとも表情を変えることなく、そう告げた。

\* \* \*

場所を移して執務室。

今日初めて入ったその部屋は予想以上に何も無かつた。

何も置かれていない部屋、新設されたばかりの鎮守府だけあって、部屋の中は埃一つ落ちておらず、綺麗なままにされており、家具類も置かれていない開放感のある空間だけがそこにあった。

だからこそ、部屋の片隅に積まれたダンボールだけが異常に目だっており、僅かに眉目をひそめた。

一緒に部屋に入ってきた少女…………弥生は、けれどその光景を無表情に、無感情に見つめるばかりで、口を閉ざしていた。

「さて…………とりあえず、改めて言わせてもらうけれど。ようこそ、我が鎮守府へ」

部屋の中央に立つて、それから弥生へ向かつて振り返り、そう告げる。

「改めまして、駆逐艦弥生です。どうぞよろしくお願ひします」

ペコリ、と頭を下げる弥生だが、けれどその表情は相変わらず硬い。  
何か粗相でもしただろうか？ と自身に問い、けれど答えは出なかつた。

「貴君がこの鎮守府初の艦となる、これから何かと長い付き合いになるだろう、どうぞよろしく頼む」

「了解です。こちらこそ、司令官の采配に期待させていただきます」

言葉こそ友好的だが、どうにも表情が気になつた。一見すると怒つてているようにも見えるが……。

「一つ尋ねたいのだけど、私は貴君に何か失礼をしただろうか？」

「え？」

表情こそ変わらないものの、その声音はどこかきよとん、とした雰囲気を伝えてくる。

そうして、やがて、ああ、とどこか納得したような声で呟き。

「え…………？ 弥生、怒つてなんかないですよ？ ……………すみません、表情硬くて」  
どこかしゆん、と落ち込んだ様子の声音にようやく理解する。この弥生と言う少女は、単純に感情を顔に出すのが苦手なだけなのだと。

「ああ、すまない、私の勘違いなら良い。とにかく…………だ。弥生、これからよろしく頼んだ」

「はい…………よろしくお願ひします。司令官」

それが自身と、弥生との、あまり良好とは言えない、最初の出会いだつた。

\* \* \*

提督としてこの鎮守府に着任し、念願の秘書艦も出来た自身の最初の仕事は、鎮守府の内部を見て周り、各施設を覚えることだつた。

秘書艦として同行している弥生と共にまず最初にやつてきたのは……。

「船着場…………ですか……」

先ほどより強くなつた風に髪を抑えながら弥生が呟く。

そう最初に来たのが先ほどまで上官を待つっていた船着場である。

その上官はと言えば、秘書艦の不知火が連れて帰つたらしい。

まあそれはさておき、船着場は文字通りの意味で使われることもあるが、それ以上に。

「弥生たちはここから出撃することになる…………そして、帰つて来た弥生たちを迎えることになるのも、ここだ」

暗に生きて帰れと言う。また初の出撃すら済ませていないのに、早計だと思われるかもしれないが、それでも自信の提督としての信条は伝えておきたかった。

「これから先、どんな相手と戦うのかは分からぬ。だが生きろ、必ず生きて帰れ。そう

すれば、次は勝てるよう、勝たせることができるよう最大限の努力をしよう」  
だから帰つて来い。そう告げた自身の言葉に、やはり表情を変えずに、けれど声音を  
変えて。

「了解です」

しつかりとそう呟いた。

船着場を離れ、次に向かつたのは補給所だ。

艦娘が深海棲艦と戦うには、二つのものが必要となる。

一つは燃料、一つは弾薬だ。空母の場合そこにさらにボーキサイトが加わるが、今は  
割愛するとして、艦娘たちは戦闘へと出向くたびに、燃料と弾薬を消費し、尽きれば戦  
闘能力を完全に失うことになる。

一人の艦娘が連續して戦闘できるのは3戦から4戦までと言われており、それ以上は  
戦闘能力を失つたただの的でしか無くなる。

そこで、海域から帰投した艦娘に燃料と弾薬を補給するのがこの補給所だ。  
「ところで、燃料つてどうやつて補給してんの？ 給油口とか無いように見えるが」  
「飲みます」

「え……」

「コップで…………きゅうと」

くいつ、くいつ、と空手でコップを傾けるような動作を見せる弥生に、思わず目を見張る。

「えつと…………何、ですか」

心なしかジトつとした目でこちらを見つめてくる弥生。主にまなじりが数ミリほど上がっているような…………気がする。

「怒ってる？」

「怒つてません」

怒つてはいない、が、声音から判断するに何か呆れられているような気もする。

と言つてもなんとなくそんな気がする、と言う程度ではあるし、何に呆れられているのか分からないので、恐らく氣のせいだろうが。

「まあ、ここは私が、と言うより主に弥生たちが世話になる場所だな」

気を取り直しそう言うと、ですね、とだけ弥生が呟く。

「補給は、しつかりしないと…………戦えません」

燃料が無ければ動くことに大幅に制限がかかるし、弾薬が無ければそもそも敵を攻撃できない。

実際、燃料が尽きても水上を歩いて帰るくらいはできるらしいが、例えるなら手漕ぎ

の船とエンジンのついた船くらいの速度の違いが出るらしいので、移動より寧ろ戦闘中敵の攻撃を避けるのに燃料は必須らしい。

つまり補給はある意味、艦娘たちの生命線なのだ。そう考えればこの補給所の重要性もわかるというものだ。

「そうだな……………補給は重要だ」

そうして補給所にいた妖精たちに適当に挨拶しながら、次へと向かつた。

そうして次にやつてきたのが……………。

「……………風呂？」

「入渠施設です」

何言つてるんですか、みたいな視線を感じたが、これは仕方ないだろう。

だつてどう見たつて風呂だ。浴槽を満たした液体が抹茶のような色をしていることと浴槽が二つあることを除けば、人間の風呂そのものである。まあ艦娘は人型であるし、こう言つた施設があるのも当然……………なのか？

入渠施設は傷ついた艦娘たちを修理するための場所だ。艦娘たちへのダメージの度合いを指して、小破、中破、大破の三種類を用いるが、入渠施設はそのダメージに度合いに応じて時間を必要とする。

また入渠の際に、ダメージに応じただけの修復のための資源を必要とし、それには主に燃料と鋼材を用いる。

艦娘たちには様々な艦種があるが、駆逐艦や潜水艦が最も必要とする時間と資源が少なく、戦艦や空母と言った重武装艦が必要とする時間と資源が多い。特に、噂にだけ聞く大和型戦艦などを大破させた時は、まだ開かれたばかりのこの鎮守府に備蓄された資源など一瞬で消し飛ぶほどの量を必要とするらしい。

もしかして最初の艦が駆逐艦だったのは、提督なりの気遣いだったのかもしれない。修理に必要な時間も資源も非常に少ない、まさに運営されたばかりの鎮守府には優しい艦だ。

と、それはさて置いてまあ、ふと疑問に浮かんだことを尋ねてみる。

「ところで、弥生たちは普通の風呂には入らないのか？」

確か事前に見た鎮守府の館内図の中の艦娘たちの個室にはそう言つたものは無かつた気がするが。

「入りますよ、こつちは修復の時に入るだけですから。修理の必要無い時は普通に入ります」

「なるほど…………その辺りは普通の人間と変わらないな」

そう言えば大浴場が一つありりやたら大きいなと思つていたがもしかして鎮守府に

勤務している人だけではなく、艦娘たちも入るためのあのサイズなのだろうか？

こうして思うことは、思つた以上に艦娘のことを知らない、と言うことだ。

上官である提督の元で修練していた時は、戦術的なことや、鎮守府の運営方法などばかり習い、こう言つた艦娘たちの日常的な部分は習わなかつたからこそこうして次々が明かされる事実に驚く。

だがこれはこれで構わないのではないか、とも思う。

初めから相手のことToOne方的になんでも知つてゐるのでは対等な付き合いとは言ひがたい。

互いに知つて知られて、そうやつて互いの理解を深めていくのがコミュニケーションであり、相互理解と言うものではないだろうか。

だからこそ、自身は口を開く。そして、こう告げる。

「弥生…………」ちらから聞いてばかりでは何だ、そちらからも何か聞きたいことはあるか？」

その問いに、弥生は一瞬意図を測りかねるような、そんな怪訝な雰囲気を醸し出していたが、さらに数秒考えこみ、ようやく口を開いた。

「では…………一つ、良いですか？」

「言つてみて構わない」

発言を許可し、けれど弥生は数秒躊躇つたように、俯き。けれど決心したように顔を上げて、こう告げた。

「あの…………お腹、空きました」

直後、ぐううう、と音がする。

目をぱちくり、とさせる。弥生は相変わらず無表情だったが、その頬が僅かに赤みを帯びている。

「つ、く、あはは」

思わず笑いがこぼれ出す。だつて仕方ないではないか、先ほどまでのどこか重かつた空氣で、まさかあんな発言が、しかもあんな無表情から飛び出すとは思わなかつた。

「…………司令官、笑わないで、ください」

「ふい」と顔を背けながら弥生がそう呟く。けれど横を向いていても先ほどよりも赤みを増した頬が良く見える。

「ああ、悪かった…………そうだな、私も朝食は軽く済ませただけだったからな、そろそろ昼になるし、昼食としようか。確か普通の食事も出来たはずだつたな？」

以前に上官のところの艦娘が普通の食事をしているのを見かけたことがあつた。見た限りでは人間と同じものを食べていたので、恐らく普通の食事もできるのだろうと予想し尋ねれば弥生がこくり、と頷く。

「では次は食堂に行こうか」

「ん…………了解です」

そうして二人で食堂へ向かおうとし、足を止める。

「艦装は置いてこようか」

「あ…………はい」

重い（だろう）艦装を途中の執務室へ置き、食堂へ向かうその道中の弥生の足取りは、今まで一番軽そうだった…………多分、色々な意味で。

ちゆるちゆると、隣で弥生がうどんを食べているのを眺める。

すでに半分近く食べているのに、揚げが丸々残つているところを見ると、どうやら好物は最後まで残しておくタイプらしい。

黙々と箸を動かす弥生の姿を微笑ましく眺めながら、カレースープーンで大皿に盛り付けられたオムライスを掬い、一口。しつかり味のついたチキンライスとふわふわトロトロの卵、たつぶりとかけられたデミグラスソースが口の中で溶け合い、至福を生み出す。デミグラスソースの上から生クリームを垂らしてあるのがポイントだ、口当たりに若干の滑らかさがあり、いくらでも食べられる気がする。

ふと気づくと、弥生がじつとこちらを見ていた。こちら、と言うよりかはその下のほ

うの…………オムライスを。

「食べたいのか？」

そう尋ねた途端、はつと我に返ったようにぶるぶると頭を振り、うどんへと視線を落とす。

くすり、と笑う。表情のせいか、どうにも感情を読みにくいと思っていたが、外見相応の年齢的な感情はあるようで、少しばかり安心した。  
箸置きの中に一緒に入っているスプーンをもう一つ取り出すと、大皿に添えて、そつと弥生のほうへと差し出す。

「一口くらいなら食べていいぞ」

箸を止め、ジッと自身に差し出されたオムライスを見つめ、そうして自身を見る。

そのまま数秒、互いに見つめあい。やがて、弥生がスプーンを手に取る。

「もらっちゃって、いい…………ですか？」

「ああ、構わない」

そう返すと、弥生が礼を告げ、手に持ったスプーンでオムライスを掬い、ぱくりと口に含む。

「ん…………美味しい…………です……」

そう言って、

弥生が、  
微笑んだ。

「ぱちくり、と目を何度も瞬かせる。すでに弥生の表情は元の無表情に戻っている。

夢？　いや、幻？　そんなことを思つてしまふぐらいには、驚かされた。  
そんな自身の様子に気づいた弥生が怪訝な様子でこちらを見てくる。

「どうか……しました……？」

「いや、何でも無い」

取り繕つた自身の言葉に、けれどそうですか、とだけ呟き弥生が大皿を返してくる。  
「もういいのか？」

「はい……………それは司令官のですから」

足りなければ適当に追加注文するので食べても構わないのだが。  
そんなことを考えていると、弥生が、それに、と言葉を続ける。

「次に来た時、自分で頼むことにします」

だから、次に来た時のお楽しみです。そんな弥生の言葉に、そうか、と言つて笑う。  
「じゃあ、今食べるのには勿体無いな」

「はい」

そう言つた。

そんな自身言葉に、相も変わらず表情は動かなかつたが、どこか楽しげな様子で。

### 三話 新人提督が工廠で建造したりする話

「建造するぞ」

鎮守府に着任して、早三日。朝一番から目の前の弥生にそう告げた。

告げられた弥生は、と言えばいつも通りの無表情で、了解です、とだけ呟いた。

「それで……配合、どうしますか？」

尋ねる弥生の言葉に、自身は、さてどうするか、と心中で呟いた。

建造、とは。以前も言つたが艦娘を新しく作ることだ。

鎮守府内でも特に大きな工廠の中の一一番奥にある製造ラインで妖精たちの手によつて艦娘は作られる。それが建造だ。提督ですらその詳細は知らない、まさに妖精たちと艦娘たちだけが知る秘密の場所である。

基本的に提督の命令で妖精たちは建造をする、つまり提督が鎮守府の最上位ではあるのだが、その提督をして、建造の様子をることは上から禁じられている。理由としては、建造は艦娘を作る不世出にして門外不出の技術であり、その技術を知るものは極々一部のものだけに限定されるべきだからだ。

秘密を共有する人数が多いほど、秘密は外部へ漏れやすくなる。どれだけ厳重に守ろ

うとしてもどれだけ漏洩に注意を払つていようとも、だ。

だつたら最初から知る人間を限つておけば良い。もし漏れ出したなら、犯人の特定は非常に容易になる。

つまり、この禁は提督の身の保障と等価だ。決して知つてはならない。だがもし漏洩したとしてもその身は疑わない、と言う交換条件だ。

さて、その話はさて置くとして建造には必要なものが5つある。

一つは燃料、一つは弾薬、一つは鋼材、一つはボーキサイト、そして最後の一つが開発資材。

基本的に開発資材は一度の建造に一つが基本故に、残りの四種類、燃料弾薬鋼材ボーキサイトの組み合わせを通称レシピと呼ぶ。レシピとはつまり、先ほど弥生が言つた配合の割合だ。

艦娘を作る必要最低限の資源は燃料弾薬鋼材ボーキサイト各30ずつと言わ正在いる。

オール30は最も基本となるレシピであり、上官の提督が最初にこれで回し、建造されたのが弥生だ。

このレシピは駆逐艦が最も良く出るレシピであり、時折軽巡洋艦なども出る。極々稀にそれ以外も出るのだが…………まあ、本当に稀過ぎてほとんど報告も無いの

で、気にしなくても良いだろう。

他にも戦艦や重巡洋艦が良く出る戦艦レシピや正規空母軽空母が良く出る空母レシピなどもある。

戦艦や重巡洋艦、空母は強力な戦力であり、いるのといいのとでは、天と地ほどの差があると言つても過言ではない。

では、ここは戦艦レシピを回すべきか？　と言われると否と言わざるを得ない。

何故ならあるものが足りないからだ。

それは自身が上官の元で学んだことの一つであり、自身が上官を尊敬している理由の一つがここにある。

上官である提督の鎮守府はすでに何年もの間前線で戦い続けてきた猛者ぞろいであり、その中には戦艦も正規空母もいる。そうなると必然的に増えるものがある。それこそは自身が戦艦レシピを回さない理由であり、多くの戦艦、正規空母を艦隊に抱える提督たちが悩むもの…………それは消費だ。

艦娘は戦えば燃料と弾薬を消費する。傷を負えば燃料と鋼材を消費して修復を行う。

同じ駆逐艦ごとに一概に同じには出来ないが、例として駆逐艦が一度の戦闘で消費する燃料と弾薬を凡そ10とする。すると、戦艦が一度の戦闘で消費する燃料と弾薬はその5倍以上にもなる。

つまり、戦艦が一度戦うための資源で、駆逐艦なら凡そ5戦はできるのだ。

さらに修復に必要な鋼材も問題だ。例え駆逐艦が大破したとしてもその修復に必要な鋼材は20から30、多くても40行くか行かないかといったところだろう。だが、戦艦が大破すれば一度に200以上、酷いときは500近くの燃料と鋼材を必要とする。

最強の戦艦との呼び声高い大和型戦艦など、一度の修復で四桁の資源を必要とするこ  
とすらあると言う。

正規空母も同じように大量の燃料と弾薬、鋼材を消費する。その上さらに、空母の名  
の通り、艦載機を使用し戦う彼女たちは戦闘中に撃ち落された分の艦載機をボーキサイ  
トを使つて補充する。

正規空母が一度に積める艦載機の数は七十から八十程度であり、一戦ごとに撃ち落  
される艦載機は五から十。そしてその艦載機一つにつき、凡そボーキサイトを5ほど消  
費する。つまり、一戦ごとにボーキサイト25から最大でも50ほど消費して戦うこと  
になる。

因みに言えば、今現在の我が鎮守府に与えられた資源は燃料、弾薬、鋼材、ボーキサ  
イト全て400ずつだ。

これでも他の提督より僅かに多い、上官の計らいである。他の鎮守府はだいたい30

〇前後らしい。

上官の行つた建造により、全て30ずつ消費されてはいるが、残りは370。一応毎日多少の資源は届けられてはいるが一日100前後と言つたところ。つまり、今の自身の鎮守府に戦艦や正規空母を運営できるような能力は全く無いと言つていい。

一度や二度戦闘させることはできるだろうが、それをすれば鎮守府中の資源が空っぽになる。

そして、だからこそ、その戦艦空母を多数使つて戦闘を何度も繰り返す上官は強いのだ。

それができる理由は、簡単だ……遠征隊による強固な補給路の確保。

全ての提督は、最初は6隻編成の艦隊を一つだけしか持つことを許されない。それは無能な提督のもとで多くの艦娘が命を散らすことの無いように、と言う配慮であり、功績を挙げることで第二艦隊、第三艦隊、第四艦隊を作ることを許可される。

そして、第二艦隊以降を使つて行う遠征と言うものがある。

第一艦隊の主目的は深海棲艦の討伐を海域の保持、開拓であるとするならば、第二艦隊以降の目的は、それ以外の雑事の一切だ。

例えば海上運輸で油田地帯から燃料を運ぶタンカーの護衛、鎮守府などに物資を搬送

する輸送船団の護衛、海域の警備や時には強行偵察などの危険な任務に従事することもあるれば、観艦式などに参加する平穏な任務もある。

時折、第一艦隊の代わりに深海棲艦討伐や海域開拓へと赴くこともある、まさに何でも屋的なポジションにあるのが第二艦隊以降の艦隊だ。

そして遠征をこなすと報酬が与えられる。タンカー護衛をすれば燃料を譲渡してもらえ、輸送船団の海上護衛をこなせば燃料に弾薬、鋼材やボーキサイトなども報酬として支払われる。

そうした遠征をこなし、資材を溜めることで第一艦隊の戦力を縁の下で支えている。上官はそれが上手かった。普段からこの遠征を重視し、開拓海域の警備任務により安全性を確保し、海上の安全を確保されれば行きかう輸送船団も増えその護衛の仕事も増える。足りない資源があれば、とにかく遠征を使つて集めてくる。そう言う供給ラインがしつかりと出来ていた。上官自身の鎮守府に大量の資源を溜め込み、いざ、と言う時に普段から備えているお陰か、あの鎮守府ではここ数年は資源不足と言うものに陥ったことがない。

補給と修理のしつかりと行われた戦艦と空母は自身の最高のパフォーマンスを発揮し、そのコストに見合うだけの戦果を出し続け、そのお陰で上官の名が上がり、遠征の仕事が増えていく。

残念ながら今の自身の鎮守府には第二艦隊は無い。つまり毎日送られてくる資源と、後は大本営から与えられる任務の報酬。この二つでしばらくはやりくししていくしかない。

つまり結局、今の鎮守府の状況を考えるなら。

「オール30…………基本レシピでいこう。まだ始まつたばかりのこの鎮守府に必要なのは、数だ」

例えば、弥生単艦で出撃したとしても、所詮は駆逐艦、たかが知れている。酷い言ひ方だが、それでも戦力を過剰に評価することも過小評価することも、あつてはならない。提督なら自身の戦力くらいは正確に把握しておくべきだ。

例え駆逐艦でも、三隻、四隻と集まればそれはバカにできない戦力となる。夜戦で駆逐艦が戦艦を沈める、などと言う事例は過去にいくらでもあるのだから。

「あの司令官」

と、その時、弥生が自身に向かつて告げる。

「建造の……ラインが、まだ一つ使えないから、作れるのは…………一隻だけになりそう、です」

「何?」

建造ラインは、提督には秘されている、艦娘を建造するための製造工場のようなもの

だ。一つのラインから一隻の艦娘が製造され、基本的にどの鎮守府も二つ、多いところでは三つ、四つとある…………はずなのだが。

「建造ラインが一つ？　どうしてまた」

「まだ建造ラインを使うための、準備ができないそう、です」

「今日明日でどうにかなるのか？」

「昨日聞いた時、は。数日中にどうにかなる、とは」

何故提督の自身が知らないのに、弥生は知っているのか、と思つたが、昨日と言う言葉で思いだす。昨日工廠へと弥生を向かわせていた。恐らくその時に話たのだろう。

「なら仕方ない…………一隻だけでも構わない、とにかく建造を頼んだ」

「了解、です」

自身の言葉に弥生が頷き、そうして工廠へと向かうために、部屋を出て行く。  
さて、一体何が出てくるか。

オール30で作れる艦種はおおよそ四種類。

と言つても、主には二つだ。

一つは駆逐艦、そしてもう一つが軽巡洋艦。

駆逐艦の特徴と言えばとかく低コストであることだ。一戦ごとに消費する資源も少なければ、ダメージを回復するのに必要な資源も時間も少ない。自身のような駆け出し

提督には重宝し、新人提督なら誰もが最初の頃は駆逐艦で艦隊を作つてゐるだろう。とかく速度が速い。全艦種中最速の航海速度を持ち、駆逐艦島風はその中でもさらに速い最速で40ノットと言う脅威の速度を誇る。

軽巡洋艦は最強の対潜攻撃能力を持つ艦種だ。駆逐艦に次いで低コストで運用しやすい。ただ砲火力も駆逐艦の次くらいには弱いので、重巡洋艦、戦艦など強固な装甲を持つ敵相手には弱い。と言つても、近年改修と改造により、重巡洋艦に匹敵するほどの火力や装甲を持つもの出てきたようだ、今は割愛する。

出てくるとすればこの二種類の艦種のどちらかになるだろう。

一応三種目を言つておくと重巡洋艦だ。先ほどはああ言つたが、それでも重巡洋艦の力は侮れない。

この鎮守府近郊では相当な戦力になることは想像に難くなく、厳しい資源のやりくりが求められるが、それでも大幅な戦力増強に見合うものではあると思つている。

と言つても、このオール30レシピで重巡洋艦が出ることは非常に稀であり、あまり無い。今回は考へる必要は無いだろう。

そして、四種目だが……。

こればっかりはあまりにもあり得ないので言及を避けようと思う。

何せ大本営からの任務にある建造をこなすため、ほぼ毎日オール30レシピが数百と回されているが、報告されたのはたつた一度だけと言う数千分の一以下の確率と言うあまりにも希少すぎるもの故、考える必要は無いだろう。正直重巡洋艦が出るほうがまだ現実的と言つていい。

書類仕事を片付けながらふと時計を見る。時間にしてそろそろ二十分少々。もし駆逐艦ならばそろそろ建造されていてもおかしくはないが…………。  
と、その時。

とんとん、と執務室の扉がノックされる。

「入れ」

そう告げると、扉が開かれ、立っていたのは予想通り弥生。

扉を閉め、自身の座る提督のデスクの目の前まで来ると、口を開く。

「司令官、新しい艦が竣工です」

時間を見る、ちょうど二十分少々と言つたところ、どうやら駆逐艦のようだった。

建造に必要な時間は艦種ごとに異なるが、駆逐艦は全て十八分から三十分の間に收まる。軽巡洋艦と重巡洋艦は最低一時間以上建造に時間がかかる。  
つまり、今回は駆逐艦と言うことだろう。

そう、思つていたのだ。

「こつちに、呼びますか？」

弥生の言に、首を振つて否定し、椅子から立ち上がる。

「いや、こちらから向かおう。書類仕事もようやくひと段落ついたところだからな」

軽く肩や首を回し、凝つた筋肉をほぐしてやると、弥生のほうを向いて告げる。

「弥生と共に戦う仲間だ、一緒について来て挨拶すると良い」

了解です、と短く頷き、弥生と共に工廠へと向かう。

工廠は執務室からそれほど遠くなく、執務室を出て少し歩けばすぐそこだつた。数日前も開けた重々しい鉄扉を、今度は弥生と共に並んで潜り、工廠へと入る。そうして、そこにいたのは……

「伊号第一六八潜水艦よ、呼びにくいならイムヤで良いわ、よろしくね、司令官」

水着の上にセーラー服の上だけを着た赤い髪の少女だつた。

伊号第一六八潜水艦。

そう、潜水艦である。

先ほどは言及を濁した、オール30レシピで出る四種類目の艦種、それが潜水艦だ。

報告件数たつたの一件。

正直、虚偽申請…………デマだつたのではないか、とさえ言われている超々低確率で

建造される艦、それが潜水艦だ。

つまり目の前の少女は、その潜水艦であり。

どうやら駆逐艦一隻の鎮守府に次にやつてきたのは、いきなり潜水艦などと言う難物らしく。

幸運を喜ぶべきなのか、それとも不幸を嘆けばいいのか。

どうにも表情に困った。

## 四話 新人提督が初めて出撃させたりする話

潜水艦。

文字通り潜航できる軍艦である。民間船などが潜水機能を持つても、潜水艇と呼ばれるので、潜水艦とは本当に、潜航できる軍艦のみを指す。

日本における第二次世界大戦中の潜水艦は大きく二種類に分けられる。  
それは即ち、海大型潜水艦と巡洋型潜水艦の二つだ。

伊168。

もつと詳細に言えば、海IV型a1番艦伊号第一六八潜水艦。

昨日自身の艦隊に加わった艦娘である。

弥生に続く二隻目の艦……なのは良いのだが。

「潜水艦……………潜水艦か」

そう、その艦種が問題なのだ。

オール30レシピでの建造艦の建造報告はたつたの1件、デマ情報だなんだと言われていたが、それ以外の俗に言うレア駆逐艦レシピ、上位駆逐艦レシピと呼ばれる配合に

てはそれなりの数の建造が確認されている。

つまり、運用する上で、それなりのデータはある、と言うことだ。そしてデータがあるからこそ、頭を悩ませる。

この潜水艦と言う艦種。

一言で言うならば…………キワモノだ。

まず潜水艦には砲が無い、主砲は勿論だが、副砲すらない。故に砲撃戦には参加できない。

使うことのできる兵装は魚雷のみ。その魚雷も有る程度熟練してこないと多くは持てず決定打を撃てるほどの火力が出ない。

耐久値も低く、装甲はほぼ紙だ。その上、回避もお世辞にも高いとは言えない。これだけ聞くと欠点だらけのように聞こえるが、潜水艦がキワモノたる最たる理由は別にある。

潜水艦は、戦艦、空母からの攻撃を一切受けない。

そもそも通常の弾薬や爆薬などでは海中に潜む潜水艦にまで攻撃が届かない故に、戦艦、空母には滅法強い反面、対潜装備を施された駆逐艦や軽巡洋艦などを相手にするとその紙装甲と回避性能の低さを遺憾なく発揮し、あつさりと沈められる。

そしてここが最も重要なのが、潜水艦を他の艦種と共に出撃した時、潜水艦を攻撃

できる駆逐艦、軽巡洋艦、重雷装巡洋艦などは他の艦隊に見向きもせずに、真っ先に潜水艦だけを狙つてくる。こういう言い方はなんだが、囮としては非常に有用で、練度を高めた潜水艦を運用すれば、一切の被害も無く一方的に敵を攻撃することすら可能になる、らしい。当たらなくともそれでも潜水艦だけを狙うあたり、深海棲艦側にとつても潜水艦はそれだけ脅威となるようだつた。

そう、脅威なのだ、潜水艦と言うものは。

海中と言うその存在を知覚すらできない場所から突然魚雷がやつてくるのだ、全く持つて恐怖である。

水中探信儀、通称ソナーと呼ばれる装備があればその存在をはつきりと知覚することができるのだが、生憎ながらこれが簡単に手に入るような装備ではない。

つまり、上手く運用できればかなり強力な艦であり、逆に使いこなせなければ、あつさりとやられてしまう艦もある。

そしてこの場合の効率的な運用と言うのは、戦艦等強力な艦を組ませることにより潜水艦がやられる前に敵を全て片付けてしまう、もしくは、潜水艦の艦隊を作つてしまふなどと言うものであり、少なくとも、駆逐艦一隻と組ませるような艦種ではないことだけは絶対に確かである。

だが出てしまったものは仕方ない、とため息をつく。

現状、イムヤを使わない、と言う選択肢が無いのも事実だ。

それほど潤沢な資源があるわけでもなければ、艦数が揃っているわけでもない。

今はとにかくあるものだけでも使うしかない、と言つたところだ。

そう、使うしかないのだ。

こんなものが着てしまつたからには。

出撃命令、そう書かれた一枚の書状に、思わず顔を顰めた。

\* \* \*

「出撃するぞ」

その言葉に、秘書として執務室にいた弥生が少しだけ眉をひそめる。

「司令官…………まだ艦隊に、一人しか、いないけど」

そう、昨日の衝撃の建造から一日経過して、未だに次の建造は行われていない。

理由は色々あるのだが、主な理由は回数だ。

大本営から言い渡されている任務の中に、一日一定回数の建造と言うものがある。

ノルマ数を達成することにより、大本営から資源や資材を報酬として渡されるのだが、このノルマ数が1隻、その次が4隻なのだ。そしてこのノルマ数は翌日に持ち越し

たりはできないので、その日のうちに終らせる必要がある。

オール30レシピとは言え、三度も回せば全資源90、鎮守府の資源の四分の一にもなる。それをさすがに躊躇したのが最大の理由だつた。

そうして、明けて翌日の今朝、上官の鎮守府経由で大本営から通告が来ていた。  
出撃命令、そう書かれた一枚の書状。

机の上に広げられたその書状に、弥生が無表情に目を通していく。

「なんですか……これ？」

無表情に、けれどどこかきつい目つきで弥生が自身を見つめてくるので、お手上げと言わんばかりに両手でひらひらとさせながら答える。

「出撃命令…………どうやら着任から四日、出撃も演習もしなかつたせいで、何やつてんだ、とせつつかれてる」

じー、と弥生がこちらを見てくるが、これを送ってきたのは大本営だ。こちらを見つめられても困る。

とにかく、と机の上に置いた紙を机ごと叩き、自身の考えを告げる。

「まだ早計かと思っていたが、これも一つの切欠だと思っている。この鎮守府の戦力を正確に把握するためのな」

自分がこれまで見てきたのは、上官のところにいた、すでにある程度以上育つてしま

まつた戦力だつた。

生まれたばかりの練度の低い艦娘と言うのをあまり見たことが無い以上、その力がどれだけ強いのか、どれだけ弱いのか、今一把握しきれていない部分もある。

「いきなり実戦で大変だとは思うが、やつてきてくれるか?」

こちらも弥生の目を見つめ返し、そう告げる。

まだ二人とは言え、弥生は艦隊の旗艦だ。

その弥生が、どうしてもまだ早いと言うならば、大本営に掛け合つてでもこの出撃を止め、上官に頼んで演習にでも切り替えてもらおうと思つていた。

そうして沈黙のまま数秒が過ぎ、弥生がゆっくりと口を開く。

「命令……ですか……?」

その言葉に、こちらも言葉を返そうとし………口をつむぐ。

それは気づいてしまったからだ、上官のところにいた頃は気づけなかつた。

生と死がかかつた戦場に目の前の少女を送り出す、その決定が自身によつて行われるのだと、そんなことに今さら気づいたのだ。

艦娘とは兵器だ。だが同時に感情のある人間と同じ存在でもある。

この数日の間、共に過ごしてきた目の前の少女を、自身はこれから自身の言葉一つで戦いに赴かせる、そう思うと、一瞬言葉が出なかつた。

けれど、けれど…………だ。

同時に思う。何故今まで気づかなかつたのか。

出撃自体は上官のところで何度も見ていた。上官が出撃を命令しているところも。どうして上官はあんなに簡単に命令を言えたのだろう？ 上官は決して情の薄い人ではない、と言うか艦娘を人間と同等に考えている節すらある。その上官がどうして、自らの艦娘たちをあんなにあつさりと戦場に送り出せるのだろうか？ そう考え、けれどすぐに答えに行き着く。

信じて いるからだ。

自分の艦隊を、立派に戦つてくれる、けれどちゃんと生きて帰つてしてくれる。

そう信じて いるから、あんなにも簡単に命令することができるのだ。

目の前の少女を見る。その目を見る。共に過ごした数日を思い浮かべる。

自分はこの少女を信じることができるか？

そんなもの、答えは決まつていた。

「命令だ、本日中に弥生はイムヤと共に鎮守府近海に出撃せよ」

その自身の言葉に、弥生が無表情のまま、けれどその目に確かに力を込めて。

「了解…………です……。弥生、水雷戦隊、出撃です」

そう告げ、部屋を出て行こうとしつづけ。

「弥生、一つだけいいか？」

足を止める。振り返る、無表情なので顔には出ていないが、けれどどこか、どうしたのだろうか、と言つた訝しげな様子が伺える。

「出撃して最初の敵と戦闘になつたら…………その時点で帰つて来い」

「最初の敵と戦つたら、その時点で、ですか？」

弥生が僅かに戸惑つたような声で尋ねてくる。その問い合わせに、自身はこくりと頷く。「弥生にとつてもイムヤにとつても、初出撃だ。まだ無理するような状況じや無い。だから、夜になる前に戻つて来い、いいな？」

たつた一度の戦闘だけとは言え、出撃しているのだ。大本營にも文句は言わせない。

戦力調査も小規模な出撃を何度も繰り返せば十分だ。

つまりここで無理して戦う必要性が全く無いのだ。

「無理して戦う必要性は無い、まだ始まつたばかりだからな、この鎮守府は」

そんな自身の言葉に、数秒弥生が考えこみ、やがてこくりと頷き。

「了解しました」

そう言つて、今度こそ部屋を出て行つた。

「…………頼んだぞ。弥生」

弥生の居なくなつた部屋で、そつと呟き。

「…………頼まれ、ました、司令官」

執務室を出た弥生が、そう呟いた。

\* \* \*

「イムヤさん、いらっしゃいますか？」

コンコン、と扉を軽く叩く。

鎮守府内にある艦娘に個々に与えられた部屋。正確には鎮守府の敷地内にある寮のような施設。

そこのとある一室の扉の前で、弥生がそう告げる。

そこは先日建造されたばかりの伊168の部屋だ。

艦娘は、基本的に仕事が割り振られていない時は、やることが無い。しかもいつも出撃や遠征の命令があるか、分からないので暇を潰すために鎮守府から出ることはできない。

なので、基本的に待機中の艦娘は自身の部屋にいるか、仲間の艦娘と一緒にいたりすることが多い。

とは言つても、まだこの鎮守府には弥生を含めて二人しかいない、その弥生は秘書艦

として提督といふことが多いのだから、必然的にここだろう、と扉をノックすると。

「はい、どちら様一？」

そんな声がすると共に、扉が開かれる。そうして、こちらの顔を見ると、破顔して口を開く。

「あら、いらっしゃい。どうしたの？　イムヤに何か用？」

「あの…………出撃、です」

どこかハイテンションなイムヤの勢いに押されつつ、弥生がそう告げると、ニイ、とイムヤが口元が吊り上げる。

「そう、伊号潜水艦の力、見せてあげる時が来たのね」

なんだか好戦的だな、と思いつつもいつも通りの無表情でそれを顔におくびにも出さず、弥生が続ける。

「今日中に戻つてくるように、とのこと…………なので、早いうちに、出たい、んだけど

「んふー。私ならいつでも出れるわ！」

そう言つて笑うイムヤの姿に。

「そう、ですか」

無表情に、弥生がそう呟いた。

弥生も、イムヤも、すぐに出撃しても問題なかつたので、工廠で艤装を装着し、海へと立つ。

「風、強い」

吹きすさぶ風に、長い薄紫色の髪を抑えながら弥生が呟く。

鎮守府近海の海上を低速で移動しながら周囲を見渡す。敵の姿は無い、最も味方の姿も無いが。

イムヤはすでに潜水して自身の後ろをついてきている。

潜水艦の最大のメリットは、敵に見つかりにくうことだ。不意を撃つた魚雷の一撃は敵に思わぬ大打撃を与えることがある。潜水艦を指して、究極のステルス兵器とは良く言つたものである。

「敵影…………無し」

見渡す限りの風景に敵の姿は無い。この鎮守府近海に敵の潜水艦はいないはずなので、本当に敵はいないのだろう。

出撃から一時間近く経過しているが、未だに敵との遭遇回数はゼロ。もう数時間で夕方になる、もしもそれまで敵と遭遇することが無ければ鎮守府に帰投したほうが良いかもしれません。

そんなことを、弥生が考えていた、その時。

「つ！」

視界の端にそれを捉える。ふと下のほうを見ると、イムヤの姿が見えた。魚雷をいつでも発射できるよう構えてこちらを見ていたので、こくり、と頷く。

顔だけの一つ目の化け物がそこにいた。

「深海……棲艦……」

駆逐イ級と呼ばれる敵。人類の、そして艦娘たちが討ち果たすべき敵。

それが、そこにいた。こちらを見ていた。そのたつた一つしかない、目らしき何かと視線が交差した。

「砲雷撃戦、いい？」

ちらり、と視線をイムヤへと向けると、向こうもこくりと頷いた。海中なので声は届かないしが、互いに言いたいことなどこの場面では一つしかない。

イムヤが浮上してくる。その勢いのまま海面に一瞬顔を出し、大きく息を吸い込む。

「急速潜航、行くわ」

呟いた言葉だけを残し、再度イムヤが先ほどよりも深く、潜っていく。

直後、潜水艦の存在を認めた敵のイ級がイムヤの姿を追つて砲撃を開始する。

「当たつて！」

その無防備な姿を狙い、12cm単装砲を撃つ。

撃ち出された弾丸はイ級へと着弾する、だがその攻撃は、イ級を仰け反らせる程度に留まつた。どうやらカスつただけらしい、と言つても元が装甲の低い駆逐イ級だ、それだけでも小破程度のダメージは受けている。

さらに近づく、燃料を燃やし、速度を上げる。

元々射程の短い駆逐艦の主砲よりさらに近いそこは。

「魚雷発射」

魚雷の当たる距離だ。

「魚雷一番から四番まで装填。さあ、戦果を上げてらっしゃい！」

海中のイムヤがそう呟いた。

海中に白い軌跡を描きながら、魚雷がイ級目掛けて発射される。

これで勝つた、そう…………思つた。

けれど、それが裏切られるのが直後の話。

イ級から白い軌跡が放たれた。

白い軌跡は真っ直ぐに、弥生へ向けて進んできて。

「……え……？」

そう、呴いた瞬間、激しい飛沫が上がつた。

## 五話 新人提督が弥生たちと作戦会議したりする話

ほんの僅かな気の緩み。

気づいた時には、もうすでに白い軌跡は目の前で。

その軌跡が敵の魚雷なのだと気づいた瞬間。

水面を蹴ったのと、魚雷が爆発するのは同時だった。  
激しい水飛沫に視界が塞がる。直後にやつてくる衝撃に体が弾かれ…………一メー  
トルほど下がつたところで、止まる。

数秒置いて、海中からイムヤが浮上し、こちらへとやつてくる。

「弥生?! 大丈夫?」

そう尋ねられ、改めて自身へのダメージを冷静になつて確かめる。

艦装破損箇所無し、身体へのダメージ軽微。直前に跳んだ分、爆発が遠のき結果的に  
ダメージは軽くなつたようだつた。

「えっと、損傷は……問題無い……レベル、です」

その言葉にイムヤがほつとしたように息を吐き、ふと視線を反対側に向けた。  
自身もそれを追うように視線をやると、そこに海底へと沈んでいくイ級の姿が見え

「……………帰りましょう」

「……………そうね」

敵とは言え、海へと沈んでいくその姿は、決して他人事とは言えず。出撃前はあれほどテンションの高かつたイムヤも、どこか気難しそうに目を細め、そう呟いた。

\* \* \*

「良く帰つてきてくれた」

港に戻ると、何故か司令官がいた。

どうして？ とも思つたが、すぐに出迎えてくれたのだと気づいた。

「司令官…………第一艦隊、ただいま、戻りました」

そんな弥生の言葉に、司令官が頷き、珍しく笑つた。

「おかげり、弥生、イムヤ…………よく帰つてきてくれた。見たところ傷らしい傷はなさ

魚雷の衝撃で多少ダメージがあつたので、そう言うと、司令官は鷹揚に頷き。

「ならすぐに入渠施設へ…………一応準備はさせておいて良かった。それから、夜八時に弥生もイムヤも両方執務室に来てくれ。<sup>ドツグ</sup>

そう言い残し、司令官が去っていくのを見て、首を傾げる。

「夜から、何かするの…………？」

「さあ…………何かしら？」

互いに顔を見合わせ、けれどその時になれば分かることかと、無傷だったイムヤは自室へ、そして多少とは言えダメージを受けた弥生は入渠へと向かった。

飛んで時間は夜八時。

部屋の中には、すでに自身、弥生、イムヤの三人が揃っていた。部屋の奥に置かれた提督の机の前に椅子を二つ並べて、弥生とイムヤを座らせ、自身はその反対側に座つている。

來い、としか言つてないからか、弥生もイムヤもこれから何をするのかと、怪訝な表情をしていた…………と思う、弥生は表情が変わらないので雰囲気からそういうじゃないかと思つた程度だが。

「さて、時間通り集まっているな、結構…………それでは、これより作戦会議を始めようか」

そう告げると、弥生、イムヤの二人が首を傾げる。

「作戦、会議…………ですか？」

「司令官、具体的に何を話し合うのかしら？」

そんなイムヤの問いに、一つ頷き答える。

「簡単に言えば、当面の鎮守府の方向性だ。まあとりあえず、一つずつ進めていこう。ま  
ずは今日の出撃についてだ」

そう言つて机の中から取り出したのは一枚のレポート用紙。

入渠施設<sup>ドツグ</sup>から出てきた弥生に書かせた、今日の出撃中に起こつた出来事を纏めさせた  
報告書だ。

「鎮守府近海を巡回中に、敵駆逐イ級と交戦、敵を撃沈するもこちらも魚雷を被弾、被害  
軽微…………となつてゐるな。まあ實際、入渠時間も短かつたようだし被害軽微と言う  
のは、正しかつたとして、だ」

こつん、と人差し指で机を突く。それから報告書から視線を外し、弥生とイムヤを交  
互に見て尋ねる。

「正直に言つてくれ、このまま出撃して、次はもつと遠くに行けるか？」

「無理ね」

言葉を濁した弥生に対し、きつぱりと断言したイムヤ。二人の言葉にやはりか、と思う。

「砲撃戦での火力不足、か？」

報告書を読んでいて思ったのはそこだ。潜水艦であるイムヤは砲撃戦ができない。砲撃戦での囮役はこなせても、そもそも絶対に当たらぬ魚雷だけは深海棲艦も無理に潜水艦に當てようとはしない、つまり残った弥生に全て飛んでいくことになる。

今回は敵単体だったから良かつたものの、二隻や三隻以上の編成の敵がやつてきていれば、それらの敵が撃つて来る魚雷が全て弥生に集中することになる。

「そうね、戦艦…………ないし、重巡洋艦が一人でもいたらそもそも被害を受けなかつたと思うわ」

先ほど言つたことの対策としては、味方の水上艦の数を増やすと言うものがある。

今は魚雷を撃てる対象が弥生一択だからこそ、全ての魚雷が弥生に集中してしまうだけ、他にも対象があれば、多少の運任せにはなるが、一隻増えるだけで確率的には50%変わる。

とは言つても、これは受身な考え方だ。一戦だけならともかく、二戦、三戦としようと思うのなら、もつと根本的な部分を変えなければならない。

それが今、イムヤが言つた戦艦、ないし、重巡洋艦である。

砲撃戦で距離が開いている状況で敵を撃ち落せるならそもそも雷撃戦に至ることすら無くなる。

つまりやられる前にやつてしまえ、と言う考え方である。とは言うものの。

「けど…………戦艦を運用する資源なんて…………無い、ですよね？」司令官

弥生の言う通り、運用する資源も無ければ、そもそも建造するための資源も無い。

俗に戦艦レシピと呼ばれるそれは、燃料400、弾薬30、鋼材600、ボーキサイト30の配合レシピだ。

現在の鎮守府は任務を消化したことにより多少の資源が増えているとは言え、燃料450、弾薬500、鋼材500、ボーキサイト500ほどしかない。

戦艦レシピを一回回すだけの余裕すら無いのだ。それではそもそも建造の仕様がない。

「まあ、もう一つ、選択肢が無くも無いがな」

そう言うと、弥生も、イムヤも、それはどうか、と言った表情をした。やつぱり弥生は無表情だったが、雰囲気的にそう言っている気がする。

もう一つの選択肢、それは燃料350、弾薬30、鋼材400、ボーキサイト350での建造だ。

基本のオール30レシピとも戦艦レシピとも異なるそれは…………

「…………空母…………ですか？」

…………空母レシピと呼ばれている。

文字通り、空母を建造できる…………かもしないレシピだ。

何故かもしれない、かと言えば、建造と言うのは非常に運要素が強く、戦艦レシピを回した結果がオール30で作れる軽巡洋艦だつたり、空母レシピを回した結果が同じくオール30で作れる駆逐艦だつたり、といわゆるレシピごとに当たり外れがあり、ハズレを引いた場合、無駄に資源だけを大量に消費してしまうことになる。

「回せるのは一回だけだが…………回せないものを考えるよりは現実的と言うべきか？」

正規空母と言えば、赤城、加賀などを初めとして、超がつくほど強力な戦力であり、その力は戦艦と比べても決して劣ることは無いだろう。だが消費する資源も戦艦と比べて全く劣らず、特に空母は戦艦や他の艦とは違い、ボーキサイトを消費する。ボーキサイトは他と比べ貴重な資源であり、集積しにくい。

そのため、空母を多く抱える鎮守府では、ボーキサイトは常に枯渇しがちなことも稀に良くあることだと言う。

基本的に一日ごとに配給される資源は燃料、弾薬、鋼材は一律なのだが、ボーキサイ

トだけは他の三分の一程度しか配給されない。

ボーキサイトは現在500、そこから350でなんらかの空母を出したとして、聞いた話によると一戦あたりのボーキサイト消費量は凡そ10～30、対空の高い敵と戦うと50を超えるらしいが、こんな鎮守府近海ではそうそういないうだろし、考える必要は無いとして、一戦あたり30と仮定すれば、5戦。10と仮定しても15戦でボーキサイトが尽きる計算になる。

「私として、その5戦ないし15戦の間に、第二艦隊の増設許可を取れるなら十分にアリだとは思っている」

第二艦隊を増設できたならば、遠征による資源入手が期待できる。

そうすれば燃料や弾薬、鋼材にボーキサイト……全ての資源が遠征によつて確保できる上に、高速修復剤……通称バケツや、高速建造剤……通称バーナーなども任務以外で獲得できるようになる。

ただしそのためには、第一艦隊とは別に、第二艦隊分の艦も作る必要性はあるが、第一艦隊と違い、戦闘を目的としない遠征ならば駆逐艦や軽巡洋艦だけでも十分にこなすことができる。

そうして資源が溜まるまで遠征を続け、出撃任務などは最低限にして、資源を溜め、第一艦隊を揃える。理想としてはこれなのだが、実際問題としては……。

「だが、あと五回戦闘しただけで第二艦隊の増設許可はもらえるのか？」

比較的容易だとは聞いている。だが、楽観で行動して、後で泣きを見るハメになるのは自身だけではない、自身の部下たる目の前の少女たちもだ。

そう考えると、迂闊な行動はできない、まあだからこそ、こうして話し合っているのだが。

「駆逐艦を増やす、と言うのは…………どうでしょう…………う？」

考えていると、弥生がふとそんなことを言つた。

その意見に、全員思案顔になる、例によつて弥生は無表情だが。

駆逐艦を増やす、確かにそうすれば安上がりだし、数も揃う。回すレシピはオール30で済むし、軽巡洋艦や…………もしかすると重巡洋艦が出るかもしれない。

だが…………もしかすると。

「また潜水艦が出たら…………怖いな」

それに、駆逐艦や軽巡洋艦では、あまり砲撃戦向きとは言えない部分がある。

砲撃戦での火力の底上げ、と言う部分ではどうだろう、と言つたところだ。

バカにするわけではない、実際重巡洋艦を一撃で中破させる駆逐艦だつているにはいる。

だがそれはかなりの練度と装備を必要とする。<sup>レベル</sup>練度も装備も足りていらない自身たち

では望むべくも無い。

それで強化されるのは雷撃戦だけだ、そう言うと、なるほど、と弥生が意見を取り下げる。

「あまりやりたくは無いが……………一つ、資源をどうにかする方法はある」

そう呟くと、弥生とイムヤがこちらを見てくる。

正直、全く気は進まない上に、一つの鎮守府の提督として、かなりどうかと思う方法ではあるが。

しかしリスクはなく、確実に資源が確保できる今の自身たちにとつてはかなり良い案ではある、つまり。

「上官の…………隣の鎮守府から資源を少し融通してもらうつて手がある」

上官の鎮守府は遠征による補給線の確保に特に力を入れており、鎮守府には大量の資源が貯蔵されている。

正直、1000や2000借りても、端数程度にしか思えないほどだ。

だが、これをすることはつまり、自分たちの力だけでは鎮守府の運営は無理でした、と言う自分たちの無能を自ら露呈するようなことになる。

これを思いついた時、自身もまた、今の弥生やイムヤのような苦い表情になつている。無表情がデフォルトのような弥生がこちらにも理解できる程度に表情を変えてしま

うほどのことなのだ、これは。

鎮守府同士にあって、階級の違いはあっても、提督と言う前提において上下は無い。つまり、提督として着任した時点で、上官ともある意味対等と言える。だが、これをやつてしまえば、はつきりとした上下が生まれる。

それは、嫌だつた。上下が生まれることが、では無い。いくら同じ提督同士で、対等とは言え、その前提となる提督になるために受けた恩の数々がある時点で自身と上官の間には上下がある。だとすれば、何が嫌なのか？

上官の元から独立したくせに、その庇護下にまた入ろうとする、また助けてもらおうとする、恩も返さずまた恩を受けようと言う、その恩知らずで恥知らずな選択肢が嫌だつた。考えついた瞬間、吐き気がしたくらいに。

「だが…………私はそれでも、弥生とイムヤのためなら、やつても良い。前線で戦うのは艦娘の役目で、それを助けるのが提督たる自身の役目だ。そのためなら、恥の一つや二つ、喜んで傀ぼう」

けれど、出来ればしたくは無い。そんな自身に思いは、けれど彼女たちとも同じだつたらしい。

「嫌、です」

「嫌ね」

両者共に即答した。

それが何故なのか、二人とも言いはしなかつたし、自身も追及はしなかつた。  
理由はともあれ、全員が一致して否定的なのだ、強行する意味も無い、すればただ悪  
戯に彼女たちからの信頼を失うだけだ。

と、すれば、あとはもう選択は二つに一つだ。

「結局、どっちかだ……オール30レシピで回すか、それとも空母レシピで回すか」  
オール30レシピならば建造に安定性があるが、戦闘には安定性が無い。

空母レシピならば建造には安定性が無いが、戦闘になれば安定性は格段に高まる。

「私個人としては空母レシピに挑戦してみたい」

何より、駆逐艦ばかりではこれから先ずっと戦い抜くことは出来ない。

その時になつて、建造したての空母や戦艦を入れ始めるのでは、遅い。

将来を見据えるならば、今から空母を入れる、と言う選択肢は決して間違いではない  
…………と思いたい。

「と言つても、私もまだ新人のペーぺーだ。間違えることだつてあるかもしねり、二人  
の意見が聞きたい」

そう言うと、二人が顔を見合わせ、それからこちらを向く。  
まず最初に口を開いたのはイムヤだつた。

「司令官がそこまで先を考えているのなら、いいんじやないかしら」

最も、資源繰りは確実に厳しくなるでしようけどね…………そう告げ、苦笑するイムヤに、そうだな、と頷く。

確かに資源繰りは厳しくなるだろうが、それに見合った戦果もあるはずだ。何よりも空母は先制爆撃ができる。敵が砲撃してくるよりさらに遠くから攻撃できるのだ。それはつまり、弥生だけではなくイムヤの安全性も増すという事だ。

さらに言えば、空母と言うのは索敵能力が高い。早期の敵の発見と、その数や艦種などの情報は、非常に重要なものになるだろう。戦艦のように場当たり的に敵と当たつても力尽くで粉碎できるだけの火力は無い以上、空母の索敵はひょっとすれば艦隊の生命線にもなるかもしない。

そんなところまで考えていると、弥生がようやく口を開いた。

「賛成、です…………空母の索敵は…………今の私たちは、必要、でしようから」

奇しくも弥生と考えていることが一致していることに奇妙なおかしさを覚え、苦笑する。

とは言え、全員一致で一つ決まつた。

「では、明日、空母レシピを回そう」

これで駆逐艦が出たら全部意味の無いことなのだが、今の自身たちの頭にはそんな可

能性は一欠けらも考慮されていなかつた。

## 六話 新人提督が空母を建造したりする話

朝。朝食を取るため食堂へと向かうと、まだ六時過ぎにも関わらず、弥生がいた。

「おはよう、弥生…………隨分と早いな」

椅子に座つたその後ろ姿に声をかける、けれど反応は返つてこない。もう一度名を呼ぶ、だがやはり無言。

何か怒らせるようなことをしたか？ とも思つたが、こんなに露骨に無視されるような態度の原因に心当たりは無い。

現在時刻六時過ぎ、いつも弥生が起きてくるのはだいたい七時半前後。いつもより一時間以上早い。

「…………ああ、やつぱり」

回りこみ、その表情を見ると、目を瞑つたままこくりこくりと船を漕いでいた。起きろ、と口に出そうとして、その肩を揺すろうとして、僅かに逡巡した。

いつもの硬い表情とは違う、気の抜けた年頃の少女らしい柔らかい表情。どんな夢を見ているのか、口元には微笑すら浮かんでいる。

その口元が僅かに動き、短く言葉を発する。

し、れ、い、か、ん

「.....」

肩に置きかけた手を戻す。ふつと息を吐き、僅かに笑う。

一体どんな夢を見ているのかは分からないが、どうやらそれは良い夢らしく.....  
その登場人物として自身が出ているらしい。

全く光栄なことだ、とも思うし、この少女とのそれなりの信頼を築けたのだと思わされ、嬉しくもこそばゆい。

もうしばらく寝かせておこうか、そう内心で呟き、自身の食事を取りために、その場を離れた。

「.....む、つ、き.....きさ、らぎ.....」

だから、その後に呟いたその言葉と、その悲しげな表情を、けれど自身は知らなかつた。

\* \* \*

午前十時。ついに建造が開始される。

「これで残りの燃料が100、弾薬が470、鋼材が100、ボーキサイトが150か

.....」

いよいよ持つて崖っぷちだ。この建造で任務を一つ達成、と言うことにはなつてているが、それでも全資源50ほどの追加配給。ありがたくはあるが、正規空母など出ては正しく誤差だ。

昨日は気づかなかつたが、もしもこれで駆逐艦が出来てしまつては、崖っぷちだつた鎮守府が確実に崖から転落する。

だが、そのリスクを負つても尚、ここで建造する意味はある。空母の有無は、戦艦の有無と同等に艦隊にとつて重要なのだ。

そして、そのリスクを負つて尚、ここで建造しなければいけない理由があつた。

実を言えば…………開発資材が残り僅かだつた。

艦娘を作る建造、そして装備を作る開発は、それを行うのに絶対に必要なものが二つある。

一つは資源だ。燃料、弾薬、鋼材、ボーキサイトと言つた四種類の資源、基本的にレシピと言うのはここの配合のみを指す。

そしてもう一つが、開発資材だ。レシピの有無に関係なく、一度の建造に必ず一つ消費する。

戦艦も空母も重巡も軽巡も駆逐艦も潜水艦も…………どの艦を作ろうと、一つで済む代わりに必ず一つ消費する。

しかもこれは、基本の配給によつて増えない、任務を達成するか遠征隊を組むか、自発的に行動して初めて得られるものだ。

そして基本的に開発資材のもらえる任務と言うのは、出撃関係に偏りがちだ。つまり、自身の鎮守府では獲得しにくいのだ。

今日使つた一つ…………そして残りは一つ。本当にこれを外せばチャンスはあと一度だ。

空母建造の最低時間が2時間。つまり、ちょうど正午まで建造終了の知らせがなければ空母確定と見ていいだろう。

自身も、弥生も、そして落ち着かなかつたのかイムヤも執務室にやつてきて、自身は書類仕事をしながら、弥生はそれを手伝いながら、イムヤは手持ち無沙汰にけれどどこか落ち着かない様子で、各々が各々の時間を過ごしながら、三十分、一時間と時間が過ぎていく。

少なくとも駆逐艦の心配は無くなつた。だが、まだ軽巡洋艦の心配もあるし、もしかすると重巡洋艦が出てくるかもしれない。それはそれで戦力強化としてはアリなのだが、ボーキサイトをこれほどつぎ込んだからには、正規空母、ないし軽空母が出て欲しい、と言うのが本音だ。

そして、一時間半が過ぎたことで、重巡洋艦の可能性も消え、ようやく胸をほつと撫

で下ろす。

「とりあえず…………空母は、確定…………ですね……司令官」

「ああ…………まずは一安心と言つたところか。後はどの空母がやつてくるか、と言うことだが」

空母と一口に言つても、その種類が多い。まずは正規空母と軽空母で分かれるし、同じ正規空母でも一航戦と五航戦で分かれる。軽空母はさらに複雑で、元は何らかの別の船として使つていたものを空母に改修したものが多いので、その種類は多岐に渡る。

それを今言つても、仕方ないので割愛するが、とにかく空母と言つても多くの種類があるのだ。

火力、と言う意味では正規空母が一番なのだが、燃費を考えると軽空母のほうが今はありがたい。

それに、軽空母と言うと正規空母より一段劣っていると思われがちだが、きちんと練度を上げて改造と改修を繰り返せば正規空母にも決して引けを取らないことは、上官のところの艦娘で知つてゐる。

「ふむ…………まあ、どんな艦が来ても頼もしいことは確かなのだが。弥生とイムヤはどんな空母に着て欲しいとか言うのはあるのか？」

自身の言葉に、弥生とイムヤが苦々しい表情をした。

と、ふと思い出す。弥生の最後は確か……。

「弥生、空母には、あまり良い思い出……無い……です」

いや、弥生だけではない、睦月型駆逐艦全十二隻中、実に十隻は空襲によつて轟沈している。

特に弥生は同じ艦隊を組んでいた姉妹艦である睦月、如月両名を同じ戦場にいる時に沈められている。

睦月のほうは乗員の救助を行つたらしいが、弥生自身もその一月後、空爆によつて轟沈している。

まあ確かに、控えめに言つて空母嫌いになつてもおかしくは無いだろう。

そしてイムヤはイムヤで、戦場に遅れて参戦すれば、すでに一航戦4隻中三隻が轟沈していると言う状況。生き残つた空母、飛龍が必死の反撃によつて大破させた空母の帰還途中に出くわしその護衛艦ごと轟沈させたは良いが、護衛艦である駆逐艦の猛反撃により自身も大破してしまつたと言う涙目なエピソードがある。

よくよく考えたら、この二人にどんな空母に来て欲しい？　なんて無茶なネタ振りであつた、と反省する。

「よし!! もしどの艦が来るか当てれたら、食堂で間宮アイスを奢つてやろう」

告げた瞬間、両者の方がぴくり、と動く。

給糧艦間宮。各鎮守府に必ず一隻はいて、鎮守府の食堂を一手に引き受けている艦娘だ。

基本的に何を頼んでも美味しいのだが、特に間宮アイスと呼ばれる特別性アイスクリームは、艦娘の士気に影響するほど美味しい。

らしい、と言うのは食べたことないのだが、上官のところでは、たつた皿一杯のアイスを巡つて戦争が起きるほど凄まじいことになつていた。

「二時間はすでに過ぎているわね、と言うことは鳳翔型がないわね」

「確率的に言えば…………飛鷹型が、良く出やすいらしい、です」

顔を付き合わせ、ひそひそと相談しだす弥生とイムヤ。先ほどまでの調子もどこへやら、これで間宮アイスの力なのか、と戦慄した。

因みに、この間宮アイス、とんでも無く高い。勿論、値段が…………。

艦娘に給料は無い。何故なら大本営にとつて艦娘とは兵器だからだ。そもそも戸籍すら無い身だ、賃金の発生する余地も無い。

と言つても、艦娘にも感情はある。人間と同等かそれ以上のものが。兵器だと言つても機械では無いのだ、言わば兵器であり、兵士である。故に士気が高ければ性能以上の力を發揮するし、逆に士気が低ければ性能以下の力しか引き出すことが出来ない。

そういう事情もあつて、公式的には艦娘への給与は無くとも、提督個人で何らかの措置をすることも多い。小遣い、と言う形で鎮守府運営のための資金から多少の給与を与えており、月ごとに要望を聞いて現物支給をしたり、とまあ色々だ。因みに上官のところでは、艦娘のための金と言うのが鎮守府の運営資金から一部プールされていた。要望を受けたら許可か不許可か審査し、許可されたらそこから金を使う、と言つた先ほど言つた例の両方を取り合させたような感じらしい、最近知つた。ただ要望を受け取り成否を出すのが秘書艦である不知火らしく、その審査はかなり厳しいとか。

と、まあ長くなつたが、とにかく基本的に艦娘は金銭と言うものを持つていない。つまり欲しいものがあつても容易に手に入らないことが多い。

自身の鎮守府ではこちらから給与を与える方式を採用することにしているが、そもそも間と同じ月毎の給与なので給料日はまだ先の話だ。

まあつまり、これまでお預けくらつていた分、目先に釣られた餌に、より過敏に反応してしまつた、と言うのがこの状況なのだろう。

「龍驤とかどうかしら？」

「けど……千歳型、も……ありえる、かも？」

実際に真剣に、もしかすると今まで見た中で一番真剣かもしれないその様子に苦笑する。

鳳翔、飛鷹、龍驤は全て軽空母の名前だ。

そして千歳型は、少し特殊な艦であり、水上機母艦と言う種類に分類される。記録によると、非常に改造の回数の多い艦であり、総計で五回にも及ぶ改造が行われる艦であり、三回目の改造で水上機母艦から軽空母へと艦種ごと変わってしまう艦である。

改造、と言うのが何なのかは後に置いておくとして、さてそろそろ二時間半も過ぎようとしている。

鳳翔と千歳型の場合すでに建造が終っているはずなので、可能性としては除外しても良いだろう。

これ以上待つと軽空母ならいつ来てもおかしくは無いので、そろそろ時間切れだろう。

「さて、そろそろ待つ時間も無くなつて来たな、答えは決まつたか？」

自身の問いに、うんうんと唸つていた二人が、顔を見合せこくりと、一つ頷く。

「隼鷹で」

じやあ、それで。と言うと、うんうん、と二人が頷き、仲の良いことで、とまた苦笑する。

隼鷹、飛鷹型二番艦であり、商船改装空母と自称している。

その名の通り、飛鷹もだが元は貨客船であり、戦時に空母へと改造された艦である。軽空母などと分類されているが、排水量24140トンとんでも無い規模の船であり、正規空母であるはずの蒼龍が基準15900トン、飛龍が基準17300トンほどと言うことを考えれば、一体何が軽空母なのか疑わしい船である。

建造では空母レシピで良く報告が上がつており、隼鷹が複数隻いる鎮守府も珍しくも無い。

まあ可能性としては十分にあり得る話ではある。

だからと言つて合つてている、と言う保障も無いのではあるが。

「ふむ…………では違つていた場合、二人のアイスは建造された艦にやることにしようか」

だからそんな意地悪なことを言つて見る。

反応は顕著で、弥生もイムヤもびくり、と肩を震わせ。

「だ、大丈夫よ…………けつこう自信もあるわ」

「だ、大丈夫…………はず？」

さて、今時間はどんなものだ、と思いふと壁にかけた時計を見ると。

「む？ 時計が止まっているな」

電池切れなのが、はたまた偶然の悪戯か。時計の秒針は歩みを止めていた。

今どのくらい時間が経つたのか、分からなくなつたが、まあこれはこれで面白いかも  
しない、と思ひなおす。

何事も多少遊びがあつたほうが良い、今日の賭け然り、この時計然り。特に弥生は肩  
に力が入りすぎるきらいがあるので、今のように外見相応な態度を見せてくれると、多  
少安心する部分もある。

と、その時、不意に電話が鳴る。内線、と言ふことは鎮守府内からだ。

「私だ」

電話は工廠からだつた。建造が完了した、と。

「すぐに向かう」

そう告げ電話を切る。こちらを見る二人に一つ頷く。

椅子から立ち上がり、二人と共に部屋を出て、工廠へと向かう。  
さて、こうして工廠へと向かうのは三度目だろうか。

一度目は、弥生と出合つた。

二度目は、イムヤと出合つた。

三度目は…………さて、誰だろうか。

そんなことを考え、工廠の入り口の重苦しい金属性の扉に手をかける。

一度後ろの二人を見返し、顔を見合わせ頷きあう。

さて、答え合わせだ。

「祥鳳型軽空母、二番艦の瑞鳳です、どうぞよろしくお願ひします、提督」

出てきたのは、誰の予想とも違う、そして自身の予想の遙か斜め上を行く。

白と赤の弓道着と巫女服を足したような服を着た、赤と白の鉢巻をした、弓を持った小柄な少女だった。

祥鳳型軽空母二番艦瑞鳳。

それは空母レシピにおいて、非常に出にくいとされる翔鶴、瑞鶴姉妹をさらに超える。空母レシピで最も建造報告数の少ない、超希少艦の名前だった。

## 七話 新人提督が再び出撃させたりした話

「さあ、やるわよ！ 攻撃隊、発艦！」

瑞鳳が放つた艦載機が高速で飛行する。青と赤、二色の艦載機たちが上と下、二手に分かれて飛ぶ。

「数は少なくとも、精銳なんだから！」

青の艦載機…………九七式艦攻が水面ギリギリを飛びながら、その機体から魚雷を射出する。

赤の艦載機…………九九式艦爆が遙か上空から急降下しながら、その機体から爆弾を射出する。

魚雷が、爆撃が、敵の軽巡戦級、そして駆逐イ級二隻を襲い、爆発を起こす。

だが、生きている…………駆逐イ級が一隻沈み、もう一方の駆逐イ級も中破しているが、軽巡戦級は無傷だ。

空母による先制攻撃が終わり、いよいよ互いが砲撃戦の距離まで近づく。

真っ先に動き出したのは、旗艦である弥生だつた。

「もう、いい加減…………終わって！」

12cm単装砲で、狙い済ましたかのような精密射撃で、敵駆逐イ級を貫き、中破していた駆逐イ級はそれに耐え切ることなく撃沈する。

反撃とばかりに敵軽巡ホ級も砲撃を開始する。だがその攻撃は、海底に潜んだ潜水艦であるイムヤを狙つたもので、こちらには無防備を晒したままだ。そしてそのイムヤへの攻撃も、分厚い水の壁が阻み、上手く届かない。

「こつちも行くわよ！」

その隙を突いて、瑞鳳が艦載機を発艦させる。九七式艦攻と九九式艦爆の混成爆撃が再び軽巡ホ級を襲う。

駆逐艦を越える軽空母の圧倒的な火力。戦艦には届かずとも、けれど比較にならないその力。

けれども…………。

「嘘つ、まだ生きて…………」

敵の魚雷発射管が潰れ、体はボロボロ、大破といったところか。だがまだ生きている。まだ動く。

「イムヤさん」

弥生がちらり、と海の底を見る。そこに潜んだイムヤがこくり、と頷き。

「これで……終わり……です！」

トドメと言わんばかりに弥生とイムヤ、両者から発射された魚雷が、ダメージで動きが鈍つた軽巡洋級を正確に着弾し、大きく水飛沫上げた。

\* \* \*

「以上が、今回の出撃の、報告…………」

報告書に目を通しながら、弥生に今日の出撃であつたことを報告させる。  
内容に差異などあるはずも無いが、やはりこうしたほうがしつかりと状況を把握できると思うからだ。

それにしても、被害は小破無し、イムヤが僅かに被弾したがほぼ損傷無しの極めて軽微。

「たつたこれだけ…………か」

「え…………あ、すみません、司令官。弥生が帰還命令を、出しました」  
自身のたつたこれだけ、と言う言葉を、倒した敵の数と勘違いしたのか、弥生が申し訳無さそうな雰囲気でそう言つたが、さすがにその誤解は不味いので慌てて訂正する。  
「ああ、違う。被害の話だ…………軽空母一隻入れるだけで、随分と安定した戦いが出来

たようだな、と思つてな」

その言葉に、自身の勘違いに気づいた弥生が、どこかほつとした雰囲気で頷く。  
「砲撃戦の間合いよりさらに遠くから攻撃できる瑞鳳のお陰で戦う敵の数がかなり減つ  
ているな」

戦艦は、強い敵を倒すことができ、空母は戦う前から敵を減らすことができる。今回  
は空母が非常にはまつた形になつた、と言うことだろう。

「先制攻撃と、砲撃戦に……瑞鳳さん。雷撃戦は弥生が…………被害軽減にイムヤ  
さん、で。バランス良く、まとまつてます、から」

確かに。あとは戦艦か重巡洋艦でも加われば一つの立派な艦隊だ。

「ふむ…………補給も思つたよりは少ない、軽空母だつたのが幸いしたな」

これならあと二戦ないし、三戦はいける。配給や任務の分を考えれば五戦ほどはいけ  
るだろう。

ボーキサイトの消費もかなり少ない。敵が駆逐艦や軽巡洋艦で、対空装備を持つてい  
なかつたからだろうが、予想外の収穫だつた。

それに、つい先ほど嬉しい話もあつた。

「弥生、実は先ほど上官から電話があつた  
「上官ですか？ 隣の鎮守府の？」

弥生は上官とは面識は無かつたはずだが、一度話に出したことがあつたので覚えていたらしい。

まあ、それはともかく、弥生たちが帰投する一時間ほど前に上官から電話があつた。曰く、上官の鎮守府から自身の鎮守府への転属を願い出た艦がいるらしい。

「…………転属？ 所属を変える、と言うこと…………ですか？」

こくり、と頷く。基本的に、艦娘の転属と言うのは禁止されている。正確には、提督側から艦娘を転属させるのは禁止されている。過去に金銭や資源と引き換えに艦娘を転属させる、と言う正しく人身売買をした提督がいるらしく、そんなことが二度と無い様に、転属自体を完全に禁止していたのだが、それを利用し、あまりにも非道な扱いを艦娘に強いた提督がいたらしく、特例として、艦娘側からのみ転属を希望することが許可されるようになつた。

因みに艦娘に非道な扱いを強いた提督の鎮守府は、轟沈者多数で戦力が抜け落ちていき、結局深海棲艦との戦いで鎮守府ごと滅ぼされている。新人提督たちが仕官学校で学ぶことの一つとして、この辺りはしつかりと教えられている。

「それで、司令官…………結局、誰が来るん、ですか？」

自身の旗下に入る艦のこと故に気になつたのか、弥生が尋ねるが、自身はけれど首を振る。

「いや、それがな……上官がその時までの秘密だ、とか言つて教えてもらえなかつた」

妙なところで茶目つ氣を出す上官だった。と言うか、普通の鎮守府なら正確な情報が無いと必要な艦かどうかすらも分からぬのだが。

「まあ、誰が来ても、必要ですか？」

弥生がぼつりと呟いたが、全く持つてその通りだつた。

だからこそ、どの艦が来てもいいか、と転属を受け入れたのだから。

まあそれでも、一体誰が来るのか気にはなるもので。

近日中に来るとは言つてたが、果たしてどうなることやら。

\* \* \*

明けて翌日。

自身は朝から弥生と執務室で向かい合つて座つていた。

「第二艦隊、ですか？」

「ああ、昨日の戦果を報告したら、南西諸島沖への出撃と同時に第二艦隊結成の両方の解禁の通達が来た」

一口に出撃と言つても、実は海域ごとに敵の強さ、と言うのは異なつてゐる。

深海棲艦はどの海域にもいるが、場所によつてその強さはマチマチであり、鎮守府はその中でも特に弱い敵にいる海域に建てられる。そうして一つの海域の敵を倒して行き、特定の条件を見たした時、次の海域に向かうことができるようになる。それは言うなら、大本営のほうで、こちらの身の丈に見合つた敵を見繕つて当ててゐるのだ。

何故そんなことをするのか？　と言えば、話は簡単だ。

艦娘には<sup>レベル</sup>鍊度と呼ばれるものがある。

即ち、本来の性能を100%とした時に、今現在どれだけの性能を引き出した。パフォーマンスができてゐるか、と言うことだ。因みに本当に100%には達せず、現状では99が限界らしい。

建造されたばかりの艦娘と言うのは、全員例外なくレベル1から始まる。それはつまり、全性能の1%ほどしか引き出せていない、と言うことに他ならない。

言うならば熟練だ。自らの体とは言え、艦娘の持つ力は兵器のそれであり、けれど引き金を引くのは人と同じ…………つまり兵士だ。自らの力を扱いに対する熟練、それがレベルであり、艦種による性能の差が絶対に差にならない大きな要因もある。例えば、レベル1の戦艦があつたとする。戦艦はレベル1ですら非常に大きな戦力だ。だがレベル99の駆逐艦に勝てるか、と言わればノーだ。恐らく100回やって

1回勝てればいいほうなのではないだろうか。

レベルが上がると攻撃の命中率と、回避率が大きく上がる。特に、レベル99の駆逐艦の回避力は神がかっており、電探を積んだ戦艦ですら当てることが困難を極めると言われる。

また全ての艦は例外無く、一定以上のレベルに達することで改造と呼ばれるものを施すことができる。

レベルが性能を引き出している割合なら、改造は性能にかけられたりミッターの解除と言つても良い。全ての艦は、初期状態ではその性能にリミッターがかけられているのだ。その本当の理由は建造をする妖精たちにしか分からぬことではあるが、艦娘が自身の性能に振り回されないようにするため、だと一説では言われている。

だからこそ、自身の性能をある程度使いこなした、つまりレベルが一定以上に達すると改造と言う、性能リミッター解除を行うことができるのではないか、と言うのが通説だ。

まあ、それは置いておいて。つまり、レベル1の艦を強敵と次々ぶつけても、轟沈者が続出するだけで、そこに指揮がどうのこうのと介在する余地が無いのだ。だからこそ、大本営もその鎮守府の能力に見合った海域へ出撃させることで無理の無い鍛度上昇を促し、結果的に鎮守府全体の戦力を増強させているのだ。

鎮守府近海、と言うよりだいたいの海域に対する大本営の言う次海域解禁条件は分かれやすい。

即ち、その海域の中核となる敵を倒し、敵の勢力を減衰させることだ。

ほぼ全ての海域で、深海棲艦の中に、その海域のボスのような艦隊が存在しており、その艦隊を倒すことにより、一定期間その海域の深海棲艦の勢いを弱めることができる。と言つても、一ヶ月もしない内に新しい中核艦隊が出来上がる上に、討ち漏らしの雑魚艦隊がいるのだが、それらはまだその海域で中核艦隊の撃破を達成できていない他の鎮守府が討伐することになる。

と、まあ長くなつたが、出撃海域についてはそうなつてゐる。

鎮守府近海の敵中核艦隊を撃破したことにより、現在この鎮守府周辺の深海棲艦の勢力が弱まつてゐる。

と言つても一ヶ月ほどのことなので、一月ほどしたらまた出撃することになるが、一ヶ月もすればこの鎮守府もそれなりのものになつてゐるだろう。

とりあえず、鎮守府近海の海域は突破した現状、ようやく新設鎮守府から駆け出し鎮守府になつた、と言う程度だろう。

一応の戦果として、第二艦隊の結成許可は出たので、これからは遠征任務をこなすことができるのである。

警備任務で鎮守府近海を遠征させれば、資源を入手すると同時に中核艦隊が結成されるのを阻止したりできる。

特にこの鎮守府は、上官の鎮守府の隣の海域にあるので、海上護衛任務が多くある。これをこなすと報酬で燃料と弾薬が多くもらえるので積極的にこなしていきたい。

遠征の成功には実はある秘訣がある、と上官が教えてくれたことがある。

一つは旗艦となる艦のレベル。ある程度慣れした艦でないと、上手く指示できず、結果的に失敗してしまうことが多々あるらしい。

そうしてもう一つは、艦隊の艦種である。

遠征ごとに必要とされる能力、と言うものがあり、その必要とされる能力とは即ち、艦種らしい。

海上護衛の場合、水雷戦隊向けらしく、駆逐艦と軽巡洋艦の混成艦隊が必要とされる。そう、軽巡洋艦だ。

今の鎮守府にはいない戦力。

だが遠征の半分ほどは水雷戦隊が必須らしく、軽巡洋艦は最早、遠征に必須と言つて良い。

と、言うわけで。

「また建造しようと思うんだが」

「…………資源、どこにあるん、ですか？」

「……………しばらく出撃を控えれば」

「それで、また…………出撃命令、来るんですか？」

「すばすばと言つてくる弥生に苦笑しつつ、本当にどうしたものか、と思う。

実際、弥生の言つていることは全く間違つていない。

確実に軽巡洋艦を建造できるだけの資源の余裕は無いし、それで出撃が滞ればまた出

撃命令が出る。

だから、もう一度言うが、弥生の言つていることは全く間違つていない。

けれど、それでも、だ。

「遠征隊による、コンスタントな資源供給、これが無ければこの先はやつていけない。そ  
う思つてゐる」

敵はどんどん強くなつてくる、弥生たちも傷つくだろう、大破することもあるかもし  
れない。

それを修復するのにも資源がいる、補給するのにも資源がいる。

レベルが上がるほどに修復に必要となる資源は増える。

それら全てを配給と任務の報酬の資源だけで賄うのはいつか破綻してしまふと思つ  
てゐる。

「だからこそ、早い内に遠征隊を作つておきたい」

遠征を繰り返すことにより資源に余裕を作つておきたい。

その辺りは上官である提督の影響を大きく受けているだろう。

まだこんな低レベル海域のころから気が早い、と思われるかもしれない。

だが、こんな低レベルな今だからこそ、やつておきたい。

「今ならまだ出撃以外に力を割く余裕がある」

幸い昨日海域を一つ突破したばかりだ、一週間ほど出撃が滞ったところで大本営とて何か言うまい。

だから、今だ。資源が足りず、配給だけではやつていけず出撃任務で稼ぐような自転車操業になる前に、なんとかして遠征による資源確保をできるようにしたい。

そんな自身の考えを弥生に伝える、弥生はじつとこちらを無表情に、けれど険しい目つきで見つめ、何かを考えるよう黙りこくっていた。

数秒、十数秒、数十秒と時間が流れ、重苦しい沈黙だけが残る。

たっぷり一分ほどして、そして、ようやく弥生が口を開く。

「賛同、します」

その言葉にほつと胸を撫で下ろす。正直に言つて、これでまだ弥生に反対されたなら、考え直すことも考えていた。

そんな自身の不安を悟つたのか否か、弥生が口を閉ざし、目を閉じる。そうして、もう一度目を開き、無表情にこちらを見つめて、口を開く。

「信じて、ます」

そして、第一声はそれだつた。

一瞬、何を言われたのか、唐突過ぎて理解できなかつた。  
けれどそんな自身を置き去りに弥生が言葉を紡ぐ。

「まだ、そんなに長い時間、過ごしたわけじや、ないけど」「  
けれど。

「それでも、司令官が、私たちのことを、大事にしてくれること、分かつてます、から」  
だから。

「だから、そんな、不安そうな顔、しないで、ください…………自信を持つて、ください」  
だつて。

「司令官が、そう思つたなら、そう信じた……なら……、弥生は、贊同、します」  
いつもからは想像もできないほどの饒舌な口調で、けれどいつもと同じ無表情で。  
弥生がそう言つた、そう告げた、そう呟いた。

「司令官を、信じます」

涙が出そだつた。

## 八話 新人提督と弥生がウサギと出会つたりする話

「ふつぶくぶう～」

目の前でクルクルと踊る脳内ハッピーを前に、思わず呆然とする。艦娘というのは、随分個性的なやつがいるんだな、などと半分逃避気味な思考をしていると。

「司令官、逃げないで、ください」

思わず思考同様に体も逃げ出そうとしていたのを、弥生が上着の裾を掴んで止める。ダメ？ と目で尋ねると、ダメ、と首を振られた。

「…………おい、弥生、アレはなんだ？」

波止場で踊る謎の生き物を見ながら尋ねると、弥生が一つため息をつきながら答える。

「卯月、です…………弥生の、姉妹艦の」  
腰まで伸びた長く赤い髪を兎の髪留めでくくった、なんとも表情豊かな少女がそこにいた。

あれが、弥生の姉妹？　いや、確かに着ている服は弥生と同じものだが。

「……………随分と、その…………個性的だな」

「……………氣遣い、ありがとう、ござります」

なんとも言えない空気が自身と弥生の間を漂う。その視線の先では、相変わらず楽しそうに波止場で踊る、謎の生き物、改め卯月がいた。

時間を少し遡る。

「は？　今日ですか？　いえ、出撃の予定はありませんが…………分かりました、話は通しておきますのでこちらの執務室まで、ええ、はい」

朝から上官から電話があつた。曰く、転属希望の艦娘が今日そちらに行くのによろしく頼んだ、と。

今日は出撃の予定も無く、昨日弥生に言つた通り、軽巡洋艦の建造を行う予定だったのだが。

切れてしまつた電話を見つめながら、目をぱちくり、とさせる。

「昨日の今日だぞ、早過ぎないか？」

転属の話を聞いたのが昨日なのに、翌日の今日にもうやつて来るというのは、いくらなんでも早すぎないだろうか？

「艦娘たつての希望つて言つてたが、随分と氣が早いな」

さてはて、本当に誰が来るのやら。気の早い、せつかちなやつじやないか、と言うのが自身の意見だが。

と、その時、コンコンと扉がノックされる。どうぞ、と声をかけると扉が開き、弥生が入つてくる。

「おはよう、ござります…………司令官」

「あ…………ああ、おはよう、弥生」

秘書官の弥生が入つてくる、すでに何度と入つた部屋だ、慣れた様子で壁際の椅子を持つてきて自身と対面するように座る。一方の自身としては、多少緊張してしまう。昨日、面と向かつてあんなことと言われてしまつたのだから、仕方ないとと思うのだ。

「今日は建造、でしたか？」

「いや、その前に一つ用事ができた」

用事？ と首を傾げる弥生に、ああ、と領き先ほどの電話の内容を伝える。さすがに昨日の今日だと言うこともあって、弥生も僅かに眉根をひそめる。

「随分と……急……ですね」

「ああ、と言つても新しい仲間だ、歓迎はしようじやないか」

そんな自身の言葉に、はい、と柔らかい雰囲気で領く弥生。

その聲音に、昨日のことを思い出してしまい、僅かに赤面する。

「司令……官……？」

「いや、なんでもない、気にするな」

左手で顔を覆い、顔を赤らみを隠す。

深く息を吸い込み、吐く。多少熱の冷めた顔から手を退け、一つ目を閉じ、意識を切り替える。

「建造は明日にしよう、転属してくる艦娘がいつ来るかわからない以上、工廠で待たせることになつてしまふからな」

それは可哀想だし、今日転属してくる艦娘の種類によつては建造しなくてもよくなるかもしれないの、それまで待つことにする。

それを伝えると、弥生が了解です、と頷いた。

そうして執務室で弥生と二人、仕事をこなしていき、二時間ほど経った頃。

T r r r r

執務室の電話が鳴った。

電話に出ると、鎮守府の職員からだつた。

あの、波止場で踊つてる少女がいるんですが？

そんな頓珍漢な電話に、目を丸くし、弥生を伴い波止場へと向かい。

そうして先ほどの場面へと戻る。

\* \* \*

「で、どうすればいいんだ、アレは？」

波止場で踊る脳内ハッピーを見ながら、隣に佇む弥生に尋ねる。

「取り合えず…………声をかけて、みては？」

「う、と弥生が視線を反らしながらそう答える。

「弥生の姉妹艦だろ、弥生が行つたらどうだ？」

あまり関わり合いになりたくない手合いだったので、姉妹の弥生に押し付けてみる。

「弥生の姉妹に、波止場で踊る人は、いません」

だが自身も関わり合いたくないがために自身の姉妹をいなかつたことに対する弥生に。

「ひどい言い草だぴょん」

少女がぷくーと頬を膨らませながら抗議する……。

「…………」

「…………」

弥生と二人、声のしたほう、自身たちの背後に視線を向ける。そこに、先ほどまで踊つていた少女がいて、頬をぷくーと膨らませていて。

「うわああああ?!」

「っ?!」

自身は思い切り声を上げ、弥生は声こそ上げなかつたが、目を見開いて後ずさつた。  
「むー、そんな反応されたらうーちゃん傷つくぴょん！」

そんなことを言うが、どうやつたらあの一瞬で自身たちの背後に回れるのだ、しかも  
艦娘である弥生すら出し抜いて。

「う、卯月…………？」

「そうだぴょん、久しぶりだぴょん、弥生！」

珍しくうろたえた様子の弥生に、卯月ががばつ、と抱きつく。

「えつと…………久しぶり」

僅かに頬を緩めた非常に珍しい弥生の表情に、なるほど、弥生も満更でもないのかも  
しれない、と思う。

「ふつふくふうー！ 弥生だぴょん！ 弥生だぴょん！」

弥生に抱きついた状態の卯月がそのまま弥生の腰に両手を回し、ぎゅっと抱きしめた  
まま、徐々にその手を下げ始める。

「う、卯月、ちょっと、話し、つて、ちょっと、どこ触つて」

自身の見ている目の前で段々と妖しい雰囲気になつていくのだが、どうにも触れがた

い空気を感じ思わず静観してしまった。

「ふふー、弥生はここがいいのかぴよん？ それともこつちかぴよん？」

「だから、どこ触つて…………や、止めて、そ、そつちは、ダメ」

身をよじり、卯月から逃げ出そうとする弥生だったが、卯月にがつちりと掴まれ逃げ出すことができない。

まあ、なんと言うか、実に眼福な光景なのだが。

「し、司令……官……た、助け、て」

弥生が半分涙目でそう頼んでくるので、さすがに静観しているわけにもいかず。

「そろそろ話を進めたいたのだが、うちの秘書とのスキンシップはその辺りにしてもらえないか？」

ぐわし、と卯月の頭を掴んで、その動きを止める。

「ぴよん？ あなたが司令官？ 瞳月型駆逐艦四番艦の『卯月』でつす、うーちゃんつて呼べてまっす」

びし、と頭を掴まれたまま器用に敬礼し、卯月がそう告げるその姿に、疲れたため息しか出ないのはどうしてだろう。

それでも、滌刺と笑う目の前の少女の存在は、弥生にとつてはとても大事らしい。それは先ほどの邂逅で分かつた。確か弥生と卯月は、第30駆逐隊と言う艦隊の仲間だつ

たこともあつたはずである。その頃の縁と考えるなら仲が良いのも納得できる。

「と言うか、なんで波止場で踊つてたんだ……？」

到着したら執務室に来るよう

上官には頼んでおいたはずなんだが」

「うーちゃん早く着き過ぎちやつたから、ちょっと時間を潰してたんだびよん」

「…………到着時刻なんて聞いていないんだが」

そんな自身の言葉に、あれ？ と言つた様子の卯月。それから納得したように頷き。

「司令官、忘れてたみたいだぴよん…………それとも卯月が言うの忘れてたびよん？」

「いや、知らないんだが…………と言うかその違いは非常に大きいんだが」

場合によつては責任問題になりかねない、程度には大きな違ひなのだが。まあ、問うつもりは無いが。

「まあそんなことどうでもいいから、中に入るびよん！」

そう言つて、先々と鎮守府の中へ消えていくその背中を見て、思わずため息をつく。

「えつと…………司令…………官…………」

自身の姉妹艦の行動に、なんと言つていいのかわからず戸惑う弥生に、さてなんと

言つたものかと、こちらも考えてしまい。

「随分と、まあ…………個性的なやつだな」

上手い言い回しが見つからず、言葉を濁すことしかできなかつた。

弥生は、そんな自身の言葉に、無表情に、けれどどこか乾いたような雰囲気で、頬が引き攣っていた。

「あつらためてー！　今日よりこの鎮守府に転属してきました、睦月型駆逐艦四番艦の『卯月』でっす！　敬礼、びしつ！」

効果音まで自分の口で言わなくとも良い、とも思うが、これがこの少女の個性、と言うことなのだろう。上官も電話で、個性的な子だが仲良くやつてくれ、と言つていたし……これ、個性的で済ませていいのか？

弥生を建造のため工廠に行かせているため、現在この執務室にいるのは、自身と卯月の二人だけ。本当はこの脳内ハッピーと二人だけとか勘弁して欲しいのだが、それでも時間が有限だ、まだ多少猶予はあるとは言え、自身たちに無駄にできる時間など無い。朝から待っていた卯月が転属してきたからには、早くこちらの予定を推し進める必要があつた。

「あー…………ようこそ、私の鎮守府へ。貴君の着任を歓迎する」

なし崩し的な形式的挨拶になつた感は否めない、が、彼女がわざわざこちらへの転属を希望してくれたのも事実であり、そして自身の鎮守府にとつてそれが非常にありがたいことも事実である。

そして多少気になつていたこともあつたので、ところで、と接続詞をつけて尋ねてみることにする。

「どうしてわざわざこちらに転属を？ 聞いた話によると、卯月、キミはあちらで第二艦隊に所属していたらしいが？」

第四艦隊まで解禁されている上官の鎮守府で、第二艦隊二番艦を勤めていた実績のある卯月。第一艦隊ではないとは言え、上官は遠征による資源供給路の確保を非常に重視していたはずだ、その鎮守府で第二艦隊所属となれば、かなりの重鎮にあたるのではないだろうか？

「弥生がいたから……………だ、ぴょん」

一瞬、空気が冷えたかと錯覚した。

とつてつけたような最後の語尾は、何の誤魔化しにもならないほどに、一瞬で空気が重くなつた。

その質問は、目の前の少女にとつての琴線だつたのか、それとも、地雷だつたのか。だが、直後。

「なーんて、弥生は姉妹艦だぴょん、あっちの鎮守府つて卯月の姉妹がいなかつたら、こつちにやつてきたんだびょん」

重たい空気が霧散した。繕うようにこちらも笑みを見せ、そうか、と呟く。

それでも先ほどの重苦しい押し潰されそうな空気は忘れられそうにない。

どうやらまあ…………目の前の頭の中で花が咲き誇ったような少女にも、色々あるのは良く分かった。

艦娘には過去の…………大戦時の艦としての記憶が焼きついている。それを忘れて生きる艦娘も入れば、新しい生を手に入れてもその記憶に引き摺られる艦娘もいる。卯月はどうやら後者らしい。いや、本当に忘れて生きられる艦娘なんていないのかもしない。

前世だろうがなんだろうが、自身の経験で、自身の体験で、自身の思い出で、自身の記憶だ。忘れるはずが無い、気にしないように心がけてでも、それでもふとした拍子にその思いは溢れ出す。目の前の卯月のように。

だから、結局。

「そうか…………まあ、卯月と話している弥生はいつもより表情が柔らかかったからな、その調子でもっと感情表現が得意になるように相手してやつてくれ」

そんなことを言うと、卯月が少しだけ目を丸くして。

「任せるぴょん！」

そう言つて…………微笑んだ。

コンコン、と扉がノックされる。

入れ、と告げると扉が開かれ弥生が入つてくる。

慣れた様子でいつものようにやつてきて、けれどそのままきよろきよろと少しだけ周囲を見渡した。

「卯月ならもう割り当てた部屋に戻つたぞ」

「……………そう、ですか」

「なに、これからは同じ鎮守府の所属だ、いくらでも話す機会はあるだろ」

そんな自身の言葉に、そうですね、と呟く弥生。やはり、弥生にとつても卯月は特別なのかも知れない。

それが感情的なものなのか、感傷的なもののかは分からない……………その違いは、良い方向に転ぶか悪い方向に転ぶかの瀬戸際でもあるのだが、まだ区別はつかないので、様子見、と言つたところだろうか。

「それで、工廠に建造するように言つて來たのか？」

「はい……………指示通り、オール30で回すように、言つてきました」

そうか、と呟き、目を細める。オール30で出来るのは大概が駆逐艦か軽巡洋艦だ。さすがにまた潜水艦が着たりはしないだろうし、重巡洋艦が來たならそれはそれで使い道がある。

「まあ駆逐艦が来ても、軽巡洋艦が来ても、第二艦隊に回つてもらうつもりなんだがな」

そんな自身の言葉に、弥生がふと尋ねる。

「卯月は…………どちらに？」

第一艦隊か、第二艦隊か、と言うその質問に、少しだけ言葉に詰まる。

多分、言つたら無表情に見つめられるんだろうな、と思いつつも。

「両方だ」

「…………え？」

目をぱちくり、とさせながら弥生がそう漏らす。

「だから、両方だ。普段は遠征隊として第二艦隊に所属してもらつて、必要に応じて第一艦隊にも参加してもらう」

そんな自身言葉に、じーっと弥生が自身を見つめる、まあ予想通りだ。

「司令官が、そう、決めたんですか？」

「ああ、そう決めた…………元々第二艦隊の結成は必須だったが、卯月の鍛度で第一艦隊に所属させないのは勿体無いからな」

さすがに遠征を延々とこなし続けるあの鎮守府だけあり、けつこうな鍛度の持ち主だつた。

今の自身の艦隊にとつて、駆逐艦と言えど、大きな戦力であり、そして消費が少ない

と言う意味では、ある意味、戦艦が来るよりもありがたいかもしかつた。

「だから第一艦隊4番艦と第二艦隊旗艦を同時に勤めてもらうことにした」

「旗艦…………じゃあ、第一艦隊が、出撃しての時、第二艦隊は？」

「休みだ、第一艦隊が動かない時は延々と動いてもらうことになるからな」

「卯月は、ずっと働きっぱなしに、なりませんか？」

「遠征は出撃ほど疲労しないからな、出撃前に一日間を開けるようにはするさ」  
 大よそ一日ゆつくりと休んでいれば、遠征の疲労くらいならすぐに取れるだろう。  
 最終手段として、高速修復剤…………バケツを被せる手もあるが、どんなブラック鎮  
 守府だと言いたくなるので、それは文字通り最終手段だ。

「ど、言うわけでだ…………これからは卯月も加わって、今建造しての艦が来れば小規模  
 ながらも遠征隊も結成される」  
 それはつまり、配給と任務報酬以外の資源供給源が出来ると言うことだ。  
 「上手く軌道に乗せるまで、まだまだ大変だろうがな」

「大丈夫、です」

多少の不安を口にすると、それを跳ね除けるようにして弥生が口を開く。  
無表情、だがその目はいつもより力強く感じられた。

「大丈夫、です……卯月も……弥生たちも、頑張りますから」

そんな弥生の言葉に、一瞬目を丸くするが、ニイツと笑つて。

「そうか……頼んだぞ、旗艦殿」

そう告げる。そして、弥生も。

「はい……任せて、ください。司令官」

珍しく、笑つた。

## 九話 新人提督が初めて遠征をしたりする話

資源全30

建造時間 1 : 22

建造結果

「兵装実験軽巡、夕張、到着いたしました！ 提督、よろしくお願ひします！」

夕張型一番艦、夕張。

兵装実験軽巡の自称だが、実際に実験されたのは、小型の艦にそれより大きな艦の装備を搭載してみる、と言うものであり、兵装の実験と言うより搭載の実験と言ったほうが正しい気もする。その実験艦として作成されたのが軽巡洋艦夕張だ。3000トン級軽巡に大して、5000トン級軽巡の装備の積載は無謀とも思われたのが、様々な創意工夫によりこれを可能とし、その創意工夫は後に古鷹型重巡や、古鷹型重巡を元にした青葉型重巡など、後に重巡洋艦と呼ばれるようになる艦種に引き継がれていくようになる。

大本営のまとめによると、特筆するほどの能力は無いが軽巡の中で最も多くの追加装備を積むことのできる軽巡であり、装備の組み合わせ次第では強力な戦力となる、らし

い。

だがそれよりもなによりも、随分と数奇な巡り合わせだと思う。

軽巡洋艦夕張、駆逐艦弥生、駆逐艦卯月…………かつて第30駆逐隊と言う艦隊を組んでいた艦がここまで集まると、縁のようなものを感じずにはいられない。

そのうち、睦月、如月、望月なども着たりするのだろうか、などと無駄なことを考えて、思考を一旦捨てる。

「よく着てくれた、貴君の着任を歓迎する」

ハツ、と元気良く敬礼する目の前の少女夕張に、樂にするように告げる。

「さて、夕張、早速だが君には第二艦隊に所属してもらう」

「了解しました、第二艦隊の他の面々はどなたが？」

「まだ第一艦隊すら揃っていない状況で申し訳ないのだが、夕張の他の一隻だけで、駆逐艦卯月がいる。確かに多少の縁があつたはずだな？」

卯月と言う言葉に、夕張が少し笑んで、はい、と答える。

「セイロン沖海戦の後に第23駆逐隊、第29駆逐隊、第30駆逐隊の旗艦を勤めた時以来の縁です」

まあ私は、並んで戦うことは出来ませんけど、と自嘲氣味に呟く。

艦娘の過去の記憶、と言うやつだ、まあそれほど根の深い話でもないようで、夕張は

すぐに表情を切り替える。

「さて、夕張には第二艦隊の旗艦を勤めてもらおうと思う…………これはすでに卯月にも了承を取っている話だ」

基本的に水雷戦隊と言うのは軽巡洋艦が旗艦を勤め、その配下に三隻から四隻程度の駆逐艦で構成されている。

なので、もし軽巡洋艦を建造したら、卯月にはその下に入つてもらいたい、と言うことはすでに事前に話してあり、了承をもらつていて。上官のところでもそعدつたらしく、かなりあつさりと了承されたことにこちらがやや拍子抜けしてしまつたほどだ。

「ただ夕張、キミはまだ建造されたばかりだ、遠征ともなると色々経験が足りないと思う。一方でキミの配下となる卯月は別の鎮守府から転属してきた艦でな、この鎮守府で最も多くの経験を積んでいる。つまり」

「卯月にサポートしてもらひながらやつてほしい、と言うことでしょうか？」

「そうだ………いざ、と言うとき判断に迷つたら、卯月を頼れ。その必要が無いほどキミが成長するまでは、な」

それはつまり、今はまだ旗艦として信頼できない、と言うことにして他ならない。プライドの高い人間なら、ブチ切れそうな言葉だつたが…………。

「それは私に、かつての配下に助けてもらえ、と言うことですか？」

「ああ、そうだ……そんな自身の言葉に、けれど夕張は怒った様子も無く、頷いた。  
「了解しました、遠征隊として最大限の活躍が出来るよう精進しますね」

そうして、そう言葉を吐いた。

夕張の出て行つた扉を見つめながら、ほつと一息吐く。

夕張がプライドの高いタイプじやなくて助かつた。

いや、別に矜持が無い、とか安いやつだ、とかそういうことを言つていいのではない。  
ただそれよりもこちらの命令を優先してくれるタイプ、と言うだけだろう。

こちらにとつては助かるタイプではある。経験を積んでくればちゃんと旗艦としても信用してやれるので、それまでは頑張つて欲しいところだ。

そして、その手順を整えてやるのが、自身の仕事だろう。

早速電話を手に取る、そこから番号をプツシユしていき…………。

「何かいい仕事がありますように」

できれば最初は簡単な仕事から回して経験を積ませてやりたい、親心にも似た気持ちを抱きながら、繋がつた電話の向こう側へと向けて、口を開いた。

\* \* \*

明けて翌日。

波止場に立つ、自身、夕張、卯月の三名。因みに弥生は現在執務室で仕事中である、後で何か差し入れを持つて行こう。

「というわけで、二人には海上護衛任務に従事してもらう」

遠征隊、最初の仕事を告げると、夕張は頷き、卯月が即座に反論する。

「ちよつと待つびよん！　海上護衛なんて二人だけでできるような遠征じやないぴよん」

経験則からそう告げる卯月に、自身も頷く。それは分かつていて、と言うか自身も同じ気持ちだ。

だつたら何故この遠征になつたか、と言うと。

「それは知つていて、だから、卯月のいた鎮守府…………上官殿のところから二人ほど合流しての合同遠征と言うことになつた」

「合同、遠征ですか？」

夕張が目を丸くし、隣で卯月が珍妙な顔をする。

「どうかしたか？　卯月」

「え、いや…………なんでもないぴよん…………多分、気のせいだぴよん」

そう呟くが、顔は絶妙に不味いものを食わされた、と言うような珍妙な表情のままで

あり、明らかになんでもないと言つた風ではないのだが。

深く聞くべきか？ とそんなことを考えていると、夕張が提督、と呼ぶ。

「それで、一緒に遠征に行く「一人はどこに？」

「ああ、三十分ほど前に連絡をもらつたからな、そろそろ来るはずなんだが」

「っそよん！」

瞬間、卯月が激しく首を動かしながら、周囲を見回す。その鬼気迫る様子に、自身も夕張も目を丸くし、何事かと構え。

「や、やつが来るびよん」

今度は蒼白になつた顔色に、どういうことか、卯月に質そうとして。

「ナースは嫌いなのです」

水平線の彼方、波を切り裂いて、ヤツがやってきた。

淡い茶色の髪を、後ろで折りたたむように結び、セーラー服のような服を着た艦装をつけた小柄な少女。

その姿には見覚えがある、海軍仕官学校時代、艦娘について学ぶ時に実際の提督が教官として招かれるのだが、その教官の秘書官としていつも傍にいたのが彼女の同型艦だった。

名前は確か……………いなづm

「初めまして、横須賀第六鎮守府所属第一艦隊旗艦特III型駆逐艦四番艦の電な、の、です」

「え？」

「あ、言い間違えました、電なのです」

「そ、そうか」

感じたのは違和感。自身が以前に見たことのある駆逐艦電と全く同じ容姿をしている、そのはずなのに。

何か違う、そう感じてしまう。その原因が何なのか考えようとし、ふと気づく。自身の後ろに隠れ、服の裾を掴み震える卯月の存在に。

「ど、どうした？ 卯月」

まだ出会つて日がないとは言え、いつも能天気なこの少女がこれほどまでに震える姿に、さすがに戸惑いを隠せない。

と、そんな自身の言葉で、電が自身のさらにその後ろへと目をやり……。ニタア、と囁う。

「あ、る、え、え、？ 卯、月、じや、な、い、で、す、か、あ、」  
瞬間。

「イイイイイイイヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

絶叫し、卯月が走り出す。一体何事か、状況が飲み込めず見守っていると。

「酷いのですよ、な、ん、で逃、げる、ん、ですかあ？」

電がその後を追いかける…………艦装の錨を振り上げながら。

傍から見るとただのじやれあいに見えなくともないが、その割に卯月の表情が本気過ぎて、軽くビビった。

「あー…………またやつとんな、あん二人」

と、その時、後ろから聞こえた声に、振り向く。そこに、黒い髪に黒いベスト、白いブラウスに同じく白い手袋をつけ、スカートとスパツツを履いた少女がいた。

またもや見覚えがある少女だった。と言うか、上官殿の秘書官である不知火の姉妹艦と言ふこともあり、何度か会つて交友もある相手だ。

「久しぶりだな…………黒潮」

「お久しぶりやで、司令はん」

互いに挨拶を交わし…………それから、視線を未だ走り回る二人向ける。

「それで…………あれは何だ？」

「やー、うちもよう知らんさかい、けんど、初めん時からあんな感じやつたよ、二人とも」

「放つて置いて大丈夫なのか？」

「そやねー、でも不知火姉さんが止めるまでは言うても止まらんしなあ」  
え、これマジでどうすんの？と思わず目で訴えるが、黒潮が視線を反らす。夕張は  
見ると白目を剥いて半分気絶していた。

「来るなビヨオオオオオオオオオオオオオン」

「あははははははははははー待、て、な、の、です！」

最早收拾など付かない混沌とした現状で、さすがに眩暈すらしてくる。

「…………誰か、助けてくれ」

と、呟いたその瞬間。

パアアアアン、と銃声が響く、そして同時に。

「な、の、です！」

「ひよおん?!」

ばたり、と電が倒れ、卯月が転ぶ。

後には静寂と波の音だけが響き、誰もが状況を理解できず、固まっていた。

引きつった顔で、銃声のしたほうへと首を回し、視線を向けると。

「うるさい…………です……」

艦装に付けられた12cm单装砲から煙を昇らせながら、無表情に、けれど目がいつ  
もの三倍冷徹な感じに電と卯月を見つめる弥生がいた。

「う、うぐ…………い、痛いのです」

「なんでもう一ちゃんまでえ…………」

良く見れば、実弾ではなく演習用のゴム弾だつたらしく、二人ともゆっくりと起き上がる。

そして電が自身を撃つた弥生を見つめ、近寄っていく。

「い、き、な、り、何、す、る、の、です」

何かもう、言葉じや表現しつくせない凄絶な顔をしながら弥生へと詰め寄る電。

だが弥生は、びくりとも表情を変えもせず、かちやり、とその単装砲を電の腹に

……え?

「執務室まで…………声が聞こえて、うるさい…………です…………」

「だからつていきなり撃ちます……パアアアン…………つぐ、な、なにを……パアアアン  
…………ごめんなさいなのです」

完全勝利S、なんて文字が脳裏に浮かび上がったが、すぐに振り払う。

弥生のほうを見ると、眉がピクピクしている、あれ完全に怒ってるな、と思ひながらも、弥生の元へと行く。

弥生もこちらを見つけたのか、じとつとした視線をこちらへと向けてくる。

「司令……官……」

「悪い、助かつた…………いや、だからそんな怒るな」

「怒つてませんよ」

そんな人を殺しそうな視線を言われてもな、と思うが口には出さない、怖いから。

「とりあえず、ゴム弾使つたみたいだが、あまり儀装を使つてくれるな、上官殿のところだからまだ良いが、他所の鎮守府だつたら問題になりかねん」

いいな、と問う自身の視線に、弥生がこくりと頷く。

「まあそれはともかく、本気で助かつた…………後で何か差し入れでも持つていくから、先に仕事続けといてくれ」

「了解…………です……」

戻り際、電を一瞥し、くわつ、と睨むと、びくり、と電が震え上がる。

弥生が去り、あつという間に静かになつた波止場。

仕切りなおすため、こほん、と咳払いを一つし、未だに震える卯月と電の二人を見て、やや気が抜けそうになりながらも、話を切り出す。

「さて、では、遠征隊には出撃してもらおうと思う。駆逐艦電、駆逐艦黒潮の両者には、今回の合同遠征に赴いてもらつたこと感謝する。今回の任務は海上護衛だ、海上を輸送する輸送船団の護衛任務となつていて。従事時間は凡そ半日ほどとなつていて。詳しいことは、夕張に言つてあるが、そちらの鎮守府でも聞かされていると思うし、問題な

いと思つても?」

自身がそう尋ねると、黒潮がこくりと頷くので、話を続ける。

「報酬は両鎮守府で折半となつてゐる。夕張は今回が初めての遠征と言うことで緊張もあるかもしれないが、各人の奮起を期待する、以上だ」

そうべると、夕張も黒潮も、震えていた卯月と電も、しつかりと頷いた。

「では、我が鎮守府初の遠征だ……頑張つて行つて来い」

そう告げると、四人が海と乗り出して行き。

「行つてくるわね、提督」

「うーちゃん、頑張るぴょん」

「ほな、行つてくるわ」

「行、つ、て、く、る、の、です」

その背を見送る自身。個人的に、昨日建造されたばかりの夕張が多少心配ではあるが、上官殿のところの艦娘が二人に、卯月がついているのだからきっと大丈夫だろう、と思う。

さて、頑張ってくれている弥生のために、何を持つて行こうか、そんなことを考えな歩きだす。

その背が水平線へと消えて行き、見えなくなると、自身もまた振り返り、鎮守府へと歩きだす。

がら。

## 十話 新人提督が料理をしたり食べたりする話

一身上の都合により、お休みさせていただきます。

食堂入り口に張られた一枚の紙には、そう書かれていた。

弥生も、イムヤも、瑞鳳も、卯月も、夕張も。

全員がその前で立ち尽くし、目をも開いていた。

「ああ、間宮さんなら、今日はいないぞ」

「ちょうど朝食へとやつてきた自身、と、そこでちょうど扉の前に立ち尽くす彼女たちがいて。

あ、なるほど、と事情を察した自身がそう告げると、全員がぎょっとした目でこちらを見てきた。

そうして全員が一度顔を合わせ、弥生が代表してか一步前に出る。

「…………食堂…………開いてないん、ですか？」

「ああ、間宮がないからな」

「じゃあ…………今日のご飯、どうすれば？」

「ああ、そのことなら問題ない」

弥生の問いに一つ頷き、食堂の扉を開くと、食堂へと入る。  
 自身の後に続くように、五人も一緒にやつてくる、当然ながら食堂内には誰もいなかつた。

「で、どうするんだびょん？」

痺れを切らしたように卯月がそう尋ねてくるので、一つ頷き。

「今作るから座つて待つてろ」

そう言つた瞬間。

「「「「え?」」」

五人の声が重なつた。

「…………なんだ？」

「提督、料理なんてできるの？」

疑わしげな表情の瑞鳳、だがその他四人も似たような表情をしている……弥生は無表情だつたが。

「当たり前だろ…………ああ、そうか、お前らの常識的には当たり前じやなかつたな」

第二次世界大戦中の軍艦なのだ、その常識は今よりも一世代昔のものであつても不思議ではない。

「今の時代じやそんな珍しいもんでも無い…………まあ、とりあえず見てれば

いい

そもそも、過去の海軍だつて、料理ぐらいしただろう。そもそもカレーライスの原型は海軍からのものだ。

と言つても、自身は提督であつて、別に料理人でもなんでもないので、作れるのは家庭料理の域を出ない程度のものではあるが……。

十五分ほど後、食堂の机に並べられている皿とそこに盛られた料理の数々を見て五人が、おお、と目を輝かせる。

トーストと半熟の目玉焼き、カリカリベーコンに簡単なサラダにフルーツポンチ、ドリンクに珈琲と紅茶と牛乳、あとはまあ瓶詰めのジャムがいくらか、と洋風な朝食の定番と言えば定番なメニューだ。

「…………美味しそう」

ぽつりと弥生が呟き、卯月が同意するように頷く。

「うーちゃん、お腹空いたぴょん」

早く食べたい、と言つた風に空いている席に座り。

「いただきまっす！」

フライング気味に箸を取り、料理に口をつけていく。

「美味しいぴょん！ 司令官、やつるー！」

そんな卯月の絶賛に、そりやどうも、と答え自身もまたトーストを齧る。そんな自身たちの様子を見て、四人もまた各自適当な席へと座り、朝食を口にし始める。

「…………あら、本当に美味しいわ」

トーストの上に一口サイズに取り分けたサラダとベーコン、目玉焼きを載せて齧るイムヤ。ホットサンドのような感覚なのだろうか…………？　あれが本当に美味しいのは自分には疑問だが、本人は満足なようだつた。

「目玉焼きが半熟だあ…………うん、美味しい」

目玉焼きを見て、目を輝かせながら箸で器用に黄身を崩さないように食べていく瑞鳳。固焼きより半熟派だつたらしい、かく言う自身もある。

「早いと思つたら、このフルーツポンチの具、缶詰ですね…………こう言うのも料理なんですね」

手に持つたスプーンでフルーツポンチを一口ずつ口へと運びながら、興味深そうに呟く夕張。これを料理と言つていいのかは疑問だ、果物の缶詰を開けて器に入れ、上から缶のサイダーを一本分ほど流しただけのものだからだ。と言つてもなかなかに手軽なので、短時間で作る分には便利ではある。

「…………美味しい、です」

ミルクと砂糖をたっぷりと入れた紅茶をゆっくりと口へと流し込み、ほっとした様子で弥生がそう言つた。

全員満足そのなので、少しだけ安堵しつつ、食べ終わつた食器を手早く積み上げ、シンクへと持つていく。

後ろで賑やかに食べている少女たちに少しだけ苦笑しつつ、食器を洗うと食堂へと戻る。

「各自使つた皿は洗つておくようにな」

そう言い残して、食堂を出る。

先日の遠征の件で処理しなければならない書類がいくつかある。さらには、まだ遠征関係の知識が足りないとと思わされたので、大本營から取り寄せた資料と、上官殿から拝借した資料で勉強する必要もある。

「…………やれやれ。今夜は徹夜だな」

咳き、またやれやれ、とため息をついた。

「美味しかつたわ」

「ちそうさま、と両手を合わせ咳き、イムヤが立ち上がる。

それに続くように、瑞鳳も卯月も夕張をも立ち上がり、弥生だけはまだもきゆもきゆ

とフルーツポンチを食べていた。表情に変化は無いが、それでも心なしか幸せそうではある。

と……食べ終わつたはずの四人が、正確には卯月以外の三人がテーブルの一角に集まり、ついでに卯月は夕張に首根っこ掴まれて一緒に集められていた。

「ねえみんな、朝食、美味しかつたかしら？」

「美味しかつたわね」

「美味しかつたですね」

「美味しかつたぴよん」

瑞鳳の問いに三人が頷く。まあそういうだろう、と瑞鳳も頷き、剣呑な目で問う。

「でもね、私は悔しいわ。提督があれだけのものを見せてくれたんだから、ここは一つ、

私たちも料理で見返さないと女のプライドに関わると思わない？」

そんな瑞鳳の言葉に卯月が、うへえ、と漏らし、嫌そうな表情をする。

けれど瑞鳳はそんな卯月を見下ろし、淡淡と問う。

「嫌そうね、卯月。あなただけ昼食と夕食抜きにする？」

瞬間、態度を百八十度変える卯月に、瑞鳳がうんうんと頷く。

残りの二人は、満更でも無い様で、少しばかりやる気に満ちた目をしていた。

と、三人がやる気を出したところで、瑞鳳の視線が最後に取つておいたサクランボをさあ食べようと手にしてた弥生のほうへと向いた。

「弥生、ちょっと手伝つて欲しいんだけど」

口の中でころころとサクランボを転がしていると、瑞鳳に呼ばれ弥生がそちらを向く。

「何か…………用ですか？」

首を傾げそう尋ねると、瑞鳳がうんうん、と頷く。

「提督、最近忙しそうだけど、今日もかしら？」

「いえ…………仕事自体は、昼には終わると…………思います」

「そう、なら提督に夕食まで食堂に来ないようについて言つておいてもらえる？」

「…………まあ、そのくらいなら、構いませんけど、昼食…………どうするんですか、それ？」

「私が持つていくわ、そのまま執務室で待つてくれればいいから」

「…………はあ、別にいいです…………けど」

「ごちそうさまでした、と手を合わせ、弥生が食器を提げて流しへと持つていく。

なんだか厄介ごと押し付けられたような気もするが、秘書官として仕事をしていれば自然と昼ぐらいまではかかるだろうと考えたので、特に問題もないか、と請合つた。

「弥生も、昼から何か用事があるの？」

「…………いえ、今のところは…………特に、無いです、けど」

弥生の返事に瑞鳳がにこり、として告げる。

「なら弥生も昼から食堂に集合ね？」

尋ねているようではあつたが、表情は笑顔だつたが、それでも有無を言わさない威圧に、こくりこくりと弥生は頷いた。

\* \* \*

「…………ふう、これで今日の仕事は終わりだな。弥生、昼飯にするか」

そう言われ、時間を見れば、まだ昼前。食堂で瑞鳳たちが作業している時間だと気づく。

同じく時間を確認した司令官が、席を立ち自身へ向かつて問うと、自身はふるふると首を振る。

「どうかしたか？　まだ何か仕事があつたか？」

「えつと…………瑞鳳、たちが…………ご飯作つて、ます」

なに？　と目を丸くする司令官。司令官はあまり感情を表に出さないので、こう言う

表情は少し珍しかつたりする。まあそれでも自身よりは表情豊かではあるが。

弥生は自身が感情表現が苦手であることを自覚している。そのせいで、他人から見ると怒っているようにも見えることも。だから、意識的に変えようとは思っているのだが、意識的に表情を作ると言うのがなかなかに難しい。

そのせいでこの間、卯月から顔が怖い、と言われてしまい少しだけショックを受けたのは秘密だ。

「それは…………私の分もか？」

「なら、午後からやろうと思つていたことを先にやつてしまふか」

そんなことを言い、机の引き出しから何十枚と重なった紙の束を取り出す。

そんな司令官の行動に、思わず首を傾げる。秘書官として司令官の仕事は把握しているつもりだ。それ故に、先ほど終わらせた仕事で今日は最後だと知っている。第一司令官自身が先ほど、これで今日の仕事は終わり、と言つた。

「えつと…………司令官…………それは？」

じやあ一体その紙の束はなんだろう、そんな疑問を司令官にぶつけてみると、司令官は自身の手元に視線を落とし、ああ、と納得したように頷いて答える。

「大本営と上官殿のところから拝借してきた遠征関連の資料だ。効率の良い遠征と効率

の良い遠征艦隊の組み方、どの資源が欲しい時にはどの遠征に行くべきか、などなど……知るべきことは山のようにあるからな」見れば資料と称されるそれは積み重なった厚さが軽く十センチを超えるような束であつた。

「えつと……お疲れ様です」

そんな自身の労いに、ああ、とだけ答え資料に目を落とし始める。

黙々と資料に目を通す司令官の邪魔になつてはいけない、と椅子の上でじつとしている。

チックタック、と時計の音と、パラリパラリ、と言う紙を捲る音だけが室内を満たし。「あの…………お茶、入れてきます」

沈黙に耐えれなくなつた自身が席を立つとのと。

「失礼するわ、提督！ お昼持ってきたわよ」

そう告げて、瑞鳳が執務室の扉を開くのが同時だつた。

視線をやると、山と段が積まれた重箱を抱えた瑞鳳とその後ろから卯月が入つてくる。

人間よりも遙かに力の強い艦娘だから簡単に上げているが、普通の人間なら重すぎて落としそうな量である。

さしもの司令官もこの状況で資料を読むつもりも無いのか、資料を机へと仕舞う。

「また……隨分と作つてきたな」

七段重ねの重箱を瑞鳳と卯月で一つずつ。計十四段の重箱を机の上に置けば、一人が使うには少々広かつた提督の机も非常に狭い。

「これ何人分だよ」

「六人分よ、提督」

全員ここで食う気か、と半眼で呟きながら自身へ向けてちょいちょい、と手招きする。

「弥生、隣の部屋から適當な机と椅子持つてきてくれ」

こくりと頷き、執務室を出る、隣の部屋はまだ誰も使ってない部屋で、倉庫代わりになつてるので、そこから机と椅子を五脚ほど見繕う。

「…………ん」

ぐつと力をこめると、椅子を乗せた机が持ち上がる。外見とは裏腹に艦娘の力は人間のそれとは比較にならないほど強い。駆逐艦の弥生ですら大の大人の何倍と言う腕力がある。だからこそ、小学生ほどの小柄な少女が椅子を乗せた机を一人で運ぶと言う、不可思議極まり無い光景も成り立つのだ。

執務室に机を運び込むと、すでにイムヤ以外の全員が執務室にいた。

「さて、お弁当広げましょ♪」

機嫌が良さそうに瑞鳳がそう言つて、重箱を運び込んだ机へと並べていく。

卯月も夕張もすでに席についているのに、一人いないことに疑問を持つ。

「あの…………イムヤ、さんは？」

空いていた司令官の隣の席に座り、そんなことを尋ねると、夕張が椅子を傾けながら答える。

「まだ何かやつてたわね…………けど、もうすぐ来るとと思うわよ？」

「なんだ……まだ何か作つてるのか？」

そんな自身たちの会話に、司令官が疑問を挟んでくる。そしてそんな司令官の疑問に、夕張が頷く。

「イムヤが夕飯作つてるから、期待してくださいね、提督」

と、その時。

「お待たせ、仕込みだけ終わらせてきたわ」

執務室の扉を開き、私服姿のイムヤが入つてくる。潜水艦は潜水するために水着を着ていることが多いが、鎮守府内でもまさかそのままなわけも無く、基本的には帰投すれば着替えていたため、私服のイムヤと言うのはそれほど珍しくも無い…………のだが。

「エプロン…………」

思わず呟く、いつものグレーのブレザーに赤のミニスカートの上から白いエプロンを

付けていた、エプロンにはヒヨコのアップリケが刺繡されている。

「何でエプロンなんて持つてるんだ、イムヤ」

自身と同じ疑問を抱いた司令官がそう尋ねると、イムヤが首を傾げる。

「料理するのに、エプロンしてないと、服が汚れちゃうじゃない」

何を当たり前のことを、と言った風のイムヤに、けれどそうではない、と言いたい自

身と司令官だったが、けれど諦めたようには息を吐く。と言うか諦めた。

「まあいい…………これで全員揃つたな、なら食べるか」

イムヤが着席したのを見て、司令官がそう言うと、全員がいただきます、と口にして箸を手に取る。

机の上に広げられた重箱には、多種多様なおかずが入つており、どれにしようかと一瞬迷つたが、すぐに目の前にあつた卵焼きに目を惹かれ、箸をつける。

口に運ぶと、ふわふわでとろとろな感触が口の中で踊り、濃い卵の味と薄い出汁の味が絶妙に混ざり合い、とても美味しい。

隣で司令官も同じく卵焼きに手をつけ、ほう、と唸つていた。

そんな自身たちの様子に気づいた瑞鳳がにこりと笑う。

「提督、弥生、私の作つた卵焼きどう？」

「美味しい…………です」

「うむ……美味いな」

そう答えると、笑みが一層深くなる。

幸せそうだな……つて、そう思った。

だから、だろうか。

少しだけ、そう、ほんの少しだけ。

気紛れに、そんなことを思つてしまつたのは。

弥生が作つた料理を、司令官に美味しいって言つてもらえた。

そんな想像をしてしまつたのは。

「え？ 料理のやり方？」

目を丸くして、鸚鵡返しに眩く瑞鳳に、こくりと頷く。

鎮守府の午後。昼食を終えて全員が執務室から退散する、司令官の作業の邪魔をしないようにだ。

秘書艦である弥生もその例外では無かつた、すでに今日一日の仕事は終わつている。今行われているのは、司令官の個人的な研鑽だ、弥生が手伝うことも無く、かと言つてただ黙つて執務室にいるのも気が散るだろうから執務室を出て、そう言えば午後からは食堂に行くのだった、と今朝の話を思い出してやつてみると作業中のイムヤの姿。

どうやら瑞鳳とイムヤで担当を分けたらしく、瑞鳳は昼食担当でイムヤは夕食担当。つまり瑞鳳の仕事はもう終わつたらしい。

そして、だからこそまだ忙しそうなイムヤではなく、食堂の机にかけて暇そうに足をぶらぶらとさせている瑞鳳に声をかけたのだ。

料理のやり方、教えてください…………と。

どうして自分はこんなことを言つているのか、自分でもやや混乱する自身を置き去りに、瑞鳳が良いわ、と承諾する。

「と言つても厨房はイムヤが使つてるからね…………私たちが使えるのは」

ふつと視線を向けた先、視線を追つて同じくその方向を見ればあるのは一台のオーブン。

「そうね…………お昼も終わつたし、おやつ代わりにクッキーでも作りましょか、それでいい?」

そう問われ、よく考えれば夕飯はすでにイムヤが作つてているのだと思い出し、頷く。「それじゃあ作りましょか」

「お願ひ…………します……」

ペこり、と一礼し、厨房へと向かう瑞鳳の背を追う。上手にできればいいな、なんてこと考えながら。

\* \* \*

トサツ、と資料を机の上に放り投げ、肩を軽く回し凝りを解す。

右手で目頭を押さえ、軽く揉んでやる。

時間を見る、午後三時過ぎ。すでに資料を読み始めて三時間近くが経過している。

「くあああ…………少しばかり散歩でもしてくるか」

背を伸ばし、軽く欠伸をかみ殺す。ずっと椅子に座っていたので少しばかり体を動かしたい気分だった。仕官学校時代ならひたすらランニングでもしていれば良かつたのだが、この鎮守符の場合、ランニングコースに行くまでにそれなりに距離があり、そこまで行くだけで軽い準備運動になつてしまふ。本格的に運動するならともかく、息抜きする程度なら散歩くらいしかやることが無かつた。

執務室の扉を開ける、長い廊下のさて、どこへ向かおうと考えて、数秒逡巡し、やがて外へ向けて歩き出す。

波止場に行つて風に当たつてこよう。海の目の前だけあつて、あそこは風が気持ち良かつた。

と、外への道を歩いている途中。

「司令……官……」

道中で弥生と出会う。そう言えば、いつの間にか全員いなくなっていたが、気を使わせたのだろうか。

よう、と挨拶すると、ぺこり、と挨拶が返される。

「何してるんだ?」

ライトペープルのエプロンを着て、三角巾をつけた弥生の姿はなかなかに愛らしく、また、微笑ましかつた。

「えっと、その…………司令官を、探して、て」

自身を? 一体なんの用か、と思い言葉を促すが、えっと、その、とどうにも言葉を濁した様子に、はてどういうことか、と考える。

弥生を見る、しどろもどろで、無表情ながらにどこか困惑した様子が見て取れる。

「弥生」

「え……は……はい」

「今時間あるか?」

思考を断ち切るような唐突な自身の問いに、弥生がこくりと頷く。

ならば良い、とその頭をぽんぽん、と軽く叩く。

「散歩するから一緒に行くぞ」

「……………はい」

数秒目を瞬しばたかせていたが、やがて頷き、自身の後ろをついてくる。

そのまま鎮守府を出て、港まで歩く。港の端を歩いていき、波止場にたどり着いて立ち止まる。

「…………ん、風、強い」

びゅうびゅうと吹く風に髪を押さえながら、弥生が目を細める。

深く深呼吸する。眠気も大分取れだし、気分転換の意味はすでに成している。

もう戻つてもいいのだが、その前に弥生が何をそんなにどもつていたのか気になり尋ねる。

「で、どうしたんだ？　さつきから歯切れの悪い」

見渡す限り、自身と弥生以外には見当たらない。わざわざ弥生を連れてきたのは、ここなら人気が無いからだ。

例え思わず口ごもるような、言いにくいことでも、今聞いているのは自身だけである。けれど、相変わらず弥生の口は開かず、代わりにそつと両手が差し出された。

「……………袋？」

その手に乗せられているのは、巾着袋。

受け取れ、と言うことだと判断し、巾着袋を手に持つてみる。中に何か入っている重

さがあり、はて、何だろうか、と首を傾げる。

「開けて良いのか？」

そんな自身の問いに、こくこく、と弥生が頷くので、遠慮なく巾着袋を開く……と、そこに入っていたのは、クツキーだった。

数度目を瞬かせる。弥生に視線をやると、ぴくり、と肩震えた。

「その…………みんなで、作ったので、司令官も…………どうぞ」

じ一つと見つめてくる弥生の視線が自身の手元に誘われている。  
ふむと呟き、巾着袋から一枚、クツキーを摘み、口に運ぶ。

もぐもぐ、と口の中でゆっくりと咀嚼し、しつかりと味わう。  
ごくり、と飲み込み、けれど無言な自身に弥生が恐る恐ると言つた声音で尋ねてくる。

「あの…………司令…………官…………どう、でした？」

「ん…………そうだな。まずところどころ焦げてるな」

「あ…………う…………」

虚飾の一切無い、問答すばりな言葉に、弥生が呻く。

「あと、形が不揃いだ、型抜き使つても素人じや上手くできないからな、ああいうのは」

「…………」

「それと型抜きする前に生地冷やしてないだろ、やつとかないと生地が柔らかすぎて、型

抜きも並べるのも上手くいかないぞ」

「……………」

「それと砂糖入れすぎだ、甘過ぎるのもそうだが、砂糖が多いと、それだけ焦げやすくなる。チョコレートクッキーかと思つたぞ、最初」

「……………もう、いいです」

がくり、と肩を落とした弥生に、けれど構わず自身は続ける。

「ま、次に期待つてどこだな」

そんな自身の言葉に、え？ と弥生が顔を上げる。

「注意すべきところは多々あるけれど…………まあ、それでも作つてくれたのは嬉しかった、ありがとうな」

くしやくしやと、弥生の頭を撫でた。

「まあ、それでも作つてくれたのは嬉しかった、ありがとうな」

言葉と共に、頭の上に手が置かれ、三角巾越しに頭を撫でられる。

艦娘より遙かに力に劣るはずの人の手。そもそもそこに力などこめられていないのだからあり得ないのだが。

けれど、その手の温もりが、何故だかとても力強いものに感じられて。

動けなかつた。どうしてか…………否、多分理由は分かつてゐる。  
だつて。

「それじや、帰るか…………」

そう言つて頭の上から手が退けられることを。  
とても、寂しく感じていた。

嫌ではなかつた、つまりそれが答えなのだろう。

「あ、あの…………司令……官……」

自身の咄嗟の呼びかけに、司令官が振り返る。

どうした？ そんな司令官の問いに、また口籠り…………けれど、頭の上に載せられ

たその手の温もりを思い出して。  
「あ、あの…………もう少しだけ、あと少しだけ…………頭、撫でて欲しい…………です…………」  
そんな自身の精一杯に、司令官が目を大きく見開き…………。  
「…………くく、お安い御用だよ」

クツキーありがとうな、そんな司令官の言葉と共に、また頭の上に手が載せられる。

「…………いつも、ありがとうな」

そして、そんな司令官の言葉に。

「…………こちらこそ、いつも…………ありがとう……」

気づけば、暖かい気持ちが溢れ。  
自然と、笑顔になれた。

# 十一話 新人提督が火力不足に悩んだりする話

ズドオオオオオ

「……………え？」

遠くに視認できた敵の姿。まだ魚雷どころか、瑞鳳が艦載機を発艦させるより尚遠い  
その距離で。

唐突に響いた砲撃音。そして、直後に感じた衝撃。

「「弥生っ?!」」

駆逐艦の脆い装甲などあつさりと突き破り、腹部に走る鈍痛。

それでも崩れ落ちることはせず、左手で腹部を押さえて前方を睨み付ける。

「弥生は…………大丈夫、だから…………砲雷撃戦…………始めて、ください」

自身のその言葉に、三人が僅かに躊躇し、けれど頷いて進撃する。

けれど、まだ先にいる敵の姿は遠い。

そう…………悲しくなるほどに、遠かつた。

「全艦載機発艦！」

「よくも弥生を…………許さないぴよん！」

瑞鳳の艦載機が空へと飛び立つ。卯月がまだ駆逐艦の間合いより一つ遠いその距離でけれど敵へと狙いを定める。

けれど、それでも。

ズドアアアン

ソレの主砲から放たれる砲撃一発で、艦載機の半数が落ちる。

カキンカキン

確かにソレへと直撃したはずの卯月の砲撃は、けれどソレの表面を軽快を音で打つだけに止まり、傷一つ与えない。

そしてこちらの攻撃が止められたと同時に、反撃とばかりに放たれる三発目の砲撃。

スドオオオオオオン

「きやああああああああ！」

砲撃が瑞鳳に直撃し、その機能を半分以上一度に停止に追い込む。完全なる大破だ。けれどそれで終わつたのは、ソレの攻撃だけだ、まだ他にも敵は四体もいる。

雷巡チ級、軽巡ヘ級、駆逐イ級、駆逐イ級。

決して砲撃戦に強い艦種とは言えない、だが逆に……。  
シユウウウウウ…………ダアアアアン

「きやつ！ 被弾?! 急速潜行、急いで！」

潜水艦には滅法強い艦種たちである。四隻もの相手からの集中攻撃に、イムヤが被弾、中破する。

段々近づく敵の姿…………判断は一瞬だつた。

「全艦、反転…………撤退します」

雷撃戦を行う余裕はすでに無い。そもそも、現状、こちらで雷撃ができるのが卯月單艦であり、敵は四隻…………しかも雷装に特化した雷巡までいると言う時点でもう勝負にならない。

反転、逃走する自身たちを、けれど敵は追つてこない。深海棲艦は基本的に自分たちの繩張りから動くことは無い。だからきっと、次にまたここにやつてくる時もソレらはいるのだろう。

ギリツ、と僅かに食いしばった歯を軋らせる。仲間を見れば自身…………弥生が中破、瑞鳳が大破、イムヤが中破、卯月もここに来るまでにいくらか被弾して小破寸前。対して敵中枢艦隊の被害らしい被害は零…………完全なる敗北である。

「…………どうすれば」

思うのは、一つ。どうすれば、あの敵たちを倒せるのか…………司令官に勝利の報告を届けることができるのか。

「……………負けね。私たちの、完敗」

イムヤが体を重そうに引きずりながらそう呟く。そしてイムヤのその呟きに、全員が黙り込む。

分かつっていた、完敗だ。完全に負けた。歯が立たなかつた。

分かつているから、こんなにも悔しい。

そして考える、どうしてこれほどまでに一方的に負けたのか。

そしてすぐに理由に思い当たる。

「……………アソッさえいなければ」

瑞鳳がそう呟く、失った艦載機の数を数えれば、両手の指の数でも足りない。空母にとつての艦載機とは生命線である。空母が空母であることの最大の理由。それをあんなにも一方的に蹴散らされた彼女の心境は、駆逐艦の自分では計り知れない。

戦艦ル級。

たつた一隻で、こちらの艦隊をここまで打ちのめした最大の敵の名だ。

駆逐艦の砲撃程度ではびくともしない装甲と、軽空母よりもさらに遠い所から撃つてくる射程、そして全艦種の中で最強と呼ばれる砲撃戦時の火力。そこにさらに、対空能力までをも兼ね備えた最強の艦種。唯一の欠点は雷撃戦能力が無いこと、正確には雷撃戦能力の全てを砲撃戦へと特化させてしまつた艦。

撃たれる前に撃ち敵を殲滅する、そんな戦術の理想のようなことが本当にできてしまふ艦。

もしアレの装甲を貫ける攻撃があるとすれば、瑞鳳の航空爆撃か、自分たち駆逐艦の魚雷だけだろう。

それもただの魚雷ではダメだ……至近距離から直撃させる、つまり夜戦だ。だが魚雷をそんな距離から当てるということは必然的に敵に肉薄している必要がある。

あの距離から撃たれて中破するようなあの砲撃を放つ敵を相手に……近接しなければならないのだ。

しかも敵は戦艦ル級だけではないのだ、そんなことをすれば敵の水雷戦隊に囮まれてこちらがやられるだけだろう。

つまるところ、こちらの弱点は明白だつた。

\* \* \*

「…………戦艦か、重巡が必要、です」

第一艦隊の帰投、そして入渠が完了してからやつてきた弥生の出してきた報告書を見て、思わず唸る。

小破一隻、中破二隻、大破一隻。敵中枢艦隊撃破数零。

控えめに言つて惨敗。はつきり言えば、完敗だ。

まだ鍛度も高くないとは言え、序盤と言われるこの海域…………製油所地帯沿岸がこの結果。

もつと根本的な間違つている…………足りていないと言わざるを得ない。

そして何が足りていなかは自分にも、そして弥生たちにも分かつていた。

「…………砲戦火力、か」

今回の場合、見るべきは先制攻撃による弥生の中破…………ではない。それは最早事故のようなものだ。艦載機を発艦する間合いよりさらに遠くから撃つてきた一撃など早々当たるものではない。今回は偶然当たつただけだし、鍛度があがればそれすらも回避するだけの技術を身に付けるだろう。

だがその後が問題だ、互いが砲撃戦の射程に入つた後、敵の戦艦にまともなダメージを与えていない。戦艦が盾になつたせいで、随伴艦である他の水雷戦隊も倒せていない。

それは全て戦艦を好き放題させていることによる悪循環だ。

本来なら艦載機で敵が足止めを食らつてゐる隙にでも随伴艦を落とし、接近して雷撃、これで戦艦だろうと駆逐艦でも倒せたはずだ。

ならば何故本来の結果に至らなかつたか。

問題点は二つある。

一つは瑞鳳が使う艦載機。  
本来空母の航空攻撃とは、一撃で戦艦を中破、ないし大破に追い込むほどの強力なものだ。

だがそれは空母の鍛度を上げ、さらに性能の良い艦載機を使ってこそ、である。

瑞鳳が今使っている艦載機は、瑞鳳が初期装備として持つていて九九式艦爆と九七式艦攻の二種類だけだ。

これまで戦つて来た敵は皆、対空能力の低い敵ばかりであつた故に問題はなかつた。

だが戦艦は艦戦を載せた空母を除けば、最強の対空能力を持つ艦だ。

故にこれまで通りの航空攻撃は期待できない。

火力だけで言えば、我が艦隊最強のはずの瑞鳳が封じられてしまつてゐる、それはつまり。

「問題二つ目…………砲撃戦火力の圧倒的な不足、か」

駆逐艦と潜水艦は魚雷こそが主武装だ。その最大の威力を発揮するのは近距離戦闘である。

だがそこまで接近する間に、当然ながら敵からは砲火を浴びせられることになる。  
それを少しでも減らすのが瑞鳳の役目だつた。開幕の航空戦での先制攻撃、そして砲

撃戦時に航空攻撃によつて敵に数を減らし、少しでも駆逐艦が敵に近づくのを援護する。戦艦も重巡洋艦もいない我が鎮守府では敵を殲滅するためには魚雷を敵に撃ち込むしかない。最大火力が瑞鳳とは言え、初期装備の艦載機二種に加え単艦では数の暴力には勝てない。敵を倒しきる前に相手の水雷戦隊の魚雷で大破してしまうだけだ。

だからこれまでの攻撃パターンとしては、砲撃戦で一隻でも多く相手の水雷戦隊を魚雷発射不可能…………つまり、中破以上に追い込みながら、こちらの駆逐艦、潜水艦を無傷で相手に接近させるか、と言うものだつた。

だがそこに戦艦が現れた。

こちらの砲撃戦の間合いよりさらに遠くから駆逐艦どころか、軽空母すら一撃で大破に追い込み、こちらの最大火力である瑞鳳の艦載機をあつさりと封じてしまう敵。

故にこちらも戦術を変える必要があつた。

「個人的に、大艦巨砲主義つてのは性に合わないんだがな」

火力の高いほうが勝つ…………そんなもの、戦術の意味が無いではないか。と言うか、そんなものが絶対では、うちの鎮守府はやつていけない。

だから、考えなくてはならない。あくまで今のメインは駆逐艦と潜水艦の雷撃。  
だが同時に、主義主張に拘つて、選択肢を狭めるようなバカらしいことはしたくない。  
「…………やつぱり、回す必要があるな、戦艦レシピ」

敵戦艦に対して対抗するには二つ方法がある。

一つは艦載機の質を上げること。開発によつて質の高い艦載機、彗星や天山などを作り、瑞鳳に持たせる。

対空が高いとは言え、敵に空母がいない以上制空権は簡単に確保できるのだ、艦載機の質が上がればいかようにも攻撃を届かせる方法はある。

メリットは装備を変えるだけなので、現状維持のまま戦力の底上げをできること。つまり、艦が増えないので消費も増えない。ある意味、現在の自身の鎮守府の財布事情には優しいかも知れない。

デメリットは何が出るか分からぬこと。開発と言うのは建造と違つて失敗が存在する。失敗すれば資源だけを無駄に浪費するし、仮に成功したとしても質の高い装備は基本的に出にくい、それこそ現状を同じ最低レベルの装備ができるかも知れない。もしそ質の高い装備が出るまで粘れば、この鎮守府の乏しい資源などあつと言う間に枯渇する。つまり開発できる回数の少なさに對して、開発で出る装備の品質が保証できない。最悪、低レベルな装備だけ無駄に増え、資源だけ無くなると言う目も當てられない状況になるかも知れない。

一つは戦艦レシピを回し、高火力な艦を建造すること。

そもそも瑞鳳単艦に砲撃戦を任せているような状況に問題があるので、だつたらこれ

は抜本的な改善策と言えるかもしれない。

メリットは開発と違い、確実性が高いこと。戦艦レシピで出てくるのは戦艦、重巡洋艦、軽巡洋艦の三種類。割合はそれぞれ三割以上、六割以上、一割未満と言われている。つまり、戦艦が重巡、目的の艦が出る確率は9割を超えるかなり確実性の高いものだ。

デメリットは、戦艦レシピは非常に高コストだと言うことだ。現在我が鎮守府の資源備蓄は燃料1000、弾薬900、鋼材700、ボーキサイト600。遠征と任務達成によりかき集めた現状の精一杯だ。対して戦艦レシピは燃料400、弾薬30、鋼材600、ボーキサイト30。つまり一度回せば、燃料は半分近くに減り、鋼材に至つてはほぼ枯渇する。

しかも建造しただけで終わりではない、戦艦、重巡は一戦ごとの消費も非常に高コストだ。大破などしようものなら、鋼材が賄い切れない可能性だつてある。つまり、どちらも一長一短ナリスクを背負つていて。どちらを選ぶ、と言うのに正解の選択肢は無い。

だが、今回の場合、どちらを選ぶのかは決まつていて。

「…………建造するぞ、弥生。戦艦レシピだ」

「…………了解、です」

先ほども言つたがやることは建造だ。

どちらにも正解は無いが、もう一つ遠いところから考えれば分かる。

第一艦隊の数だ。装備を開発するのは、第一艦隊が埋まり、簡単に入れ替えができるくなつてからで十分だ。

敵の数は戦艦を入れて五隻、こちらは四隻。まずこの不利から解消していくのは火力以前の問題である。

「…………これで鋼材の残量が心もとないな」

残り100、入渠の際に必要な分だけの鋼材は確保しておきたい、これから戦艦か重巡と言う高コスト艦が増えるのならば、尚更だ。

「夕張と卯月に頑張つてもらうか…………」

すでに四度の遠征を経験し、旗艦としても大分頼りになつてきた夕張。その夕張を補佐しつつ、肝心なところでミスを犯さないように立ち回つてくれている卯月。二人の息も大分合つて、遠征もそろそろ合同でやる必要もなくなつてきた。

「…………第二艦隊に組み込む艦の建造もそろそろ視野に入れるべきだな」

とは思いつつ、今はまだ無理だろう、建造するほどの資源が余つていらない。

「やれやれ…………まだしばらく厳しい運営が続きそうだな」

弥生のいなくなつた部屋で、弥生の出て行つた扉をぼんやりと見つめる。

秘書として共に仕事をこなしながら、旗艦として艦隊を率いる弥生には大分苦労をか

けているな、と思う。

だからと言つて加減したりはしない。

こんなペーペーの新人提督を、信じると、そう言つてくれたのは彼女だ。

だからこそ、全力で運営する。そのために秘書艦である彼女には苦労をかけるかもしれないが。

それが、彼女の信頼に応える、そのための自分の中でのたつた一つの答えだ。

## 十二話 新人提督が重巡を建造したりする話

「……………今何時だ？」

「ヒトハチマルマル…………六時、です」

執務室で弥生と二人、終わつてしまつた仕事の書類を手持ち無沙汰に眺めながら佇む。

時間を見る、弥生の言つた通りすでに夕方六時。もう一時間もすれば食堂で夕食を取る姿がちらほらと見え始める頃だ。

「私が建造に行かせたのは？」

「ヒトフタマルマル…………十二時、です」

時間にしてすでに六時間。空母レシピで六時間と言えば翔鶴型と言う建造報告の少ない希少な艦がいるのだが、生憎戦艦レシピの最長は長門型の五時間だ。今のところそれ以外の報告は無い。オール30レシピの潜水艦と違つて報告が希少過ぎるとか言うのではなく、皆無なのだ。

一応大和型と言うのが八時間の建造時間を要するため、存在しないわけではないのだが、大和型はまたレシピが違う、と言うか建造方法自体が異なる。現在やつてている通常

建造では絶対に出ない艦なので、その可能性はあり得ない。

つまり、どういうことかと言うと。

「すでに終わっているはずだよな？」

「…………それは、ですけど」

弥生もやや困惑したように頷く。すでに建造が完了したはずの艦娘がやつて来ない。もう一度時計を見る、時間は確かに六時を告げている。

「…………探してくるか」

何かあつたのか、何も無いのか、さてはて、一体どちらかはわからないが、このままで来るかも分からぬ新造艦を待つよりは探しに行くほうが賢明と言うものだろう。「悪いが弥生、もう少しここで待つてくれ、三十分ほどで戻るから、その間に誰か來たら待たせておいてくれ」

「了解、しました」

こくり、と弥生が頷いたのを確認し、執務室から出る。

まず最初に向かつたのは工廠。

重い鉄製扉を開く、と相変わらず暗い室内。

奥まで見通せない、飲み込まれそうなほどに深く闇が広がる空間。

実を言えばこの奥に入つたことは無い。と言うか提督と言えど最重要機密であるこ

の奥に入ることはできない。

だから。

「どーかしましたか?」

妖精と呼ばれる彼女たちが気づけば自身の足元にいた。

身長十センチ前後と言つた彼女たちはあらゆる鎮守府にいて、鎮守府内の数多くの仕事を従事している。

彼女たちは艦娘同様、最重要機密の一つであり、自身たち提督は彼女たちをそう言つた存在であると認識している。否、そうしなければならない。

改めて考えると、鎮守府と言うのは闇が深いと思うが、けれど軍隊なんてそのくらいの理不尽は当たり前にあるものなので、あまり気にはならない。

まあ話は戻すが、入り口に入ればすぐに彼女たち妖精がやつてくる。建造を行つたのは彼女たちだ、その彼女たちに新しく建造された艦娘のことを聞く。

「え? もう四時間以上前に出て行きましたよ?」

そして返つてき答えた答えがこれである。

新しく建造された艦についての詳細を妖精から聞き、工廠を後にする。

話をまとめるとき性の問題ではなく、性格の問題のようだ。

「…………さて、どこを探すかな」

と言つても、この鎮守府はそれほど広くない。

母港拡張するほど艦娘たちもいないので、ほぼ初期状態のままだ。

必然的に広さもお察しである。

弥生に三十分と言つたが、マジメに言つて三十分あれば艦娘たちが寝泊りする寮まで含めて全て回れる、まあ本当に回るだけならだが。

それはともかく、探す候補はそれほどない。まだ着任の挨拶すらしていないので、寮などはまだ部屋を割り振つてないし、出撃したわけでもないので、入居施設や補給所は無いだろう。

と、なると可能性としては…………。

「波止場か…………あとは食堂くらいか？」

ただ工廠を出たのが四時間も前である。あまりうろちよろしていれば職員の誰かが見ているだろうし、となれば一箇所にいる可能性は高い。四時間前、つまり十四時ごろだ。波止場にいる、となればすぐに見つかるだろうが、逆に食堂なら…………。「全員昼食終えてすでに仕事に戻つてるだろうしな、可能性としては十分あり得る」と言うかもうそれくらいしか思い浮かばない。

まあ違つたなら誰かに聞きながら探すか、と思いつつ食堂へと向かう。  
今日も間宮さんの作る美味しそうな料理の匂いが…………。

「……………何？」

まだ六時だ。まだ六時である。軍隊である以上終業時間と言うのは無いが、休憩時間を各部署ごとに割り振つてある。だがその一番最初が七時だ。特に今日は出撃から艦娘たちが帰つてきたばかりなのでどこの部署もそれなりに忙しいはずである。

だと言うのに、こんな早い時間に誰が間宮さんに料理を注文しているのか。

「……………やはりここか？」

疑い半分、食堂の扉に手をかけ……………開く。

「いやー、美味しいわ。マジ美味しいわ、間宮さん、これ追加ねー」

机の上にどん、と置かれたカレー皿。

盛られたカレーライスにスプーンを突っ込みながら、合間合間にアイスティーをストローコードに飲みながらはしゃぐ少女がいた。

錆青磁と言うのだろうか？ 青と緑の中間色に灰色を足したような少しくすんだ色の髪と瞳をした少女。

「……………何をしている？」

あまりの乱痴気振りに頭が痛くなりそうだったが、少女の後ろに立ちそう尋ねる。自身の存在にようやく気づいたのか、少女が振り返り…………。

「あ……………忘れてた」

そんなことを口にした。

「チーツス、最上型重巡鈴谷でーす。よろしく〜」

場所を変えて執務室。連れて来た少女に紹介を求める。笑顔で少女がそう告げる。  
まるでこれまでの一幕が無かつたかのような晴れ晴れな笑顔。

自身はおろか、弥生までもため息を吐く。

「…………それで、釈明を聞こうか」

「え？ 何の？」

冗談なのか、それとも本気なのか。本気なら性質たちが悪いが、すぐに少女は頭をかきながらジョーダンジョーダン、と口にする。

「いやー、建造終わつて工廠から出たらちようど二時前でさー。で、二時くらいつてちょうど眠くなる時間帯じやん？ で、ちょっと食堂あつたんで昼寝してたらさ、気づいたら五時過ぎてるわけ、で、そしたら私、昼御飯も食べてないわけじやん？ お腹空いちゃつてさー。んで、ちょっと間宮さんに頼んでカレー作つてもらつたらこれが美味しくてさ、気づいたらあんな時間で、提督のどこ行くのすっかり忘れちゃつてたわ」  
あつけからん、と言う少女…………鈴谷に、自身も、弥生も、また一つため息を吐く。  
「いやーごめんごめん、まあ出撃するなら任せてよ、ガンガン働くからさ」

ニヒヒ、と笑いながらそう続けた鈴谷。まあ性格に難ありだが、やる気はあるようなので、良しとしておく。

「…………はあ、まあいい。今この鎮守府の第一艦隊は駆逐艦二隻、軽空母一隻、潜水艦一隻の計四隻だけだ。必然的に鈴谷、貴君には第一艦隊に入つてもらう」

「ほおー。第一艦隊か、それは光榮だねえ。っていうかさあ、四隻しかいないのに、そのうちの一隻が潜水艦つてマジあり得なくない？」

そんなことは言われなくても分かつていて、そう返すと、まあそうだよねえ、と笑う。先ほどから思っていたが、どうやらかなり陽気な性格をしているようだ。まあ暗いよりはずつと良いので、微妙に評価プラスである。

「これで空母と重巡……航空戦と砲撃戦の要が揃つたな。弥生、今度こそ…………勝つぞ」

隣に佇む秘書艦の少女にそつと呟き…………弥生が、頷いた。

\* \* \*

視界の中に、敵の姿を収める。

前回この距離で敵は撃ってきた。油断はできない。

「全艦隊警戒態勢。敵との交戦に入ります」

前回の敗北が身に染みている鈴谷以外は鋭い目つきで前方を見据える。

「…………さてさて、突撃いたしましよう」

くすり、と鈴谷が笑い、前方へと砲を向ける。戦艦ならまだしも、重巡洋艦が撃てる距離ではない。

そのことに疑問を思うよりも先に。

ドオオオオ

響く砲撃音。空気を切り裂き、飛来する敵の砲撃…………けれど。

「うりやー」

ドオオンパアアアアアアン

鈴谷が放つた砲撃が、敵の砲撃と中空で激突し、爆発を起こす。

「ふつふーん、どーんなもんよ」

目を丸くする。砲撃を砲撃で撃ち落す、などと言ふ芸当を見せた目の前の仲間を見る。

けれどすぐに前を向く。

行ける。

そう思つた。

「全艦、攻撃開始、です！」

いつもより少しだけ声に籠った感情。それは前回の敗北による士気の低下を払拭するだけの熱があった。

それに中てられたかのように、イムヤも、卯月も、瑞鳳も意氣揚々と前進を開始する。「ふふーん、んじや、一発目は鈴谷にまつかせなさい！」

まだ僅かに遠い敵へと向けて鈴谷が砲を構える。と、同時。  
ドオオオオオ

砲が火を噴き、砲撃を放つ。放たれた砲撃は、狙いを過たず、敵の戦艦へと直撃する。戦艦ル級の右肩部分が吹き飛ぶ。そこに取り付けられていた砲がまとめて吹き飛ばされ、右側の武装がその腕ごと沈んでいく。

一気にその武装の半分近くをごそりと失つた戦艦ル級に、次いで瑞鳳の艦載機が襲い掛かる。

「さあ、行きなさい！」

戦艦ル級が対空火砲を放つが、片側しかないその火砲は過日よりも大幅に効果を減少させ、八割以上の艦載機がル級たちの傍まで飛んできていた。  
「アウトレンジ………決めます!!」

艦載機から次々と放たれる爆弾と魚雷が三艦二列で密集していた敵へと襲いかかる。

ドドドドドドドオオオオオオ

航空攻撃特有の轟音が鳴り響き、敵の戦艦ル級に追撃のダメージを与え大破させ、敵の水雷戦隊にも大きなダメージを与えるその身を中破や小破させる。

「今度は…………貫く、ぴょん！」

すでに半壊しかけた敵に対し、さらに接近していくのは自身……弥生と、卯月だ。前回は戦艦に全て弾かれた単装砲だが。

「第30駆逐隊を、なめないで！」

卯月と二人、敵の装甲の薄い部分を狙い、放つ。単装砲が火を噴き、戦艦ル級の体に致命的な一撃が突き刺さる。

崩れ落ち、沈むル級。だが油断はしない、前回はこの敵たちに完敗した。だから今度は、完全勝利で持つて、その汚名を返上しなければならない。

「卯月」

「弥生！」

卯月の名を呼ぶ、分かつているとばかりに卯月も自身を呼ぶ。

さつと二手に散開する。そうして出来たのは、敵艦隊と…………そして鈴谷の向けた砲との射線。

「ほら、次行っちゃうよ！」

そうして放たれる火砲。けれどその砲撃は敵の僅か手前で着水し、飛沫を跳ね上げる。

外れた、そう自身が思つた瞬間。

ブウウウウン、と聞こえるエンジン音。

ふと空を見れば、そこにいたのは鈴谷の装備だつた水上偵察機。

「着弾観測…………今度は外さないよ！ つと」

そうして砲身を僅かに上へと向け、再度火砲を放つ。

水上偵察機によつて着弾の観測を行い、目標とのズレを修正させた砲撃は、今度こそ敵の雷巡へと直撃し、一撃で轟沈させる。

凄い、と思う間も無く、上空から急降下してきた艦載機…………九九式艦爆が敵軽巡の真上へと爆弾を落とし、敵軽巡を轟沈させる。

「数は少なくとも、精銳なんだから！」

遠くで、ぐつ、と拳を握る瑞鳳。そして笑う鈴谷。

ああ、負けてられない、と。

単装砲を発射。敵の駆逐艦を中破させる。

「…………やつぱり、火力、足りない、かも？」

駆逐艦だから仕方ないとは言え、いや、だからこそ、こちらが使えるのだが。

魚雷発射管に搭載された標準装備の魚雷を放とうとし……。  
直後、敵の駆逐艦二隻が爆発する。

「…………え…………？」

「おりょ？」

どうやら卯月ではないようで、驚いた顔をしている。  
では誰が？と思つた瞬間、海底から浮き上がつてくる赤色。  
それを見た瞬間、先ほどの攻撃が誰のものか、理解した。

「わお、大量、大量！」

一発の魚雷で二隻の駆逐艦をし止めたイムヤが満足気に咳き、こちらを見る。  
「敵全機撃沈完了、ね！」

「…………はい」

少しだけ、トドメを持つていかれたな、と思ったが…………けれど全員無事で、カス  
り傷を負うことも無く無事済んだと、ほつとし。  
まあ、いいか。

そう思つた。

\* \* \*

「暇だ」

男がそう呟く。

男の座る椅子の前に置かれた机には、書類のようなものが山積みになつてゐる。にも関わらず男は呟く、

「暇だな」

サボリ、ではない…………何故ならこの山のような書類はすでに男が目を通し、必要事項を書いている、つまり終わつた仕事だからだ。

だから男の言うことは別に的外れでもなければ、非難されるようなことでもない。  
「…………鬱陶しいですね、司令官。死にますか？」

けれど、そんな理屈は男の秘書艦には通じない。敬つていられないわけでもないし、軽んじているわけでもない。だが、それでも男の態度は女にとつて目に余つた。

「だつて暇だぜ」

「では、これをどうぞ」

そうして女が一枚の便箋を男へと渡す。

男がきよとん、とした表情でそれを見て、陽光にかざし、表へ裏へと返しながらその便箋を見つめる。

「これは？」

「大本営からです」

女の端的な言葉に、訝しげな男は、やがて便箋を破り中に入っていた用紙を取り出す。

「……………」

数秒、あるいは十数秒の沈黙。やがて男が口を開く。

「……………なんだこりや」

「何が書いてあつたのですか？」

そう尋ねる女に、男が用紙を投げ渡す。その行動に一瞬、女が眉目を潜めるが、けれど口を開くことなく用紙へと視線を落とし……。

「つ?! これは」

すぐに男へと視線をやる。女の視線を受けて、けれど男は動かない。

「司令官」

女が男を呼ぶ。男がちらり、と自身の秘書艦を見る。

「……………不知火、第二艦隊に出撃の準備をさせろ」

男の視線を受け、言葉を受け、女が頷く。

「了解しました、司令官」

部屋から出て行く女を見送り、一人残された男はぽつり、呟く。  
「きなくさいな……………アイツは大丈夫か？」  
近くの鎮守府にいる自身の元部下を思い出し、そう呟いた。

# E 1 夏のある日に — one summer day

「…………暑い」

あらかた片付けた書類をまとめながら、思わず呟く。

見れば隣の弥生もややげんなりしている（ような気がする）。

ふと昨夜ぶら下げておいた室温計を見れば、室温三十三度。

窓を全開にしてこれである、海の傍だけあつて風通しは良いが、吹く風は総じて生温く、不快指数だけが増していく。

「…………大丈夫か、弥生？」

「…………」

額にうつすら汗を浮かべる弥生にそう尋ねるが、帰つてくるのは無言。

隣にいるのに聞こえなかつた、と言うのは無いだろうし、無視していると言う風でもない。

というか、先ほどからぴくりとも動いていないのだが。

「弥生…………？」

軽く肩を揺すると、無表情に見えた目に光が宿る。

「…………え…………あ…………司令、官?」

「…………不味いな、これ」

完全に暑さにやられている、倒れる前になんとかしたほうがいいかもしない。  
と言つても、鎮守府内の電気工事のために電気の供給がストップしているため、エアコンや扇風機と言つた涼を取るための電気製品は使えない。

「…………うーん、どうすべきか」

こんな時どうすべきか、と数秒考え、一つ案を思いつく。

「ふむ…………弥生」

「え…………はい、なんですか…………司令官?」

またぼうつとしかけていたらしい半分瞼の落ちた弥生が自身の声にはつとなつて目を開く。

やはりこの案を実行すべきだろう、ここにはいない他の艦娘たちや鎮守府で働く妖精たちにも。暑さの影響で何か問題が起ころる前に。

「浴場に水張つてきてくれ、やり方は知つてるよな?」

「え…………あ…………はい、一応、毎日、使つてる…………から……」

頼んだ、と弥生に告げ、自身は執務室を出る。  
向かう先は、工廠だ。

\* \* \*

弥生が司令官に頼まれたことをやり終え、執務室に戻つてくると先に部屋から出て行つた司令官の姿があつた。

「司令官…………お疲れ様です」

弥生の言葉に、ようやくこちらの存在に気づいたのか司令官が顔を上げる。

いつもの白い軍服を脱ぎ、ラフなTシャツ一枚と言つた格好が少々新鮮だつたが、それでも帽子だけは律儀に被つているところが少しだけおかしかつた。

「お、弥生帰つてきたか。今日の仕事はもういいぞ、緊急でやらないといけない仕事は無いしな」

司令官のそんな言葉に、驚くと共に納得もする。確かにこの暑さでは頭がまともに働かない。先ほどまで湯だつた頭で呆けていた身としてはありがたかつた。

時計を見れば午前十時。これからまだまだ暑くなる、と考えればどこか涼めるところでも探そう、と考えて、部屋を出ようとすると司令官に呼び止められる。

「どうか……しました……か？」

「こんなに暑いのに冷房も扇風機も無いからな、もうみんな気力も出ないだろ。今日は出撃も遠征も休みにするから、他のやつらにもそう言つておいてくれ」

「分かりました」

「それと、後で全員に工廠に行くように行つておいてくれ」

部屋を出る際、司令官がそう言う。頷き部屋を出て…………それから首を傾げる。  
「…………工廠？」

そんなところに一体何をしに？ とは思つたが…………まあ司令官がそう言うならと考え、深く詮索するのを止めた。

「……………いない？」

イムヤ、瑞鳳、卯月、夕張の部屋の扉を叩く、だが返事は無く扉には鍵がかかっていた。

外から呼びかけても返事が無く、それらしい気配も無い。どうやら留守にしているらしい。

そもそも、基本的に全員緊急時に備えて出かける時以外は鍵を閉めないので、鍵が閉まっていると言うことはどこかに行つているらしい。

こんな暑さの中でどこに？と思ひながら最近入ってきたばかりの鈴谷の部屋をノックする。

「はーい、誰？　つて弥生じやん、どつたの？」

部屋の扉を開けて鈴谷が出てくる。ふと見遣れば、開けた扉の向こう側、部屋の中でイムヤや瑞鳳、卯月、夕張がフローリングの上に倒れている姿が見えた。

自身の視線に気づいたのか、鈴谷が苦笑する。

「いやーあつついからさ、喋って気を紛らわせようつてことになつたんだけどさー、同じ部屋に四人も入っちゃつたせいで逆にもつと暑くなつちやつてね、最終的にみんなフローリングの冷たさの虜になつちやつてるんだよね」

弥生も来る？なんて聞いてくるが、暑苦しいのが分かつていて、何故この上さらになつてているのかもしれないが。

「司令……官から……伝令、です。できれば、全員に、聞いて欲しい……です……」

そう言うと、鈴谷があいよー、と軽く返事を返し部屋の中へと戻っていく。

どつすんどつたん、ばたん、ごとんごとん、どたん、ごとごと、どたーん  
閉じられた扉の向こう側から聞こえる音を無視しながら待つこと数十秒。

「……………何か用？」

「…………暑い…………」

「死ぬ……びよん……」

「…………」

「つれて來たよー」

ゾンビのようすに暑さにうな垂れる四人と一人まだ余裕のありそうな鈴谷が部屋から  
出てくる。

ちゃんと聞いているか怪しいが、最悪このまま一緒に連れて行けば良いだろうと思  
い、司令官からの伝令を伝える。

「今日は出撃、遠征は無し、だそうです…………それから、全員工廠へ向かうよ  
うに、と」

その言葉…………後半の言葉に、四人がゾンビの呻き声のようなものを上げるが、何  
を言っているのか不明だ。

代わりに鈴谷が首を傾げる。

「工廠に？ 何しにいくの？」

「えっと…………分からぬ、ですけど」

そう返すと、特に気にした様子も無く。

「そ…………ま、じゃあ、行つてみよつか」

そう言つて笑い、両手で四人の襟元を掴み、そのままざるずると引きずつていく。重巡のパワーって凄い、と素直にそう思った。

「あつっ?!」

工廠の鉄製の扉の取っ手を握った瞬間、鈴谷が思わず飛び跳ねる。勢いで掴んでいた卯月（他三人は道中で復活した）を離してしまい、卯月が地面に顔をぶつけ、呻き声を上げる。

「…………は、鼻が…………痛いびよ…………ん…………」

「大丈夫？ 卯月」

大丈夫、と言う卯月の返事に僅かに嘆息する。顔に少し砂が付いていたのでポケットからハンカチを取り出し、顔を拭つてやる。

「うー…………ありがとびよん、弥生」

服についた砂を払いながら卯月が立ち上がる。どうやら完全に頭は冴えたらしい。怪我の功名…………と言うのだろうか？

その間にも鈴谷と瑞鳳とイムヤと夕張の四人は工廠の扉を指で突きながらその熱に顔を引きつらせていた。

「ここだけ鉄製だから、温度がハンパじゃないわね」

仕方ない、とイムヤが私服の裾を取つ手に充て、その上から取つ手を握る。ぐつ、と力を込め、扉の片側が開く。

「うわ、あつっ!? キモつ、マジあり得ないんですけど」

思わず毒づく鈴谷だったが、基本的に全員同じ感想だったので、反論は無かつた。これ以上暑いのはごめんだ、と誰も中に入りたがらないので、仕方ないと一步踏み出す。

と、その時。

「あ、いらっしゃい」

足元に妖精が現れ、驚いて一步後退する。

ヘルメットを被つた工廠で建造を専門にやつてている妖精だ。自身たちも建造された時に会つているのでよく覚えている。

「頼まれたものはもう出来てるよ、好きなの持つていつてくれていいよー」

そして、次いで告げた妖精の言葉に首を傾げる。

「頼まれた……もの……って?」

「あれ? 提督さんに言われて来たんじゃないの?」

「工廠に……行け、としか、言わされて、ないから」

そんな自身の返答に、妖精が笑う。

「なーるほど、なら自分の目が見たほうがいいわね、全員こっちに来て来て」  
自身たち六人をくい、くい、と手招きしながら妖精が工廠の中へと入っていく。  
ふと他の五人と顔を見合させるが、何かあるのは確かなようなので、暑さを堪えながら中へと入つていく。

そうして、案内された場所にあつたものを見て.....。

「あ…………そういう…………こと……」

ようやく司令官が何をしたいのか理解した。

\* \* \*

「暑いな…………あいつらそろそろ工廠に行つたか？」

団扇で生温い風を仰ぎながら呟く。

と、その時、執務室の扉をトントントン、ノックする音。

「このノック音は…………鈴谷か？ 入れ」

そう言うと、扉を開き、そこには.....。

「全員お揃いか、ていうかなんでもう着てるんだよ」

水着一式を着たうちの鎮守府の艦娘たち六人がいた。

「…………で、マジでなんでここに来るんだ？ 風呂場に水張らせてるだろ？」

冷房も扇風機も使えない代わりに、夕方、日が落ちるまで大浴場をプール代わりに使う。まあそれが自身の考えた案だつた。先ほど工廠に行つて、妖精たちに艦娘たちの水着を適当に作つておいて欲しいと頼んだのだが、どうやら本気でもう終わつてしまつたらしい。まだ三十分も経つていらないはずなのだが、恐ろしきは妖精の力と言うことか。「提督に水着見せてあげよーと思つて」

ニヒヒと笑い重巡の力でここまで引きずつてきたらしい五人を執務室の中に押し込み、自身も部屋へと入るとバタン、と扉を閉める。

「どーよ提督、可愛い子いっぱいだよー？」

悪戯っぽく笑い、見せ付けるようにポーズまで決める。

鈴谷は意外と言えば意外だったが、ツーピースの普通の茶色の水着だつた。

「なんか割りとまともな水着だな、もつとはつちやけたの着るかと思つてたのに」

「これけつこう気に入つたんだよねー、だから今日はこれ」

そうか、と呟きつつ視線を反らすと夕張がいた。

夕張は普通の青のビキニタイプだ。意外性は無いが、良く似合つている。

「おう、なかなか似合つてるじゃないか、夕張。良いと思うぞ」

「ありがとうございます、提督」

少しだけ頬を染め、首を傾けて笑う夕張。と、その隣に何故かぶすーとした顔の卯月。その卯月は何故か着ぐるみを着ていた……水着？ 水着なのだろうか？

「…………なんだそれ？」

「うーちゃん、ひじょーに不本意だぴょん」

にひつ、と後ろで笑う鈴谷の笑みを見る限り、どうやら無理矢理着せられたらしい。その卯月の隣で自身の視線に気づき、少し恥ずかしそうにしながら髪を結いなおしている瑞鳳がいた。

瑞鳳は上は普通の水着だが下がスカートのようになっていた、キュロパンと言いうらしい。初めて知った。

「瑞鳳のそう言う格好はちょっと新鮮だな、いつももんぺみたいな着てるからな」

「そ、そうですかあ？ ………………：そう言われると私服もスカートってあんまりないような」

何か琴線に触れたのかぶつぶつと一人つぶやく瑞鳳の隣、暑そうに顔の辺りを手で仰ぐイムヤの姿が。

イムヤはいつものスクール水着とは違う、赤いパレオ。少しだけ予想外なチョイスに多少驚きを感じる。

「いつものやつじやないんだな…………少し驚いた」

「あれは出撃用だから、オフで着る時まで同じ水着は着ないわよ」

若干呆れたように呟くイムヤ。私服で見かけるたびに思うが、こいつが一番お洒落に気を使っている気がする。

と、イムヤの影に隠れている弥生の姿を見つける。イムヤも気づいたのか、観念しない、と言いつつその背をぐいぐいと押す。

恥ずかしそうに、いつも無表情なその顔を赤く染め、俯くその姿は普段とのギャップが大きく、中々に愛らしい。

弥生の水着は薄紫のフリルのついたセパレート。なんと言うかイメージに違わない感じがあつて可愛らしい。

「ふむ…………可愛いじゃないか、俯いてちゃ勿体無い」

「…………えつと…………その…………ありがとうございます」

蚊の鳴くような、今にも消え入りそうな声でそう呟き、さつとイムヤの影に隠れる。

「まあとにかく、風呂場に水張つてあるから、適当に涼んで来い。昼は間宮さんに間宮アイスも一緒に用意してもらつているからな」

その言葉に全員が動きを止め、ぱつと顔を上げてこちらを見る。

「最近ちよつと出撃が多くつたからな、偶の息抜きだと思つて疲労を抜いて明日からま

た励んでもらいたい、以上だ」

手を縦に振り、早く行けと催促する。

全員が苦笑しつつ一つ頷き。

「「「「「了解」」」」」

そう告げ、部屋から出て行つた。

ちやぽん、と浴槽に張られた水へとそつと足を差し入れる。

「…………冷たい」

ひんやりとした水の温度。体中に溜まつた熱が一気に抜けていくような感覚。ゆつくりと、少しずつ水へと体を漬けていこうとして…………。

「おっさきつだぴょーん！」

隣で卯月が浴槽へと飛び込み、大きな水飛沫が上がる。

跳ねた水を被り、全身で感じるその冷たさに思わず体が震える。

「…………卯月？」

少々恨みがましく思いながら卯月を見遣ると、卯月がびくりと震える。

「や、弥生？ ご、ごめんだぴょん、だから怒らないで欲しいぴょん」

ぶるり、と震える卯月がそう言うが、別に怒ってはいない…………怒ってはいない。

「別に……怒つてないよ?」

「絶対に怒つてるぴょん! ごめんなさい!」

水中を走りながら逃げ出す卯月。そのせいでもた水飛沫が上がるが、咄嗟に顔を腕で覆い隠し、幾分かは防ぐ。

「……………別に、怒つてないのに」

少しだけ拗ねたような声音になつてしまつたが、仕方ないとと思う。

浴槽の段差に座り、腰半分ほどまで水に漬かる。

ふと自身の着ている水着を見る。

薄紫色…………自身と同じ色の水着。

弥生が選んだものではない、弥生自身は特にこだわりは無いので何でも良かつたのだが、卯月が絶対にこれ、と言つて選んだのがこれだつたと言うだけだつたのだが

……………。

「……………可愛い」

そう司令官に言われた時から、どうにもむずがゆい感覚が胸の中に残る。

なんだか頬が熱くなつてくるので、全身水に漬かる。

ひんやりとした水の冷たさが心地よい。

けれど…………どうにもこの頬の熱は取れそうに無かつた。

## 十三話 新人提督が演習とかしたりする話

『そうか……製油所地帯沿岸海域を突破したか』

「ええ、卯月と言う貴重な戦力をいただいたこと、本当に感謝しますよ」

『なに、アレが自分から言い出したことだ。私に礼を言うことではないさ』

『謙遜、と言うわけではないのだろう。恐らく上官殿は本気でそう思っている。

「重巡洋艦も加わり、ようやく艦隊としての体裁が整つたと言つたところですね』

『次はいよいよ南西諸島防衛線か……分かつてていると思うが』

「ここは新人提督の登竜門の一つ、分かつています」

南西諸島防衛線、それは製油所地帯沿岸と並ぶ、新人提督をふるいにかける海域だ。

新人提督の約二割が製油所地帯沿岸で、そして残つた八割のさらに半数以上が次の海域、南西諸島防衛線にて脱落すると言われている。

「分かつていますよ…………空母、ですよね」

製油所地帯沿岸が初めて敵に戦艦の出現し始める海域ならば。

西南諸島防衛線は初めて敵に空母が混じる海域と言える。

なまじそれまで水雷戦隊で押し続けることができていただけに、空母の出現により、途端に敗北を重ね、最悪大切な艦を撃沈され、心を折る提督は後を絶えない。

自身も知識としては知っているが、自身の艦隊は実際に空母と対峙した経験が無い。その経験の無さがどこまでマイナス要素となるか、経験の無さをどこまでカバーできるか。それにかかっていると言つても良い。

『艦戦の用意は出来ているのかい?』

「任務にあつた開発で艦載機レシピを三度ほど回したら零式艦戦が出たのでそれを使おうかと」

と言つても、未改造の瑞鳳に載せれる数程度で制空権を確保できるとは思つていな  
い。

あくまで敵空母からの被害を減らすためだけのもの、と割り切つたほうがいいだろ  
う。

本当に制空権を確保したいのなら、正規空母を使うことを考える必要があるが、今の自身の鎮守府でそれは難しい。出来ない目標を立てても仕方ないので、出来る範囲で出  
ることをするしかない。

『あとは艦戦の開発途中に出来た単装機銃があるので、それらを駆逐艦に載せようかと』

に行くなら10cm連装高角砲の用意くらいはしたほうが良い』

10cm連装高角砲…………確かにいくつかの駆逐艦を改造した時に所持している装備だつたか。開発でも作れたはずの、並の機銃より遥かに高い対空能力を持つ主砲だ。

「まあそれは追々、と言うことで」

『そうだな、まあ今すぐ必要になる、と言うわけでも無い。少なくとも西南諸島防衛線を突破できれば、もう一人前の提督として認められる、そうなれば出撃時期がよほど空かない限り、大本営に急かされることも無くなる。ゆつくりやればいいさ』

「そうですね…………次の一戦が勝負所なのは理解しています。なので、上官殿にお願いがあるのですが』

そう言うと、電話越しに上官殿がほう、と意外そうに呟いた。

『ほう…………キミが私にお願い、とは珍しい』

まあ確かに、無いわけではないが、自分はあまりこの上官殿に頼み事をしたことが無い。いや、そもそも上官にそう気軽に頼み事なんて出来るはずも無いが、それでも回数は非常に少ない。

『まあ上官殿が何かと気を利かしてくれる方でしたからね…………そもそも頼み事をするほど困った状況になること 자체が少なかつたですし』

『ふふ…………キミにそう持ち上げられると何ともくすぐつたい氣分になるな。まあい

い、それで？ 頼み事とはなんだい？ 他ならぬキミの頼みだ、出来る限り協力しよう  
じやないか』

「まあそう難しいことではないです、お願ひと言うのは――

\* \* \*

「今日の出撃は中止だ」

朝、部屋へと来た弥生が今日の予定を尋ね、その答えがそれだった。

「中止、ですか？ えつと…………どうして、でしょう？」

「ああ、昨日上官殿にお願いしてな、演習を組んでもらうこととした」

「…………演習？」

弥生が首を傾げ呟く一言に一つ頷く。そして机の上に開いた一冊のファイルを取り出す。

ファイルの中身は次の戦闘区域である西南諸島防衛線の詳細だ。海域の地図、潮流、敵の分布や配置、艦種などのデータがある。

そして、差し出されたファイルを眺めていた弥生の顔がふいに強張る。

「…………空母」

「ああ、気づいたか。次の海域からは敵の編成に空母が混じる。うちにも一応瑞鳳と言う空母がいるが、まだ練度も低い上に艦載機もほぼ初期装備のままだ。このまま戦えば苦戦は必至だろう…………だから演習で空母との戦いを覚えてもらう」

陣形、と言うものがある。簡単に言えば、艦隊の並び方だ。

陣形は全部で五つあり、それぞれ単縦陣、複縦陣、輪形陣、梯形陣、単横陣と別れている。

それぞれの陣形には特徴があり、単縦陣は艦隊を一直線縦に並べた最も基本的な陣形だ。

前方一直線に向けての集中砲火なので、砲撃の密度が高く、砲雷撃戦での火力を最高めてくれる他、艦隊運動もしやすく、砲雷撃戦に適している。

輪形陣は旗艦を中心とし、その周囲を僚艦が囲むような陣形であり、艦隊が密集した性質上、最も対空に適した陣形と言える。

反面その並びの仕様上、艦隊運動し辛く、砲雷撃戦などには向かない陣形でもある。

複縦陣は単縦陣と輪形陣のメリットをあわせたような陣形で、縦に二列で並ぶ陣形である。

砲雷撃戦の火力と命中、そして対空能力の両方を兼ね備えるが、単縦陣ほど砲雷撃戦には向かず、輪形陣などの対空は無いと言うどつちつかずとも言える、が使い勝手は良

い陣形だ。

単横陣は、砲雷撃戦にも向かず、対空能力も無いに等しいが、対潜水艦に特化した陣形だ。

通常、潜水艦と言うのは対潜装備と言う対潜水艦専用の装備が無いとダメージを与えるのは非常に難しいのだが、この陣形を使えば一撃で倒すのは難しいまでも雷撃能力を奪う程度までのダメージを期待できる、と言う程度には対潜能力が高い。

最後に梯形陣だが、基本的には観艦式などの艦隊を魅せるための陣形であり、実戦には向かない陣形である。

と言うか、現状で、この陣形を使つた戦法が開発されておらず、あまり使う提督もないため、現状ではほぼ廃れている。

「現状うちの艦隊は単縦陣しか使つてこなかつたからな……そろそろ他の陣形での動きを覚えてもいいだろう」

使つてこなかつた、と言うより他を使う必要が無かつた、と言つたほうが正しい。

つまるところ、第一艦隊は単縦陣しか使つたことがない以上、言つたからと言つて実戦で突然新しい陣形で行動できるか、と言わると首を傾げるしかない。

「だから演習で空母相手の戦い方と陣形を使つての動きを訓練する」

自身の言葉にようやく納得がいったのか、弥生がなるほど、と頷く。

「それにもしても…………昨日の今日、つて、随分…………急、ですね…………」

「あー」

実を言うと、自分的にはもつと後、さすがに一ヶ月は無いだろうが、一週間か二週間は待たされることを覚悟でお願いしたのだが…………。

『何？ 演習？ よし、いいぞ、明日やるか、そつちの準備はもう出来てるよな？ なら明日そちらに行くから待つてろ』

と一方的に告げられ電話が切られたのだ。どうにもある上官殿は頼られるのが好きなのか頼み事をして断られた試しが無い。まあその頼み事自体数えるほどしかしたことがないのだが。

「まあ、向こうもちよど良かつたらしいぞ」

これは本当のこと。向こうも向こうでどこかと演習でもしようかと思つていたらしく、こちらの申し出は渡りに船だつたらしい。

「つうわけでだ、今日の午後から演習を行うので、弥生は他のやつに連絡してヒトヨンマルマルには出撃準備整えておいてくれ、そのため午前中は空けておく」

「了解、です」

こくん、と弥生が頷き部屋を出て行く。さて、それでは自身も午後の演習のための準備ですか、そう考え、まずは上官殿と最後の打ち合わせでもするため机の上の電話

を取つた。

\* \* \*

演習、と言うのは、実弾を使わない艦隊同士の戦闘を指す。

実弾を使わないので撃沈の心配も無い。燃料と弾薬は消費するが、実際にダメージを受けるわけでもないのでドッグに入る必要も無い。とまあ基本的にメリットの多い訓練だ。

ただ基本的に相手が必要となるので、他の鎮守府との都合が付かなければ出来ないと言う欠点もある。

上官殿のところほどの数の艦隊がいれば、一つの鎮守府内で組を分けて演習を行うこともできるが、今の自身には到底難しい話だ。

最初にも言つたが、実弾を使わないので、ダメージの判定はかなり曖昧になる。

基本的には撃沈判定を出された艦は戦線離脱、それ以外は続行、と言う非常にシンプルな戦いになる。

昔はマーカーなどを使って、判定を行つていたが、一張羅の制服をマーカーで汚された艦娘からの反発が酷かつたらしくて現在はこんな形になつてゐる。

撃沈判定は各艦娘に付いていたる妖精が勝手に行つてくれるのと提督の自身は岸で見  
ているだけで良い。

自身から見て左側に居並ぶのは、弥生、イムヤ、瑞鳳、卯月、鈴谷の五名。  
そして右側に並ぶのはたつたの一人。

「本当に良いんですか？」一人で

そう尋ねると彼女はええ、と頷く。

「こちらとしては、彼女の性能確認、と言つたところなので、むしろ他の艦がいては分か  
りにくくなります」

「まあこちらも低レベル艦ばかり、改造艦などこちらから来た卯月一人なので余り言え  
ませんけどね」

「問題はありません、彼女の装備もそちらに合わせてありますから、これはこちらの提督  
からの配慮です」

そう聞き、少し安堵する。さすがに装備のランクが違い過ぎて勝負にならない、と言  
うのは困るからだ。

「艦戦、艦爆、艦攻の一番レベルの低いのを一つずつ、それから最近開発されたばかりの  
二式艦上偵察機を一つ、まああまり一方的になつても訓練になりませんから」

それは裏返せば、普通にやれば一方的になつてしまふ、と言うことだろう。

まあ言い返せはしない。何せ、たつた一人とは言え演習相手が悪すぎる。

「飛龍改二…………確か上官殿の第一艦隊の所属だったと記憶していますが？」

練度も確かに九十を超えていたはずだ。そんな彼女が良くこうして来てくれたことだ、と最初に出会った時は思わず硬直してしまった。

そして何より。

「あなたが来るとは本当に意外でしたよ、不知火」

第一艦隊旗艦にして、上官殿の秘書官、不知火改。駆逐艦ながらにして、昼戦で敵戦艦を容赦なく叩き潰すあの鎮守府でも最強の一人だ。

「提督は今、少々忙しいので、不知火が代わりに着ました、何か問題でも？」

ふるふると首を振る。まあこちらとしては別に問題無い。稀に、ではあるが提督の代わりに秘書官が来る、と言つた例も無くは無いし。

と、そうこう言つてゐる互いに所定の位置に付いたらしい。

「ではそろそろ？」

「ええ、始めましょう？」

そうして、この鎮守府初めての演習が始まつた。

\* \* \*

見上げれば、空を覆う艦載機の群れ。相手がの放つた艦載機であるとすぐに分かる。

「迎撃！」

弥生がそう言い放ち、事前に装備していた機銃を突き出し撃つ。

卯月もそれに習うようにして、同じく機銃で迎撃する。

その間に瑞鳳が次々と艦載機を発艦させ、空へと艦載機が飛んでいく。

瑞鳳の装備している艦載機は艦爆一つと艦戦二つ。

だがそれでも。

「嘘つ！ 落とされた！」

数が違う過ぎる。装備数の上では瑞鳳のほうが上で、実際の艦載機の数は向こうのほうが遥かに多い。

艦載機と言うのは全て追加装備に分類される。艦載機の無い空母はただの置物と言つても過言ではない。

そして空母に限らず、偵察機を含めた艦載機を載せるこの出来る艦には全て艦載機数と言うのが装備順ごとに割り振られている。

例えば瑞鳳は未改造の現状では、三つ分の搭載予備領域ロットがあるが、艦載機は1スロット十八機、2スロット九機、3スロット三機と割り振られている。

そして1, 3スロットに艦戦、2スロットに艦爆を積んでる現状、艦戦の数は合計二十一機、艦爆の数は九機となり、艦載機合計数三十機となる。正直、軽空母と言うことを除いても、かなり少ないと言えるが、未改造艦故に仕方がない。改造すればスロット数の四つに増えるので、さらに艦載機も載せれるだろう。

そして問題の相手、飛龍は正規空母、同じ正規空母でも加賀ほどでは無いにしろ、それでもその艦載機数は圧倒的だ。

飛龍改二の艦載機数は1スロット十八機、2スロット三十六機、3スロット二十二機、4スロット三機の合計七十九機、瑞鳳の倍以上の数である上、1スロットに艦爆、2スロットに艦戦、3スロットに艦攻と装備している。

ここで問題になるのが各艦載機の種類だろう。

艦攻とは艦上攻撃機、魚雷を積んだ艦載機である。

一撃の威力が非常に高いが、当てるために水面ギリギリを飛ぶ性質上、非常に打ち落とされやすい。

艦爆とは艦上爆撃機、爆弾を積んだ艦載機だ

遙か上空から急降下しながら爆弾を落とすため非常に命中が大難把で、威力 자체は直撃でもしなければそれほど高くない。だが基本的に上空を飛ぶため、機銃などで撃ち落されにくい性質を持つ。

そして艦戦とは艦上戦闘機、即ち艦載機を撃ち落すための艦載機である。

航空戦において最も重要な分類に位置する艦載機であり、艦戦の数と能力の如何によつて制空権が左右されると言つても決して過言では無い。

先ほどの話に戻すが、瑞鳳の放つた艦戦は二十一機、逆に飛龍の放つた艦戦は三十六機。

つまり1・5倍以上の数に差があるのだ。制空権は奪われたに等しい。

そして制空権の無い空を飛ぶ艦載機などただの的である。

次々と落とされていくこちら側の艦載機に瑞鳳が目を見開く。

そしてどんどんと数を増していく敵の艦載機を捌ききれず、段々と被弾を増やしていく艦隊。

戦局の優勢はどうやらか、明らかであつた。

\* \* \*

「ふむ…………やつぱりこうなつたか」

「数が違ひ過ぎるのもありますが、何よりも航空戦に不慣れですね」  
やはり見ただけで分かるのか不知火の言葉に、目を瞑る。

「どうしますか？ 少し手伝いますか？」

「…………そこまでしてもらつていいものか悩むな」

「今更遠慮するような仲でもないでしょうに、少しくらい不知火にも頼りなさい」  
数秒思考する。ジイと見つめる不知火の視線に、やがて折れる。

「じゃあ…………頼んだ、不知火」

「ふふ…………任せなさい」

\* \* \*

「ハア…………ハア…………ハア…………」

荒い息を吐く。都合三度もの演習。五対一と言う状況で、それでも一方的に追い込まれている現状に歯を食い縛る。

どうすれば、そんな疑問がぐるぐると頭の中を駆け巡る。

見やれば仲間たちも同じような状況だ。無事なのは、正規空母からの攻撃を全く受けないイムヤくらいだ。辛うじて練度も高く場慣れしている卯月は呼吸を整えていたが、それでもうつすら額に汗が滲んでいる。  
どうすれば勝てる？ ぐるぐると同じ疑問だけが頭の中を巡る。

答えが出ない、明らかな経験不足。旗艦として何も指示が出せない、どうしていいのかが分からぬ。

思考が迷走し、焦りすら感じてきた、その時。

#### 【全艦注目】

凛、と張り詰めた声に自然と顔をそちらへと向かつた。

そこに艦装を付け、先ほどまで司令官の隣にいた艦娘が立っていた。  
名を、確か…………。

「不知火です」

そう、不知火だ。陽炎型二番艦。つまり弥生と同じ駆逐艦。

その彼女が、一体何故ここに？

そんな疑問を浮かべた直後。

「突然ですが次の一戦、不知火が貴方たちの指揮を執ります」

そんなことを言つた。

## 十四話 新人提督が演習を見届けたりする話

「突然ですが次の一戦、不知火が貴方たちの指揮を執ります」

そんな彼女の突然の一言に、全員の思考が一瞬止まつた。

疲労で鈍る思考、けれどそんな一言を逃せるはずも無い。

「…………どう、して？」

そんな自身の問いに、彼女…………不知火は不思議そうに首を傾げ、問い合わせてくる。  
「今あなたたちがあと何度繰り返せば、勝負になるのですか？」

「…………っ！」

言い返せもしないその一言に、思わず怯む。

と、そんな自身の後ろで、卯月が声を荒げる。

「だからって、不知火は他の鎮守府の艦娘だぴょん」

至極全うな言い分、だからこそ説得力もある。

けれど。

「そちらの司令官に頼まれたのよ、何も問題はありません」

そんな一言に、思わず目を見開き、咄嗟に自身の司令官のほうを見る。

腕を組み、こちらのほうを見つめたままの司令官の表情は遠く、分からぬ。

「嘘だびよん…………司令官が…………どうして」

卯月が信じられない、と言つた様子で思わず零した言葉に、不知火が目を細める。

「どうして？ どうしてと言いましたか？ どうしてかだなんて、あなただつて分かつているはずでしよう？」卯月

そんな不知火の鋭い眼光に、気圧された卯月が言葉を詰まらせる。

「何度も言つたでしょ？ あなたは甘い、優しさと甘さは違うわ、あなたの甘さはいつか仲間を巻き込んで、取り返しの付かない不幸を招く危険性がある」

「そんなこと…………」

「このままでは駄目なことが分かつて相手を気遣つて何も言わないのはただの甘さよ、本当に優しいのなら、告げて正してあげるべきだわ」

卯月へと厳しい言葉を投げかける、と共にその視線がこちらを向き、自身の視線をぶつかり合う。

「弥生、かつての先達たるあなたにこういうことを言うのは少しばかり恐縮ではあるけれど」

「くい、と手袋をきつくはめ、不知火が口元を吊り上げる。

「教えてあげましょ、旗艦の役割と言うものを」

そう告げた。

\* \* \*

「陣形は複縦陣に、対空砲は全て前だけ向けなさい」

いよいよ開戦の砲が鳴る。と、同時に飛ぶ命令にすぐさま動く。

どうやら不知火は直接的には手は出さないらしい、あくまで指示に従う様子だった。

色々と言いたいことはある、聞きたいこともある、それでも少なくとも弥生は、司令官が頼んだのなら、何か意味があるのだろうと思つてゐる……他所の艦娘を頼つていることに多少、寂しさも感じるが。

「瑞鳳は艦戦を無視、艦爆を一機でも多く減らしなさい」

「…………了解」

まだ少しばかり訝しげではあるが、瑞鳳が艦載機を打ち上げていく。  
ついでイムヤに潜行するように言うと、イムヤが海中へと潜つていく。  
「卯月、分かつてるわね？」

「……………分かつてるびよん」

ちらり、と視線を卯月にやり、そう尋ねると、卯月がそれを構える。

「電探による索敵開始、位置把握…………一齊掃射だびよん」

25mm三連装機銃、25mm連装機銃、13号対空電探。どれも卯月が改造した時に持つてゐるもので、いつもは外して主砲を持つてゐるが、先ほど不知火に言われて入れ替えたらしい。

と、卯月が放つた機銃の掃射に撃たれ、真正面からこちらを狙つて低空飛行をしていた敵の艦攻が次々と落ちていく。

「艦攻は常に低空飛行をしてくるわ、機銃で狙えば簡単に打ち落とせる、覚えておきなさい」

不知火がそう呟きつつ、次の指示を出す。

「鈴谷、主砲の砲撃準備」

「この制空権じや偵察機は飛ばせないよ?」

「問題無いわ」

何の問題も無いと、実に堂々とした態度で指示する不知火に、鈴谷がそう、と納得したように頷き、砲を構える。

と、その時、上空から急降下してくる敵の艦爆隊。瑞鳳の艦戦によつて大幅に数が減つてゐるが、それでもまだ少數ながら残つてゐる。

「駆逐艦の役割とは、何だと思うかしら？」

上空を見つめ、砲を構えた自身の背後で、不知火がそんなことを言つた。

「本来駆逐艦とは、敵の水雷艇を駆逐するための艦。けれどその小回りの良さと数、燃費を買われて戦艦の護衛に付くこともある、つまり本来の駆逐艦が果たすべき役割と、求められた役割は少し違つてゐる」

どん、と背中に感じる強い衝撃。

「時代は変わつたわ、それでも私たちのやることは変わりは無い、つまり」

「つんのめり、数歩、たたらを踏み、足を止める」と同時。

「主力を守り抜くこと、例えその身を挺してでも主力を無傷で守り通すこと、それだけよ」

自身の眼前で、艦爆から投下された爆撃が炸裂した。

\* \* \*

「あらまあ…………不知火も容赦ないわね」

呴く飛龍だが、先ほどと違つてその表情に余裕は無い。

すでに艦攻は全て卯月によつて打ち落とされた、艦爆も半数以上が瑞鳳の艦戦に打ち

落とされ、その艦戦もこちらの艦戦で打ち落とし制空権は確保したが、艦戦では艦を攻撃することはできない。

実質、こちらの攻撃手段は残り少ない艦爆のみとなつていて、本当に容赦ない。敵にも、味方にも。

先ほど旗艦の弥生の背を蹴り飛ばして爆撃の被害を集中させていた。正直、睦月型駆逐艦は他の駆逐艦より性能と言う面ではやや劣るので、飛龍もそこまでの脅威として認識していない。

どちらかと言えば、重巡洋艦の鈴谷のほうが明確な脅威だろう、何せ彼女は自身の装甲を抜いてくる可能性があるのだ。

そのために最高のタイミングを見計らつての爆撃だつた…………のだが。

「ホント…………予知でもしてゐみたいにあつさり防ぐわね」

爆撃にさらされた弥生が大破するが…………それだけだ。

他に誰一人巻き込むことなく、本命であつた鈴谷に僅かのダメージを与えることも出来ずに終わつた。

そして直後、鈴谷からお返しとばかりに放たれた砲撃。

当たりはしなかつたが、強烈な一撃が危険なものであると認識させらるには十分だつた。

「頭が付くだけでこれ……か……。 私もまだまだつてことね」

単純に、指揮を取っている不知火が規格外なだけかとも思うが、けれど実際には一切の手出しはしていない以上、練度の差が絶対的なほどにあるはずの自身が不甲斐ないだけだろう。

実力不足を相手のせいに転嫁するようなことは、戦場では出来ないのでから。

「……………そうね、本当は出すつもりは無かつたのだけれど」

追い詰められたなら試してみろ、と提督が言つていたが、まさか本当に使うことになるとは…………。

第四スロットに格納された、たつた三機だけの機体ではある。

だがこれは、提督が不知火にすら秘密で載せた新兵器。

「試し撃ち…………ね。ここまで予想していたのなら、本当に大したものね」

弓を引き絞る。

番えられた矢がギリギリと弦を張り詰めさせ。

「友永隊、頼んだわよ」

撃ちだされた。

\* \* \*

「……………おや？」

不意に不知火が目を細める。

その視線の先で、新しく艦載機が発艦していくのが確認できた。

その数は…………三機。正面から来ている、と言うことは艦攻隊だろうか。

「……………ふむ」

再度不知火が言葉を漏らし。

「弥生、下がりなさい。卯月前に」

大破した弥生を下がらせる。先ほどその背を蹴つたことについては、全員色々言いたそうではあつたが、演習の最中であるが故に、言葉を噤んでいた。

「対空迎撃用意。相手は三機です……落としなさい」

「……………了解だびよん」

卯月がいつに無くマジメな表情で不知火を見ているが、けれどだからこそすぐに不知火の表情の変化に気づいた。

「不知火……………？」

呟く名前に、不知火が一瞥し首を振る。

「前だけ見てなさい、敵機が来るわよ」

その言葉に、鎌首をまたげた疑問を振り払い、正面からやつてくる三機の艦載機へと対空機銃を向ける。

「正射だぴょん！」

対空電探による照準良し、機銃二種による掃射。この弾幕ならば、たつた三機の敵機などすぐさま落とせる。

そう、思っていた。

「つ!? 回避されたぴょん！」

こちらの弾幕をけれど急激な方向転換により回避、そして猛スピードでこちらの艦隊へと接近し、魚雷が発射される。

「瑞鳳、避けなさい」

不知火の声が届く、だが一瞬遅い。

「きやあああああああ」

魚雷が瑞鳳を的確に爆発に巻き込み、中破させる。

「…………天山一二型、しかも友永隊仕様ですか。提督、いつの間にあんなものを作った？」

…………

たつた一度の交差で、不知火が即座に自身の知識と今しがた過ぎ去つていった敵機の照合を行う。

攻撃、そして再び戻つてくる敵機。二度目の攻撃、もうこちらの艦隊の無事な艦は瑞鳳と卯月と…………。

「まあ、問題ありません、これで終わりですか」

瞬間、轟音を立て、派手に水飛沫を上げながら飛龍の足元が突如爆発した。

「やつた！ 海のスナイパー、イムヤにお任せ！ 正規空母だつて仕留めちやうから」

\* \* \*

「三戦全勝…………なるほど、中々の成果と言えるな」

不知火に指揮を取つてもらい、さらに三戦演習を行つたが、その全てで判定勝利、最後の一戦では飛龍を撃沈判定に追い込むと言う結果までもぎとつっていた。

夜、鎮守府内の自室で昼間の演習を撮影しておいたので、再度目を通しておく。

「…………こうして見ると、卯月の対空能力は目を見張るものがあるな」

機銃掃射による、敵艦載機の大量撃墜。一度の攻撃で敵艦爆隊の半数以上を落としたその対空能力は侮れない。

艦攻隊と違い、上空高くを飛ぶ艦爆隊は比較的撃墜しにくい。そんな艦爆隊を相手にこの成果は見事の一言に尽きる。

「瑞鳳は…………やはり数がネックか」

瑞鳳に積める艦載機の数はそう多くない。

スロットごとの艦載機の割り振り、これが今後重要なことにならう。制空権を捨てて、攻撃に走るのか、それとも攻撃を捨てて制空権確保に走るのか。弾着観測射撃と言うものがある。

戦艦、重巡洋艦、一部の軽巡洋艦などが行う、偵察機を使つた正確無比な砲撃だ。自身の艦隊で言うならば、鈴谷だけが使用できる。

命中率の高さ、そして砲撃を直撃させることによる威力高さを考えると、これが出来ればより一層火力の強化が期待できるのだが、そのためには偵察機を飛ばしておける状況…………最低でも制空権争いで優勢以上に立つていなければ不可能だ。

と、同時に、軽空母と言うのは砲撃戦で強力な火力となりうる。

スロットに積んだ艦載機の数と質がそのまま攻撃力に直結し、下手をすれば並の戦艦すら一撃で撃沈させるほどの火力を出すことができる。

弾着観測射撃は強力だ、だがそれが無くても戦艦、重巡と言うのは強力な火力であることは変わりないし、練度を上げていけばその命中率も高まっていく。

どちらが正解、なんものは無い。どちらも正しく、どちらも絶対ではない。

その選択をしてくるのが、提督と言う人間の役割なのだから。

コンコン

映像の再生を止め、一息ついたとき、ふと、扉がノックされる音を耳にする。

「入れ」

音の主が誰か告げるより先にそう言う。いや、それが誰かなんて分かりきったことだ、何せ自分が呼んだのだから。

「あの…………失礼、します」

扉を開き、弥生が入ってくる。表情はいつも通りの無表情、けれど今日はいつもより硬い印象を受ける。

手招きすると、靴を脱ぎ、部屋に敷き詰められた畳の上を歩いて、すぐ傍までやってきて正座する。

「弥生、着ました」

「ああ…………まあそれは後にして、最初に言っておこう。今日はご苦労だった」

朝から簡易とは言え、六戦も演習をしたのだ、さすがに疲れただろう。そう言つた意味で労うと、弥生がこくりと頷き。

「えつと…………ありがとう…………ざい…………ます」

ペこりと一礼する。

「今日の演習は中々満足の行くものだつたと思う。だから私個人としては弥生たちの褒めたい」  
けれど。

「恐らく弥生たちからすれば、言いたいことがあるだらうからな、だから呼んだんだ」  
思つたままを言つてくれ、そう告げる自身に対し、弥生が数秒沈黙し…………口を開く。

「司令官は…………司令官は、弥生のこと…………信じてくれていますか？」

\* \* \*

「…………勿論、信じてるさ」

そんな司令官の言葉に、さらに言葉を重ねる。

「弥生は、司令官から信じてもらえていたと、そう思つていました。だから、旗艦にして  
もらえてるつて、思つてました」

拙い言葉、自分自身、どう表現したら良いのか分からぬもどかしさ。

そして、悲しみ。

艦隊の指揮を他所の艦娘に取らせる。

そんな有りえないようなことをした、旗艦である彼女に一言も告げずに。

弥生は司令官に信頼されていないのだろうか。

ふとそんな疑問を抱き、悲しくなつた。

「弥生じや…………頼りになりませんか？ 司令官の力に、なれませんか？」

司令官の力になれないこと、それが一番悲しかつた。

無性に泣きたくなつて、辛かつた。

「……………」

そんな自身の言葉に、司令官が目を見開く。

数度、パチパチと目を瞬かせて。

「……………いや、予想外だつたな」

そう呟き、立ち上がりつてこちらへとやつてくる。

そうしてその手が伸ばされて……。

ぱん、と頭の上に乗せられる。

「悪いな、怒られるくらいは覚悟してたんだが…………そんな風に思つてくれてるなんてな」

そうして、数度、撫でられる感覺が心地よい。

「力になれないなんてそんなこと無いさ、信じてないなんてそんなこと無いさ。弥生はいつも俺の力になつてくれてるし、俺は弥生を一番信用してる。だからさ、そう言うことはじやないんだよ、今回の演習は」

そう言いながら、司令官が言葉を続ける。

「今回の演習はな、艦隊全体の対空訓練であると同時に、弥生の特訓でもあつたんだよ」  
「…………え？」

初めて聞いたその真意に、思わず声が漏れる。

「弥生も分かつてるだろ？ が旗艦つてのは特別だ。俺が鎮守府で指示出すつてのも出来なくも無いが、実際にその場にいるわけでも無い以上、どうやつたつて瞬時の判断つてのは旗艦に委ねられる。イムヤが、卯月が、瑞鳳が、鈴谷が無事に戻つてこれるかどうか、それは弥生の判断にかかつてると言つても過言じやない」

けどな、そう呟き、その次の言葉を紡ぐ。

「そんなもの、うう簡単に分かるものじやない、場に慣れていなければうう簡単に判断できることじやない。でも慣れるまでに何度も前たちは危険な目に会う？ その間に誰一人欠けること無く切り抜けられる保証は？」

そんなもの、あるはずが無い。と司令官が言う。

確かにその通りであるとは、自身も思う。

「だから先達である不知火がやつてきた時、絶好のタイミングだと思った。初めての対空戦、不慣れな状況、弥生が旗艦としての成長を促せる絶好の機会だと。正直、不知火が言い出してくれて助かつたよ」

そうして、司令官が自身の頭を撫でる手を止め、なあ、と尋ねてくる。

「弥生…………お前は、今回の演習を経験して、旗艦の役割って何だと思った？」

司令官のその言葉に、しばしの間、考え込む。

司令官は何も言わず、弥生の答えをずっと待っている。

旗艦の役割とは何だろうか。

普通に考えれば、随伴艦を統率すること。そして無事に帰すこと。

けれどそんなことを問うているわけではないだろう。

答えは…………未だでない。

「出ないなら、それでも良い…………けどな」

そう言つて、司令官が自身に笑んで…………。

「いつか、お前の答えを聞かせてくれ、なあ弥生――――――

お前は、どんな旗艦になりたい？

答えは、  
未だ見つからな  
い。

## 十五話 新人提督が弥生に色々見られたりする話

まあ、ある意味珍しい日と言えるかも知れない。

「…………卯月、それ、取つて」

「はーいだぴよん」

卯月が本棚から取り、こちらに差し出した本を受け取ると、隣の本棚へ並べると、すっかり空になつた本棚をハタキがけして埃を落としていく。そうして埃が床へと落ちていくが、新聞紙は引いてあるしじの道後で床を掃くのだから問題ないだろう。

換気のために窓を開けていたらそよいだ風に集めたゴミが舞うなどと言うハプニングもあつたが、それでもなんとか一時間程度で作業が終わる。

「びつかぴかだぴよーん」

満足げに頷く卯月を見ながら僅かに頬を緩める。

弥生とてこうして綺麗になつた部屋を見れば嬉しくも思う。例えそれがほとんど表情に出ていなくとも。

さて、こうして弥生と卯月が朝から自室の掃除に励んでいることから分かるように、今日は出撃などが無い日だつた。

いや、今日も、と言うべきか。

ここ一週間ほど、出撃命令が来ていない、珍しいことに。

「まあ、次は沖ノ島だから、仕方ないぴよん」

そんな卯月の言葉に、こくり、と頷いた。

西南諸島海域最後の指定域、沖ノ島海域。

西南諸島防衛線が新人提督最初の登竜門だとすれば、沖ノ島海域は新人提督二つ目にして最大の関門だろう。

敵の編成の多くにelite艦が入り混じり、敵中枢の中にはflagship級の戦艦までが混在する。 elite艦は深海棲艦の中でも通常の固体よりも強大な力を持つた一部の固体を言う。

非常に不可思議な話ではあるが、深海棲艦の固体ごとの能力と言うのは種類ごとにほぼ似通つたものとなる。

僅かな違いはあるが、その程度は統計上の誤差程度の範囲でしかない。

だが時折、その種類の固体よりも遥かに強力な固体が存在する。

それらを総称して上位艦と呼ぶ。

そしてそれらeliteの中でも飛びぬけた、最早その種の固体とは別固体としか言えないような強大な力を持つた個体が生まれることがある。

それら例外中の例外のような固体は、深海棲艦が個々に作る群れの中でも中心的役割を果たしていることが多く、群れの中で生まれたりーダー的存在ではないかと言われている。

それらを総称し旗艦種fлагштипと呼ぶ。

戦艦ル級。

製油所地帯沿岸で弥生たちの艦隊を苦しめた強敵。

鈴谷と言う砲撃戦の要が加わることで何とか突破したが、あわや直撃しそうになつたあの一撃を弥生はまだ忘れていない。

あの忘れられない演習の三日後に西南諸島防衛線を突破してからはや一月。カムラン半島、バシー島沖、東部オリヨール海と破竹の勢いで進軍してきた自身たちの艦隊。

特に東部オリヨール海では、敵中枢艦隊に戦艦ル級eliteと戦艦ル級の二隻が偏在すると言う状況ではあつたが、司令官の徹底的な夜戦狙いにより五隻と言う数のハンデを負いながら、僅か一度の試行で突破に成功した。

だがこのハイスピードな進軍もここまでだろう。

西南諸島沖防衛線で空からの脅威に果敢に立ち向かい、突破してきた提督たちの約八

割でここで折れると言われる難関中の難関。

その難関を前にして、はや一週間だ。

さすらにそろそろ何かしらの行動を起すべきではないだろうか、とは思う。だが司令官が無計画に過ぎてしているとも思えないので、きっと大丈夫だろうとも思つてている。

一つ不安があるとすれば…………。

「今日もびよん?」

「…………そう」

短く咳き、こくりと頷く。

今日もまた相変わらず執務室の扉は閉められたまま。鍵がかかっているか確かめたわけではないが、恐らくかけられているのだろう。少なくとも、数日前まではかかつていた。

この一週間、司令官はずつと執務室にこもつたまま出てこない。

食事などは取っているようだが、秘書艦の仕事も休みだと言われ、待機命令を出されている以上、自身にはどうしようも無い。

無理をしていないだろうか、根を詰め過ぎていらないだろうか。

ここ最近そんなことをばかり考えている自身がいる。

「いや、弥生も最近ちよつと頑張りすぎだぴょん」

そんな自身の内心を察してか、卯月が半眼で呟く。

「最近毎日遅くまで何かやつてるし、何やつてるか知らないけど、夜更かしは良くない  
ぴょん」

「…………別に、そんなに、遅くまでは…………やつてはないし」

否定はしない。いや、できないが。

嘘ばっかり、と言わんばかりにこちらをジト目で見つめる卯月の視線にバツの悪さを感じ。

「…………ちょっと、司令官の様子……見てくる、から……」

そんな理由をつけて部屋を出る。

後ろで卯月が思わずと言った感じでため息をついたような、そんな姿が見えたような  
気がした。

\* \* \*

全身に感じる暑さと不快感に目を開くと、室内が明るかつた。  
電灯の明かりではない、太陽の…………自然な明かり。

もう朝か、と内心で呟きながら時計を見ればすでに昼前と言ったところか。

く。

「…………あー、カーテン閉め忘れたか」

カーテンを開けられた窓からは、夏日のギラギラとした日差しが差し込んでおり、そのせいでこの部屋だけ室温が大分高くなっているようだ。

「クーラー…………なんて贅沢だよなあ」

深海棲艦の登場により海を閉ざされたこの島国では、現在過去のような繁栄が望めるはずも無く、日々衰退していく文明社会を艦娘と言う兵器の登場によつてギリギリのところで食い止めているのが現状だ。

昔のような贅沢、当然望めるはずも無く、とは言うもののそんな二十年近く前のこと、自身にとつて最早現状が当たり前過ぎて、現状が困窮していると言う感覺すらも薄いのだが。

とは言つても、覚えているのは覚えているのだ、昔を。まだ盛かりし頃の大量消費型文明社会を。

だから今の人間に聞かれても恐らく首を傾げられるような言葉を、時折覚えている。まあそんなことはどうでもいいのだが。

とりあえずカーテンを閉め、直射日光を遮る。これだけでも少しマシになつた気がする。とは言うものの、すでに上がつた室温は下がらないので、同時に窓を開いて網戸にしておく。

それから執務室の片隅に置かれたクローゼットから着替えを取り出すと、とりあえず先にシャワーでも浴びるか、と考える。

だつたらもう先に脱いでしまえばいいか、と不快感残る上着を取り脱ぎ、下着のシャツ一枚になつたところで。

「あ、ちよ、卯月……」

ガチャリ、と執務室が開いて、弥生が飛び込んできた。

「…………え」

「…………は？」

ばつちりと視線と視線がぶつかり、目を目が合う。

そうして――

\* \* \*

執務室の扉はやはり今日も閉じられている。

「…………司令……官……」

声に出して咳き、思い出すのは、すでに一週間以上顔を見ていない自身の上官。正直言えば、想像以上に落ち着かない。これほど長く司令官と出会わないことが無かつたから。

あの日、工廠で生み出されてからずつと、司令官と共に居たからこそ、たつた一週間会わないだけで、ひどく落ち着かない。

今頃どうしているのだろう、元気なのだろうか、見ていないからこそ分からぬ。分からぬからこそ、不安になるし、心配もする。

意味合いはおいておくとしても、弥生にとつて司令官がとても大切な人なのは間違いないのだから。

とくん、と一瞬跳ねる鼓動。

目をぱちくり、とさせる…………少しだけ違和感。けれど氣になるほどでもない。そうしてすぐに忘れ去る、その程度の物…………今はまだ。

「…………あれ…………？ 音…………してゐる…………」

と、その時、ふと気づく。扉の向こうで、何やら人が動く氣配、と同時に何やらがたごとと音がする。

耳を澄ます、よく聞こえはしないが、確かに中で何かやつてゐる音がする。

「…………司令官、起きてる、みたい」

今、この扉を叩いたら声、聞けるかな。

なんて、そんな思考がふと過ぎる。

いや、でも用事も無いのに、そんなことしてどうするのだろう。

そしてそれと同時に冷静な思考も過ぎる。

声が聞きたい、と言う思いと、邪魔をしたくない、と言う思いが心中でせめぎあう。

そうして、出た結論は…………。

「…………邪魔しちゃ、ダメ…………だよね」

理性が勝つた答え、そしてその呴きと同時に。

「弥生？ 司令官どうしてるぴよん？」

卯月がやつてくる。そうして帰ろうとするこちらを見て。

「弥生、もしかして邪魔したら悪いから帰ろうかな、とか思つてないぴよん？」

「えつ…………ど、どうして、それ…………」

内心そのままズバリな内容に、珍しく動搖が声にも現れる。そしてそんな弥生の様子に、卯月がまた呆れたようにため息を吐く。そうしてそのまま執務室の扉の前まで行き、ドアノブを捻る。

ガチャン、と音を立ててドアノブが回る。そのことに、目を瞬く。てつきり鍵がか

かつてはいると思つていたから。

そうして卯月がこちらを振り返り、ニイ、と笑う。

「チャンスだぴょーん」

そうして、空いた片手で弥生の腕を引き……そのまま扉を開けて自身と入れ替わるようにして弥生を押し込める。

「あ、ちよ、卯月……」

たらを踏みながら、そうして弥生が顔を上げると……。

「…………え」

「…………は？」

上半身裸の司令官がそこにいて――。

視線がぶつかる、目と目がばつちりと合つて。

そして――

「あ…………え…………えと…………う…………」

ぱくぱくと、口を開けど、漏れる言葉は単語にすらならない。

頬が熱い、今自身を鏡で見れば紅潮してるだろうと、自覚する。

そしてそんな自身をどこか冷静に見て いる自分がいて……。

「な!? ば、ばつ、バカ」



ち着きを取り戻す。  
「あー…………くそ」

そうしてようやく、深く吐いた息と共に照れが抜けていく。  
「くそったれが…………」

もう一度だけ咳き。

「何考えてんだ俺…………」

後悔染みた感情と共に、その言葉を吐き出した。

\* \* \*

司令官に呼び出された。

端的に言うならそれだけの話。

さつきまでの弥生ならば、恐らく胸の内から嬉しさが湧き出ていただろうけれど。

「…………はあ」「…………はあ」

「いや、その…………」「めんぴょん？」

弥生

今となつてはため息しか出てこない。

それでも呼び出されれば行くしかない、少なくとも会えなかつた昨日までよりはマシ

だと……。

「思い…………たい…………かな」

いつもより間に挟まれる沈黙が幾分多いのは、そういう心情だから仕方ないとしか言えない。

そうして到着した執務室の前。

「…………うん」

大丈夫、と一つ頷き、こんこん、と扉をノックする。

そうしてすぐに入れ、と声が返ってきて。

「…………失礼…………します…………」

扉を開いた。

部屋の中で机を挟んで対峙する。そうしてすでにどれだけの時間が流れただろう。互いに沈黙を貫いている、と言つても弥生のほうは気まずさで話せないだけだが。「…………さて、まず最初に言つておくが」

じろり、と司令官がこちらを見つめる。いつもより厳しいその視線に、思わず身を竦ませる。

少なくとも、これまで一度たりとも司令官にそんな視線向けられたことは無かつたから。

「用があるならノックして入つて来い、いきなり部屋を開けて入つてくるな」

「はい…………すみません……司令官……」

経緯はともかく、結果としては弥生が全面的に悪い以上、そうして頭を下げて謝るしかない。

怒っているのかな、そんな風に一瞬考え、当然か、とも思う。

そうして下された頭を少しだけ上げ、司令官を見やると。

「…………と、まあそんなことお前でも分かつてているだろ。次は気をつけろ」

少しだけ疲れた表情でため息を吐いていた。そうしてこちらを見て……。

「ああ、もういいから、頭上げろ」

そう言つてくる。

「えっと、けど…………司令官…………」

「お前がそんなことしないつて、分かつてるよ、くそ…………どうせ卯月の悪ふざけだろ、同じ部屋なら後で注意しとけ」

弥生の言葉に、そう言つて返してくる司令官に一瞬呆然として、それから――――――

「…………はい」

そう言つて、微笑んだ。

## 十六話 新人提督と弥生が謝つたり許したりする話

「ああ、ところで、これを見てくれ」

机の中から数枚の用紙をホツチキスでまとめたファイルを取り出すとそれを弥生に渡す。

渡されたそれをパラパラと捲りながら、目を通していく弥生。

だが、一枚、また一枚と捲るにつれて、その目が細められていく。

「司令官……………これ……………」

ファイルの内容は各海域でのここ一月での深海棲艦の分布だ。

実を言えばこれは、俺が作成したものでは無い。

上官殿のところの不知火が作成したものである。

上官殿が大本営から連絡を受け、そうして第二艦隊を使って調査したその内容を総合すると。

「深海棲艦が移動している。少しづつ、少しづつな」

一日あたりの移動数があまりにも微弱で、一つ一つの海域で見れば誤差のようにも見

えるが……。

現在海軍が把握している十六もの海域その全てでその誤差が一ヶ月絶えることなく  
続ければ。

「目算だが、総数にしておよそ千にも及ぶ深海棲艦が海域から姿を消したことになる」  
この世界に唐突に現れた深海棲艦だが、当たり前だが唐突に消えてくれはしない。そ  
んな甘い現実ならば世界はここまで衰退はしていない。

つまり、見えないだけでどこかにいるのだ、およそ千もの数の深海棲艦の大群が。  
もしそれが一度に襲つてくれば…………。

弥生もその可能性を考えているのか、こちらに視線をやつてくる。  
こくり、と頷くと、また目を細め、ファイルへと視線を落とす。

「この一週間前、上官殿と電話で話しをしてな、近いうち何か起ころる可能性があると示唆  
された」

そこで、と呟き、こつん、と机を人差し指で叩くと、弥生がこちらへと視線を戻す。  
「二日後出撃だ、そして、七日以内に沖ノ島海域を攻略する」

その言葉に弥生が僅かに目を見開き…………こくり、と頷く。

「了解…………です…………司令官」

その言葉を聞くと同時に、机からファイルとは別に、一枚の地図を取り出す。

「この一週間考えておいた、沖ノ島攻略のための案だ」

そう言つて地図を開いて、机の上に広げる。

そこに描かれているのは沖ノ島海域の地図。そしてそれぞれの場所にいると予想される敵の分布。

「敵の中心部隊がここ、この地図の右端。そしてここにたどり着くための航路がこの三箇所。ただし北上すれば戦艦と空母が大量に立ちふさがるから、するトスレバ東進か、南進だ。ただ波の関係で、南進すると航路が逸れる危険性が高い」

「じゃあ、東進…………ですか？」

「いや、北進する」

その言葉に、弥生が首を傾げる。それはそうだろう、たつた今、暗に北上は無いと言つたのは自分だ。

だがその弥生の疑問を払拭するために、地図を指で指しながら、口頭での説明も交え一つずつ伝えていく。

そうして全て説明し終わつた際の弥生の反応は…………。

「無茶苦茶…………です、こんなの」

だつた。まあ自分でもかなり無茶ではあるとは思うが。

「けれど私としては無謀ではないと思つてゐる…………いや、現状のうちの艦隊の練度

を考えれば、むしろこれ以外に無いと思うが?」

そんな自身の問いかけに、弥生が数秒考え込み、そうしてこくり、と頷く。

「無茶、だけど…………だけど…………無理、では…………ない…………です……」

そんな弥生の言葉に、ふつと笑い、そうか、とだけ返す。

自身が何よりも信頼する彼女の頼もしい言葉に、自然と笑みがこぼれる。

「ならこれで決まりだ…………頼んだぞ、弥生」

「…………はい、任せて…………ください…………司令官…………」

そんな自身の笑みに釣られるように、弥生もまた薄く笑つた。

\* \* \*

「紅茶は飲めるか?」

そんな司令官の言葉に、少しだけ考える。何せ飲んだことが無いのだから、判断できない。

そしてそんな自身のことを察したのか、なるほど、と司令官が一人でに頷き。

「まあ、飲んでみろ」

そう言ってティーカップをこちらに渡してきた。

どうしてこんなことになつてゐるのか。

簡単に言えば、先ほど作戦会議もさてこれで終わりか、と弥生が思つていたら司令官が、暇なら少し話でもしないか？ と言つてきて自身がそれに付いて来たからだ。

執務室と続き部屋となつた隣の部屋に司令官の私室がある。秘書艦である弥生は執務室には良くいるが、さすがにこちらにやつてきたことはそう多くは無いため、未だにこちらにやつてくることに緊張を覚えてしまう。

最後にやつてきたのは一月前、あの演習の夜が最後だつただろうか。

あの時は、別のことでの頭がいっぱいだつたため、部屋の様子を落ち着いてみる余裕など無かつたが、こうして見るとなんだか物が散らかつた部屋だ。

と言うか、本が良く散らかっている。本を読みかけたまま眠つてしまい、そのまま忘れていた、と言つた感じのまま畳の上に転がつてゐる本が十冊、二十冊となくある。

意外、と言えば意外である、あの司令官のことだから、こう言うところはきつとしていると思つていた部分がある。普段の仕事時の態度を見れば、整頓されきつた部屋なのだろうと勝手に思つていたのだが、どうやら公私の使い分けがはつきりとしたタイプだつたらしい。

当たり前だが、司令官の私生活など弥生は知らない。司令官だつて弥生の私生活など知らないだろう、むしろ知ついたらそれはそれで大問題ではあるが。

弥生と司令官が触れ合う時間と言うのは、仕事中ばかりで、こうして私生活の部分で交流することと言うのは正直なところ初めてかもしれない、なんて、そんなこと考えていると。

「待たせたな」

部屋の襖ふすまが開かれ、司令官がやつてきた。

「紅茶は飲めるか？」

そうして冒頭に戻る。

「……………良い香」

鼻腔を擗るカツプの中で湯気を立てる紅茶の香りに、少しだけ心が弾む。

紅茶などと言うものを飲むのは、弥生としても初めての経験なので僅かな不安と、それ以上の期待が心中を渦巻く。そうして一口、カツプへと口をつけ口の中に流れ込んでくるのは熱。

「……………っ」

「つと……………熱かつたか？」

思わずカツプから口を離したが、口の中に残るその味は、決して不快なものではない。  
「ん……………美味しい……………です…………」

だから思わず、そんな言葉が漏れた。そして弥生のそんな言葉に、司令官の笑みがこ

ぼれる。

「そうか、まあゆつくり飲め」

「…………はー、美味しい…………のか？」

そうして出てきた言葉が疑問系だつただけに、え？　と思わず言葉がこぼれた。

「いや、ぶつちやけた話、本物の紅茶なんてしばらく飲んでなかつたからな、久々に珍しさで手に入れてきたが、これが美味しい紅茶なのかどうか区別が付かないんだよな」

そんな司令官の暴露話に、ええー？　と言いたくなる心境ではあつたが、顔には出さない。

「昔販売されてたペツトボトル入りのミルクティーは好きだつたんだがな、茶葉の輸入が難しくなつてからは日本産の茶葉を使つて販売してたんだが…………まあなんか違うつてんで、結局販売中止になつたんだよな」

それは司令官がまだ子供だつた頃の話。自身たち艦娘がまだ存在する前の話。

「ああ、茶請けにクッキーもあるが食うか？」

そう言つて司令官が小さな皿に敷き詰められたクッキーを差し出してくる。

時間的には昼前と言つて、小腹が空いたタイミングであり、ついつい手が出てしまう。

素直に美味しい、と言える。だが素直に喜べないのは、以前に司令官に渡した焦げたクッキーを思い出出してしまったからであろうか。

やつぱり、雲泥の差だなあ、なんて思いながら二枚目、三枚目と手を伸ばすその姿を司令官に見られているのに気づいたのは、五枚目のクッキーを飲み込んだ後のことだった。

「えっと…………司令…………官…………？」

微笑みながらとは言え、そうじつと見られると気恥ずかしいものがある。

かと言つて、こつちを見るなど言うのも極端な話であり、結局何か用か、と暗に問い合わせてみる。

「いや、思いのほか元気そうだと思つてな」

そうして返ってきたのはそんな言葉。思いのほか、と言う言葉の意味が分からず首を傾げると、司令官が苦笑して答えを返してきた。

「三週間くらい前だつたかな…………卯月が俺のところに来てな、お前が毎晩遅くまで何かやつているみたいだつて報告してきたんだ」

「卯月が…………？」

卯月はこちらにやつてきてからずつと同室に住んでいるので、遅くまで起きていることがバレているのは弥生とて理解していたが、それを司令官に報告していたとは知らな

かつた。

「少し気になつて調べたが、ここ最近の出撃も最後のほうは動きに精彩を欠いていたらしくな」

それは否定してもしきれない事実である。実際、最後の最後、そのせいで被弾しているのだから。

「コンディションに影響が出るほどに何やつてるのか、聞かせてもらえるか？」

「…………もしかして…………それを聞くために、呼んだん、ですか？」

「まあ半分くらいはな」

そう言つて返してくる司令官の目は真剣なもので。とてもじやないけど、誤魔化すことはできそうに思う。

「えっと…………出撃の時の、自分の指示を、後から…………確認して…………いました……」

どうしてだか隠し事が親にバレた時の子供のようなそんな心境になりながら、ゆつくりと司令官に自身のやつていることを伝える。

やつてていることは至極簡単だ。

出撃があつた日、自身が出した指示を振り返り、それが本当に正しかつたのか、他に何か指示すべきことは無かつたのか、などを考えるだけだ。

この一週間は出撃は無かつたが、それまでの三週間のことがあつたので、それらをずっと考えていた。

そうしてやはり最後に思い出すのは、あの演習の時、自分たちに指示を出していた不知火の姿。

猛烈なまでに強烈に鮮烈に焼きついたあの姿は…………きつと、ずっと忘れられないのだろう。

\* \* \*

他愛無い話、普段話す事務的なやり取りとは違う、本当に他愛無い日常的な話。

そうして話することで分かるのは、自身が予想以上に目の前の少女について知らないと言ふことだつた。

「それで、卯月が…………部屋でその時のこと、話したから…………イムヤさんが怒つちやつて、大変、でした」

「なんだそりや…………つたく、卯月は良い意味でも悪い意味でも奔放だな」

弥生から語られるこの一週間の話。それ以前の話。普段彼女たちが何をしているのか、俺はこれまで知ろうとしなかつたが、提督と艦娘の間柄なんてものはそれで良いと

思っていたが、存外そうでも無いのかもしれない、と最近思い直した。

切欠はやはりあの演習の後だろう。

俺は弥生がてつきり怒ると思っていた。勝手に決めるな、と。一言くらい相談してくれ、と。そう言うものだと思っていた。

けれど彼女から出てきた言葉は…………。

“弥生じや…………頼りになりませんか？ 司令官の力に、なれませんか？”  
ガツン、と頭を殴られたような気分だったのは確かだ。

そしてそれ以上に罪悪感に駆られたのも確かだつた。

決定権は常にこちらにある以上、それは別に違反でも何でもない。正当と言えば正當なものではある。

けれどそれは、決してやってはいけない類のことだつたのだと今にして思う。  
きっとあの演習で、俺は目の前の秘書艦の信頼を幾分か失つてしまつたのだ。  
必要なことだつたとは思つてゐる。

その選択を後悔したことは無い。

だがそれはひたすら自分勝手な考え方で、目の前の少女の感情を一ミリとて考慮に入れ  
てなかつたのは事実だつた。

「やつぱ…………卯月には敵わねえな」

「え？　えっと…………卯月が、どうか…………しました……？」

首を傾げる弥生に、何でもない、とだけ返して茶請けに出したクツキーを一つ摘む。甘いはずのクツキーが何故かいつか食べた焦げたクツキーのように苦く感じられて。それがどうしてか、弥生が自身を責めているようにも思うのは、どう考えたって氣のせいであり、自身の罪悪感の問題でしか無かつた。

\* \* \*

三週間ほど前の話である。

夜、弥生に今日の業務の終了を告げて部屋に返した後も、俺は執務室で資料に目を通していた。

内容は南西諸島防衛線の突破に伴う詳細と、そして次に向かう海域、カムラン半島の敵分布だ。

今日中に目を通すだけ通してしまおうと考え、気づけば夜半過ぎ。

そろそろ資料も終わるし、その後一息吐いて寝ようか、と考え…………コンコン、と扉がノックされた。

「誰だ？」

「失礼するぴよん」

扉を開き、入ってきたのは…………卯月だつた。

時間が時間こともそつうだが、その相手も相手だつただけに、思わず目を丸くする。

「どうした、こんな時間に」

「…………弥生が」

切り出し、そこに弥生の名があつたことで、思わず目を細める。

「遅くまで何かしてるんだぴよん」

「何か、とは？」

そんな自身の問いに、卯月はさあ？ と肩を竦める。

「でもだいたい想像できるぴよん、先週司令官が弥生に言つたことを考えれば」

「…………演習の後のあの話、弥生から聞いたのか？」

その問いに、卯月が僅かに目を細めて頷く。

「物は言い様だよね、弥生は眞面目だから、騙されたみたいだけど、うーちゃんは騙されないぴよん」

「騙すつて…………そんなつもり無かつたんだがな」

こうして会話している間にも、少しずつ、少しずつ、卯月の目が鋭く、細く、そしてその表情が険しくなっていく。

「じゃあどういうつもりか、教えて欲しいぴよん」

「…………あいつに旗艦の役割つてのを教えてやりたかつたんだよ、卯月、お前だつて元はあの第二艦隊の旗艦だつたんだ、分かるだろ？」

上官殿のところの電がまだ第一艦隊にいた頃、卯月は第二艦隊の旗艦を勤めていた。その期間にしておよそ一年と言う短いものではあつたが、旗艦と言う物の特別性を知るには十分な期間だろう。

そんな自身の問いに卯月が頷く、頷くの…………だがその顔から険しさは取れない。

「なら先に弥生に断つてからでも良かつたはずだぴよん」

「ああ…………まあそれは悪かったと思ってる」

弥生の滅多に見ない不安そうな表情を思い出し、思わず顔をしかめる。

「司令官は、弥生を自分に都合の良い道具だとでも思つてるの？」

そして続けて出たその問いに、だからこそはつきりと答える。

「そんなはず無いだろ！」

あまりに、と言えばあまりな言葉に、思わず熱が籠る。

けれど、返つて来た言葉はそれ以上だつた。

「だつたら、弥生のこと、ちゃんと考えてよ!!」

目の前の荒げたその声に、その内に秘められた激情に、思わず目を見開く。

「弥生は確かに感情が表情に出にくいくけど、何も思つてないわけじゃないんだよ！　本当は不安で不安で、自信が無いのを、それでも旗艦として私たちに見せないよう頑張つてるんだよ！　いきなり旗艦から外されて、他所の艦隊の艦娘に自分の立ち居地奪われて、それで何も思わないわけ無いじゃない！　悲しくないわけ無いじゃない！　怒つてないわけ無いじゃない！　不安に思わないわけ無いじゃない！　それでも司令官にそんな思いぶつけたくないから、必死に我慢してるんだよ、堪えてるんだよ！　気づいてよ、司令官が気づいてあげないと、弥生は出せないんだから、言えないだよ、真面目だから、弥生はそう言う子だから！　言えないまま、表に出せないままつと溜め込んで、一人で抱え込んで、辛くとも、苦しくても、悲しくても、怒つっていても、不安でも、我慢するんだよ!!!」

お願いだから…………氣づいてよ、そう告げる卯月に。

啞然とする。呆然とする。愕然とする。

今にも泣き崩れそうな卯月に、手を差し伸べようとして…………けれど、それをする資格が自身にあるのか、と考えて止まる。

自分のせいなのに、全部自分が悪いのに。

たつた一人と決めた秘書艦を傷つけて、その傷ついた秘書艦のために泣いている姉妹に、俺は一体何と言つて返せばいいのだろうか。



ふと、蘇る記憶の中で、誰かが自身を呼んだ。

「……………ああ、そつか」

押し込めてた過去の後悔が傷を開く。血管に鉛を流し込まれたように重い体で、けれど目の前の卯月に手を差し出す。

「……………そう何だよな」

何がそうなのか、自分で分かつたままの言葉をそのまま口に出す。  
「アイツじやないんだよな、弥生は…………だから、そうだな、お前の言う通りだよな、

卯月」

自身を見つめる卯月に、けれど目を反らすことなく、その手を卯月の頭に載せる。

「俺が悪かった…………うん、どう考へても俺が悪かった」

思わずため息を吐きそうになるくらいに、自分の馬鹿さ加減に呆れる。

弥生は、弥生だ。そんなことに、ようやく気づいた。

いつからだろう、弥生と誰かを混同して見ていたのは。

いつからだろう、弥生の前で、一人称を私、から俺に戻していたのは。

「本当に…………いつから私はこうだつたんだろうな」

一つ嘆息。そして卯月へと視線を合わせて口を開く。

「約束する。これからは弥生をおろそかにしたりしない。私の秘書艦を大事にする」

「本当に?」

「ああ、本当に」

「絶対?」

「絶対と言つたら絶対だ」

「…………」

「…………」

そうして互いに見詰め合つて、数秒。やがて卯月が一つ息を吐き出す。

「…………なら、今は信用するぴよん。でももし弥生を泣かせたら司令官のこと、絶対に許さないぴよん」

卯月が小指をピンと立てて突き出す。その意味を一瞬図りかねたが、すぐに気づいてこちらも片手を差し出し、小指と小指を絡ませ——

「…………ああ、約束だ」

——互いに指を切つた。

\* \* \*

「なあ弥生」

「はい…………なん、ですか？」

「三週間前のことと思い出し、今日までに一つ決めたこと実行に移す。「公私混同ってのはよくないよな」

「は…………？　え、はい、そう…………ですね……」

「やっぱ仕事は仕事、私生活は私生活で分ける。うん、俺も賛成だ」

何が言いたいのか、分からぬ弥生が首を傾げる。

まあ余り回りくどい言い方をして、趣旨が伝わらないだろうから、きつぱりと伝えることにする。

「仕事中は俺はお前の上官で、お前は俺の部下。これは絶対だ、けどそれを私生活にまで持ち込む必要は無いぞ」

「…………え？」

自身の言葉の意味を図りかねたのか、弥生が素つ頓狂な声を上げる。

「言いたいことがあるなら言つても良いってことだ。お前だって俺に言いたいこと、言つてないことあるだろ？」

自身のそんな言葉に、弥生が少しだけ沈黙して。

「…………はい」

頷いた。

「先に謝つておく。一月前の演習のことだ。夜に少し話しさしたが、それでもあれは俺が悪かつた」

そう言つて頭を下げる俺に、弥生が驚いた様子で見る。

「必要なことだつたと今でも思つている、やつたこと自体は間違つていないと今でも思つている、けどそれをお前に伝えなかつたのは俺が悪かつた、その結果として、弥生が傷ついたなら俺の責任だ」

「…………」

俺の告げた謝罪の言葉に、弥生が沈黙する。

さつきは言いたいことがあるなら言つても良い、と言つたが、それでも弥生がそう簡単に自発的に本音を告げるとは思つていない。  
だから敢えて俺から尋ねる。

「あの時、悲しかつたか？」

「はい」

「辛かつたか？」

「はい」

「苦しかつたか？」

「はい」

「腹が立つたか？」

「はい

「不安だったか？」

「……………はい」

「一つ一つ、頷くたびに歪んでいく弥生の表情に、心が痛む。

「全部俺のせいだ、悪かつた。言いたいことがあるなら何でも言つてくれ」

そう言つて再度頭を下げる俺に、弥生がようやく口を開く。

「どうして……………どうして、何も言つてくれなかつたん、ですか。どうして、黙つて、あんなこと、したんですか。悲しかつたか、ですか？ 悲しかつた、ですよ。弥生は、司令官に信じてもらえてないつて、そう思つた、から。辛かつたか、ですか？ 辛かつたですよ。苦しかつたし、本当は、怒つたりもしました。不安だったし、どうして、つて何度も思いました」

初めて聞くかもしれない、弥生の本心からの言葉に、ぐつと歯をかみ締める。

自身がそれだけ我慢させたのだ、だから目の前の少女の吐き出す言葉を全て受け止めるのは最早自身の義務でもある。

そうして、覚悟を決めて。

「けど、謝つてくれたから、だから、もういいです」

あつさりと、その覚悟の上を行かれた。

思わず呆然として、顔を上げる。

笑つていた。

いつも無表情過ぎるくらい無表情で。

偶に表情が出ても微細で、ほとんどの人が気づかないほどで。雰囲気と言葉のトーンだけで機嫌を読むような目の前の少女が。はつきりと、誰にでも分かるくらいに微笑んでいた。

「司令官」

そうして少女が、俺を呼ぶ。

「今度は、ちゃんと…………弥生にも、相談して、くださいね」  
こくり、こくり、と呆然としながら頷くと。

「なら、もう良い、です…………許しました」

あつさりと、そう告げる少女に。

こいつにだけは、絶対に敵わないな。

そう思つた。

## 十七話 新人提督が電話を受けたりする話

「撤退なのです」

口を開き、告げた言葉に他五人がどよめく。

確かに危険な予兆もある、だがそれにしても早すぎる、恐らくそんなところだろう、この五人の考えは。

だが、それでは遅いのだ。

「撤退なのです」

反論のありそうな五人に對して、再度告げる。

「…………電、そないな」と言うても、早すぎるんやないか?」

五人の代表として、黒潮がそう尋ねてくる。相変わらず食えない性格である。

恐らく黒潮自身はこの撤退に納得している、理解しているはずなのだ。けれどある意味、他四人の中心である黒潮が賛成に回れば他四人が何も言えなくなる。だからこうして他四人に賛同して、自身から説明を引き出しているのだ。

つまり、今尋ねてきているのは、他四人を納得させれる材料を引き出すためであり、この撤退を滞りなく行うためのものである。四人と、そして電の両方を手助けするため

に、敢えて自身の意見を封殺する。本当に食えない性格である。そんなもの自分で説明すればいいのに、そこで敢えて電に説明させようとするとところが特に。だが乗らないわけにも行かない、先ほども言つたが、これは黒潮なりの手助けなのだから。

撤退時と言うのは、一番危険な状況である。

古来より戦争において、最も被害で大きい瞬間であり、これを上手く行えるかどうかが生死、そして命運を分けるほどに重要なファクターである。

撤退戦に置いて、意思の統一と言うのは最も重要だ。

規律正しい、統率の取れた軍団には追撃も仕掛けにくい。逆に足並みの乱れた鳥合の衆など格好の標的だ。

だからこそ、ここで意思を揃える必要がある。撤退、と言う二文字を四人の頭に刻みつける必要があるのだ。

「あつちを見るのです」

南東に向かつて指を差す。その先には二つの島に挟まれた海域に数隻の敵水雷戦隊が移動している姿が見える。距離はかなり遠い、正直まだ明るい昼間で無くてはすぐに見失つてしまう程度の距離。

「それから、今度はあつちなのです」

さらに指差す方向には、別の艦隊。潮流の激しい場所らしく、駆逐級が波間に揺れているが、そこに混じる戦艦級は微塵も気にして様子は無く佇んでいる。同じく距離はまだ遠い。こちらから近づかない限り、恐らく戦闘になることは無いだろう。

「あの二点。あそこに敵が居座っている以上、これ以上は戦闘無しには進めないのでよ」

戦闘が起これば、周辺の敵が次々と集まつてくるだらうことは予想に難くない。何せここは正真正銘の敵地なのだから。そして同時にどうにかあれらを避けて進んだとしても、今度は戻ることができなくなる。

これから日が沈んでいくにつれ、暗くなることはあつても明るくなることは無い。だからこそ、事前にこの周辺の海域を敵を避けながら見て周り、島の分布や敵の配置などを把握したのだ。

そしてそれら全てを総合してみた結果、あの二点に敵が陣取っている以上、これ以上の進軍は不可能だと判断せざるを得ない。

「ど、言うわけで、撤退なのですよ。それでも残りたいなら、敵に囲まれて一人で死ぬ覚悟をしてから残るのテ”ス”」

「んまりと嗤いながら告げた言葉に、全員がふるふると首を振った。ようやく理解は得られたようなので、すぐ様撤退行動に移る。

「最寄の泊地まで一旦撤退なのです。その後のことは到着してから説明するので、北北東へ転進です」

その指示に全員が了解と頷く、と同時に。  
バシャア、と水面が弾け、ソレが現れる。

「電！」

黒潮が注意を喚起する、と同時に足を振り上げる。

振り上げた足を振り下ろし、ソレ…………駆逐イ級へと踏み込み、一息に間を詰める、  
と同時に足を振り下ろした勢いのまま、後ろ手を…………そしてそこに持った碇を振り  
上げ、振り降ろす。

ドスツ、と鈍い音と共に手の中に残る感触。相応の手ごたえこれなら即死だろう。

「敵に見つかったのです、全艦即座に転進」

そう叫ぶと共に、海を走り出す。そしてそんな自身に五人もまた付いてくる。  
だが見つかった時点ですでに、他の敵も密集してきていたらしい。

進路上に敵軽巡級の姿。その攻撃の手を…………真っ直ぐこちらを向いている。

ドンッ、と敵の銃口が火を噴く、と同時に自身は海面を蹴り上げる。  
ザパア、と捲れ上がった海水が飛んでくる砲弾を飲み込む。だがその程度ではその勢  
いまでは止まらない。

けれど、その動きは僅かに鈍る。

「それで、十分…………な…………の…………テ”ス!!」

思い切り振りかぶった碇を、サイドスローで投げる。くるくると回転する碇は飛んできた砲撃をいとも容易く打ち返し、そのまま進路上の敵軽巡級へと減り込む。

思い切りのけぞり、その衝撃に動きを止める軽巡級。時間にして十秒にも満たない。だがそれでも、それだけあれば、十分過ぎた。

近づいて、その砲を付きつけるには……。

どん、どん、どんどんどんどんどんどん

引き金を引く、引く、引く、引く、引いて、引いて、引いて引いて引いて引いて。そして動かなくなつた敵を蹴り上げ、水底へと沈んでいくソレに一瞥すらくれず、また動き出す。

碇も沈んでいつたが、見える範囲に敵は居ないようなので問題は無いだろう。

「さあ、急ぐのです」

そう告げ、五人を急かしながら、ふと後方へと目をやる。

水平線へと消えていく敵を数えながら、その方角に意図せず目を細める。

「…………嫌な予感がするのですよ」

まさか、と言う内心の予感を、けれど口には出さずに飲み込んだ。  
言つてしまえば、それが現実になつてしまふような気がして。  
けれど、言葉にしようがしまいが、現実は変わらない。

数日後、それを思い知られた。

\* \* \*

「鈴谷さん！」

「あいよー、まかせといて！」

どおん、と言う轟音と共に飛来した砲弾が敵重巡リ級eliteに直撃、その身を大  
破させる。

すでに敵艦隊の半数以上は沈み、残った敵も中破か大破した状況。

今なら危険性を排除して雷撃戦に望める。

「魚雷装填」

自身のその言葉に、卯月が、そして海中でイムヤが雷撃準備をする。  
距離はもうそれほど開いていもいない。

この距離ならば……………当てる。

「発射つ！」

振り上げた腕を振り下ろす。海中にいるイムヤにも伝わるように見せた、合図。同時に、自身から卯月から、そしてイムヤから、魚雷が発射される。

距離は近い、だが敵の交戦能力はすでにほぼ壊滅した状態だ。

この状況、敵の反撃は無い。すでにそんな状態ではないからだ。

そして真っ直ぐ伸びていった航跡が、敵の中心まで届く、と同時。ざぱああああ、と激しく波飛沫が巻き起こり……。

飛沫が収まつた後に、敵の影は無かつた。

そのことにほつと一息を吐く。

そうして周囲を見渡し、全員無事なことを確認する。

「……………とりあえず…………初戦、突破…………です…………」

咳き、そうしてぐつと拳を握る。

「次…………行きます」

その言葉に、勝利に喜ぶ全員がさつと表情を変えて、頷いた。

今更な話ではあるが。

艦隊の進路と言うのは基本的に当てずっぽうである。

と言うのも、現在の海域は深海棲艦の登場の影響なのか、磁場のようなものが発生し、現代機器の大半が使用できない状況にある。

航空機や艦船もまた機器が異常を示し、まともに航行することもできない。レーダーなどがろくに機能せず、向かうことはできるかも知れないが戻つてくることは確実にできなき。

一度でも方向を見失えば、最早空を見上げる以外に方角を知ることはできず、一体自分がどこにいるのかすら分からなくなる。

初期の頃は、この制約のせいで、思うように遠征できず、本州近海で防衛線を張るだけが精一杯だったのだが、その三年後くらいに開発されたのが、羅針盤である。

妖精と呼ばれる艦娘たちを生み出し、その装備を作り出し、そして自らもまた艦娘たちの艦装と共にそれらを操る謎の存在。その妖精の力を利用して生み出された羅針盤の力は明快単純で。

帰り道が分かる、それだけだ。

だが、それこそが何よりも重要であり、何よりも必要とされていることであった。

仕組みとしては単純かつ謎であり、妖精の帰巣本能とも呼べるものを使い、所属の鎮守府への進路を導きだすのだ。妖精はどんな場所に居たとしても、自身の住み着いた鎮守府がどこにあるのか、と言うのが分かるらしい。帰路を尋ねれば瞬く間に羅針盤は方

位を示してくれる。

単純と言えば単純であり、どうしてそんなことができるのか、と言う意味では謎ではある。

だがこれの開発により、海軍はその版図を大きく広げ、数年前、ついに大陸間との行き来に成功した。

これによりシーレーンの復旧が急ピッチで進められ、日本海の一部の航路が確保された。

さて、本題がずれたので戻すが、とにかくこの羅針盤を使うことにより、艦隊は帰路の確保に成功した。

だが磁場が狂っている以上、この羅針盤もまた普段は針が狂つており、碌に機能はないのが現状である。

「方角…………北は…………こっち？」

さらに研究を進めて分かつたことではあるが、妖精と言う存在が憑いた機器は、この磁場の影響を廃し、正常に機能することができるらしい。

つまり、この羅針盤も本来ならば正確に機能するはず…………なのではあるが。

けれどもそう言つた機器は、妖精が気まぐれを起して偶におかしな働きをしてしまう、と言うのもまた分かつてることである。

「本当にこつちかぴょん？」

卯月が空を見上げながら呟く。太陽の位置を見て方角を知る、と言うのも無くは無いが、現状の正確な時刻も分からぬ、だいたい朝、だいたい昼くらい、だいたい夕方、程度の時間感覚でいる以上それも正確とは言えない。かと言つても時計を持ち出しても、狂うだけだ。

「分からぬ……けど……………とりあえず、進むしかない…………から…………」

立ち止まつてゐる限り、永遠に進まないのは自明の理だ。

この羅針盤の混迷を予測して司令官は七日間と言う期限を設けたのだ。

一日や二日、攻略に失敗したからと言つてどうこう言う問題でもない。

「じゃあ……………行きます……………進軍…………です……………」

そう告げた自身の言葉に、全員が頷いた。

\* \* \*

「……………なるほど。 そうですか」

『ああ、予想以上ではある』

「けれど、想定以上ではない、と」

電話口に口にした言葉に、上官殿が電話の向こう側で苦笑する。

どこまで予定通りなのか、自身も分からぬが、万事に備え、人事に尽くす。それがこの上官殿の常勝の秘訣である。

この異常事態において、未だに一ミリも慌てた様子が感じられない以上、この程度は予想済み、と言うことなのだろう。

『確かにまだ想定の範囲内ではある、予想以上ではあつたがもつと最悪も想定してある以上、現状のままなら問題にならないだろう』

だが、と。上官殿が言葉を続ける。現状のままなら問題無い、けれども。

『敵の移動が未だに止まない。最初の想定よりすでに一段階上がつているが、正直これでもまだ足りないような気がしてならない』

「それほど、ですか？」

そんな自身の問いに、上官殿がああ、と短く答える。

『具体的な日数は分からん、だが敵が時間をかけているのなら、こちらも同じだけの時間を有意義に使わねばならない。こちらは資源と情報の収集を密に動いている、何か動きがあればまたすぐに大本営に通達し、動き始めるだろう』

『そしてこちらは、今之内に沖ノ島海域を攻略しておく、と』

『ああ、現在の海軍で少佐が中佐になるための最低条件がキス島の駆逐艦での攻略か、も

「しくは沖ノ島海域の制覇だ。どちらか満たせれば俺の権限でお前の昇進を掛け合つておく』

『そして中佐になれば、緊急時、大本営とは別に、個別の鎮守府で動くことができる……ですか』

『正確には、将官位の要請に応え、その指揮下に入る義務が与えられる、だがな』

それは義務である。基本的に佐官位の人間は緊急時、大本営の意向によつて動かされる。

将官位の人間は緊急時、大本営と強調しつつ、独自で動くことが許される。

そして少佐位の人間は大本営の直轄として行動することが義務付けられており。

中佐位の人間は、将官位の人間の要請があつた場合、一時的に大本営の指揮下から外れ、要請した将官位の人間の指揮下に入ることが義務付けられている。

そして大佐位となると、将官位の人間から要請があつたとしても、相応の理由がある場合に限り、それを断ることができ。さらに自ら将官位の人間の指揮下に入れてもらうようになりややこしいが、これが将官以上になると別の意味で複雑になる。

かなりややこしいが、これが将官以上になると別の意味で複雑になる。  
義務などはほとんど免除される、代わりに派閥の問題などが立ちふさがり、自由に身動きすることが難しくなる。

慣例としては独立して動くのは中将位以上となる。少将位の人間は、実際に指揮を行うことはあっても、その実、中将位以上の人間の意向の元に動くことが多い。

「上官殿は確かに少将でしたが、その上は？」

『数年前から親交を深めてきた相手だ、心配する必要は無い』

間接的にとは言え、自身が中佐になれば、その人の指揮下に入ることになるのだ、どんな人物か気になるのは当然であるが、上官殿が心配無いと言う以上、それ以上追求することはできなかつた。

『それより、沖ノ島海域の攻略は順調か？』

あまりこの空気は良くないと思つたのか、即座に話題を変える上官殿。

乗る。

「まだ初日ですから、どうとも言えないですが…………正直言えば、練度が圧倒的に足りてませんね」

『ああ…………東部オリヨール海と違つて、敵の強さが跳ね上がるからな。確かに必要とされる練度が跳ね上るのは確かだ』

敵中枢艦は戦艦四隻。中にはル級 flag ship の姿もまたある。

おおよそ現在見つかっている敵の中でも、最上級の強さを持つ敵だ。その随伴艦のル

級eliteもまた決して油断できない敵であり、道中にも戦艦級や正規空母級の敵が続々と現れるため、たどり着くことすら難しいとされる沖ノ島海域。

そして最大の問題はやはり方向が分からぬ、つまり羅針盤なのだろう。

妖精が気まぐれに回す羅針盤を本当に信じて良いのかどうか。かと言つて他に判断材料も無く、強敵との戦闘を潜り抜け、たどり着いた先は行き止まりだった、なんてことも良くある話。

そうして道中の強敵、羅針盤の二つの要素を運良く潜り抜けたとして待ち受けるのは、これまでとは桁違いの強さの敵艦隊。

まあ有体に言つて、ここで心を折られる提督が続出するのも分かる話ではある。あるが。

「立ち止まつてられませんから」

けれど関係無い。

自身の半生を費やしても成し遂げたい目的がある。

そのために必要なことならば。

「…………成し遂げるだけ」

そうか気をつけろ、とだけ告げて通話を切った上官殿に、受話器を置いて…………そう呟いた。

# 十八話 新人提督が弥生を沖ノ島海域に行かせたりする話

沖ノ島海域挑戦からはや五日が過ぎた。

六日目。朝。

「どうだ？」

たつた一言、自身の秘書艦に問う。

期限は七日と、最初に決めた。そしていつ決行するのかは、自身が秘書艦に任せた。毎日問い合わせた言葉は、けれどまだ、と言う返事だけが返ってきて。けれど、どうやら今日は。

「…………はい」

いつもとは違うその言葉に。

「…………そとか」

それだけを返した。

\* \* \*

艦隊で戦闘を行う際、時間と言うのは非情に重要な要素となる。

単純に言つて、朝なのか、夜なのか、それだけで戦い方がまるで違うからだ。

今更な話だが、この艦隊の速度で簡単に沖ノ島海域が突破できるとは自身も司令官も思つてはいない。

そんな簡単に突破できるようならば、新人提督の登竜門などとは呼ばれない。だが司令官曰く、時間が無い、らしい。

それがどういう意味か、良く知らない、けれどとにかく司令官はこの海域攻略の期間を一週間と決めた。

そして何時ソレを敢行するのか、そのタイミングを秘書艦である自身に委ねた。

ならば自身は不可能の可能性を考慮しながら決断する、それが艦隊旗艦でもある弥生の役割と言うものだろう。

話を戻すが、現状の艦隊で沖ノ島海域を突破するのは、かなり厳しい、それが現実である。

何せ、最奥に居るだろ<sup>ボス</sup>う敵中枢部隊には戦艦が三隻も確認されているというのに、こちらの艦隊には一人として居ない、それどころか六隻埋まつてすら居ないのだ。全うな方法でやつてこの海域を突破するのはまず無理だ。

だからまあ、これは紛れも無い裏技である。

最初に言つておくと、艦隊と言うのはいくらでも戦い続けることの出来る存在ではない。

艦娘は一戦ごとに相応の弾薬と燃料を消費する。そしてその消費がかさみ燃料が尽きれば機動力が、弾薬が尽ければ攻撃力が皆無となる。故に安全圏と言われる四戦、帰投中に襲われた時のために一戦分の燃料と弾薬は残して戦うのが現在の常識とも言える。

次いで言つておくと、海域の道中には深海棲艦に侵略され放棄せざるを得なかつた元鎮守府や、元補給基地と言つた類のものがある、そこにある燃料や弾薬、鋼材とボーキサイト、時には高速修復材や高速建造材と言つた貴重品まで、置いてあるものは回収して自身の鎮守府で使用することが大本営より許可されている。有体に言つて、そこで補給してもいつこうに構わないのだ、敵地のど真ん中、と言うことを考えなければ、だが。

一つ、日のある間の戦闘と暗くなつてからの戦闘は勝手が違う、と言うこと。

二つ、現状の艦隊ではまともにやつては沖ノ島海域は突破できないだろう、と言うこと。

三つ、艦娘は燃料弾薬が尽きれば戦えなくなるが、逆に言えばそれらがある限り、損害を無視すればいくらでも戦うことは可能だと言うこと。

四つ、海域の道中には放棄された補給基地などがあり、そこにある資源は使うことを許可されている、つまり補給が出来る、と言うこと。

そして五つ、司令官は北から敵中枢を目指すと言った、海域で唯一空母が確認されている北から。ただし北から向れば、恐らく敵中枢にたどり着いても燃料や弾薬が足りないだろう。

さて、以上五つの条件を考えれば、司令官が当初提案してきた作戦、と言うのも理解できるのではないだろうか？

夜戦にて敵中枢までの強行突破。

道中の消費は補給基地で行い、敵中枢までに燃料弾薬を絶やさないようにする。

簡単に言えばこの二つである。

現状の問題点は三つである。

一つは現状の艦隊では敵中枢部隊に勝利することが難しいこと。  
だがこれは夜戦と言う水雷戦隊でも大型艦を倒すことの出来る状況に持ち込むことにより解決する。勿論こちらの被害も相応以上に大きくなるだろうが、それでも日にあ

るうちに戦艦三隻を相手にするよりはよっぽど勝ち目が高い。

一つは敵中枢にたどり着くまでに燃料弾薬が心もとなくなること。

これは途中の放棄された補給基地で簡易補給することにより解決できる。道中に補給基地があるのは事前に確認されている。どれだけの量が残っているかは疑問だが、それでも艦隊が一度補給する程度はまだ有るだろうと予想されている。

そして最後に一つ。

羅針盤は気まぐれで、本当に敵中枢にたどり着けるのか。

これだけはどうしようもない問題である。

だから試行回数を増やすしかないと司令官は判断し……そこに弥生が待つたをかけた。

五日間も日のあるうちから戦い続けたのはそのためである。

「ん…………こっち」

明るいうちに目星をつけていた目印となる島を見つけ、艦隊の現在地を頭の中で地図を広げながら確かめる。

と言つても薄らぼんやり見えるだけなので、本当にそれが目印としていた島なのは疑問ではあるが。

「…………海が静かね、深海棲艦もやつぱり夜は動きが鈍いのかしら」

瑞鳳が呟きながら空を見上げるのに釣られ、弥生もまた上空を見上げる。

暗い。満天とは言わないが、夏だけあつて星空は輝いて見える。お陰でぼんやりでも島の形が見えるのだが。

時刻はすでに夜と言えるだけの時間帯。冬と違い、夏の夜は遅くやつてきて、早々に終わってしまう。

急ぐ必要があつた。

もうすぐ最初の補給基地があるはずだが、ここに至るまで一戦もしてしないため、このままならば補給の必要も無い。

深海棲艦は基本的にそれぞれの海域の特定の地点に集まつてている。その場所はだいたい傾向的に決まっており、そのためその周囲を点で表示し、地図上にアルファベットを振つてそれマスとして記入することがある。

だが、深海棲艦は生きているのか死んでいるのか不明だが意思を持つ存在だ。いつも同じ地点にいるとは限らないし、いつも同じ編成だと限らない。

もしかすると、午前中にどこかの別の鎮守府の艦隊が海域入り口付近の敵を一層したのかもしれない。この海域の入り口付近の敵は基本的に水雷戦隊ばかりなので、新人提督たちに良く練度向上のための練習相手扱いされていることが多いと聞く。

深海棲艦はどこからとも無く現れ、倒しても倒しても尽きることの無い存在ではある

が、午前中に倒したものが午後になつて復活している、などと言う余りにも非常識なことはさすがに無い。ならば明日の朝までは敵はいないだらうから比較的安全に進むことができた。

問題はここから。この先には……。

「…………そろそろ、敵の哨戒圏、です…………全艦、警戒」

咳きにも似たその掛け声に、四人が応と答え、周辺警戒を開始する。

事前情報によれば、この辺りに出てくる敵の中には戦艦ル級もいるらしい。

すでに何度も倒している相手ではあるが、何度戦つてもその強大な火砲には戦慄を覚えざるを得ない。

さらに夜戦と言ふこともあり、随伴の水雷戦隊も決して侮れない相手である。

「…………でも…………そんのは、最初から…………分かつてる、から」

元々無茶のある行軍なのだ。まともにやれば勝てないとわかっているからこそ、運に頼つた。

夜戦とは、究極的に言つて、先制の取り合いだ。

視界の開けた日の出ている時間帯とは違い、敵の姿すら見えない闇の中から相手よりも先に敵を見つけ出し、そしてその機先を制することが肝要になる。

だがこの薄い星明かりの空の下では、かなり近づかなければその姿を認めることは相

本当に難しいと言える。

「……………敵影、確認」

だからこそ、それは相當に運が良かつたのだろう。  
気付けばうつすらと蠢く影を見つけた。

それがこちらの背を向けた敵の姿だと認めた…………瞬間。

「全艦…………攻撃開始、です」

味方の艦隊が火を噴いた。

\* \* \*

南方海域、サーモン諸島付近での敵深海棲艦の大規模な集結を確認。  
その一報が入つて来た時、男は深くため息を吐いた。

「お前の嫌な予感が当たつたな、電」

「…………つち、面倒くさいことになつてのですよ」

「そうですね、約半年ぶり、と言つたところでしようか」

予想はしていたことではある、近頃の敵深海棲艦の大規模な移動。

またなのかな、と言う思いは確かにあつたが、やはりこうなつたか、とも思う。

「大本営からは？」

そんな不知火の問いに、男が首を振る。

「まだ情報が足り無すぎる、逆撃をすべきか、防衛をすべきか、まだそこすら分かつていいのだから、現状での判断は軽率だろうな」

「かといって、ここまで数が揃っているなら余り猶予も無いのですよ」

男の言葉に不知火がなるほど、と頷き、けれど電は苦々しい表情を崩さない。

そんな電の苦言に、男もそうだろうな、と思う。

確認された敵の数、種類だけでも相当なものなのに。

これまでに一度も確認されていない種類の敵。  
その規格サイズや武装からして……。

「…………〔姫〕か」

これまで沈黙が執務室を覆つた。

\* \* \*

都度二度の夜戦、そして道中の補給。

夜明けは近い、だがすでにここは海域最奥。

どこかに居るだらう敵中枢艦隊を見つけ出し、これを叩けば全て終わる。

「…………各艦、状況を…………報告」

進むか、退くか。まだ選択の余地は残されている、少なくとも、接敵しない限りは。もう一度状況の確認、それで決めようと弥生は考えた。

「イムヤは問題無いわ、夜に潜水艦わいたしを見つけようなんて無理な話なんだから」

伊168は無傷。元々夜においては無敵を誇る潜水艦である。爆雷もソナーも持たない敵水雷戦隊にどうこうできるはずも無かつたようだ。

「こつちも問題ないわ…………と、言つても私はここまでろくに戦闘できてないから、申し訳ないんだけどね」

瑞鳳も問題無し。夜間戦闘なので空母は戦うことが出来ないが、司令官の指示で今回も付いてきている、どうやらここまで無事に切り抜けてこれたようだつた。

「うーちゃんはちょっと不味いかも、機関周囲エンジンは大丈夫だけど、武装があうびよん」

卯月が中破。だが機動力に問題はないなら、一応進軍は可能、戦力として数えるかどうかは分からぬが。

「悪いね卯月、あたしのこと庇つちゃつてさ…………お陰でこつちの被害は軽微だよ」

鈴谷は小破、と言つたところか。だがまだ問題は無いだろう。

「弥生も…………問題ない、です」

そして自身は問題無し、多少装甲が傷ついた部分もあるが、小破までは至っていない。

艦の被害度は、主に三種類に分けられる。

最初は小破。これは多少の損害<sup>ダメージ</sup>は受け、決して無傷とは言えないが、まだ戦闘に支障が出るほどではない状態。ただし、先ほども言つたが決して無傷であるわけではないので、さらに攻撃を受け続けければあっさりと中破してしまう危険性を孕んでいるのは否めない。

次が中破。これは機関か武装、もしくは両方に重大な支障が発生した状態。機関に支障が発生すれば機動力が落ち、攻撃の回避もままならず、武装に支障が発生すれば攻撃力を大きく減衰する。どちらにしても戦力としてはかなり問題のある状態であり、できるだけこの状態の艦娘が居る場合は危険を冒さないほうが良い。

最後が大破。装甲が完全に剥がれきった状態であり、非情に危険。最悪駆逐艦の砲撃ですら轟沈する危険性がある上にそこまで行く過程で大体の場合、機関も武装も重大な損害を負い支障をきたしているはずなので、基本的には戦力としては数えることが出来ない状態。

現状で一人も大破まで至つて居るのはほぼ奇跡と言つていいだろう。

運が良かつた、そう言つても過言ではない。

初戦はいきなり敵の背後から奇襲が出来たため、ろくな反撃すら受けずに殲滅。続き戦いは、けれど空母四隻と軽巡一隻、駆逐艦一隻。空母は夜戦では攻撃できないし、軽巡と駆逐艦は当たるはずの無い潜水艦への攻撃に夢中でこちらも問題なし。

最後の重巡リ級 flag ship を旗艦とした精銳水雷戦隊は強敵だつたが、旗艦リ級 flag ship の攻撃を鈴谷を底つて卯月が中破、残る水雷戦隊の攻撃はまたイムヤが上手くいなし、真つ先に敵旗艦のリ級を叩き潰すことで極めて軽微な被害で突破することができた。

「…………イムヤさん、 大活躍、 ですね」

主に囮と言つた意味ではあるが、けれど敵の気持ちも分からなくはない。どんなに強大な艦隊だろうと、夜に潜水艦を相手にするなんて恐ろしい真似誰だつてやりたくは無いだろう。

究極のステルス兵器、などと言う呼称は伊達ではない。日の明るい昼間でさえソナー無しでその姿を見つけることは難しいと言うのに、ましてや夜である。

建造二隻目で潜水艦を引き当てた司令官の運には正直脱帽する。

二隻目でいきなり潜水艦とかピーキーな、なんて思つたりしたが、今となつては頼もしい限りである。

と、話はそれたが、まとめると。

卯月以外は戦闘に問題無し、全艦進軍可能。  
と言つたところか。

一番練度の高い卯月がやられているのはやや不安にもなるが、最大火力である鈴谷が  
無傷であるというのは朗報だ。

それに……。

「夜明けも…………もうすぐ」

現状、全てが司令官の計画通りに進んでいる。

ならばここで引き返す理由も無いだろう。

「全艦素敵…………一秒でも早く、敵を見つけて」

それから。

「殲滅します」

それだけだ。

# 十九話 新人提督と弥生が沖ノ島を攻略したりする話

接敵から僅か十秒。

互いが攻撃に入った時間である。

視認した敵の数は六。暗さのせいでその艦種までははつきりとは分からないが、それでも最低三隻、戦艦がいることは分かつている。

距離は近い、雷撃戦が出来るほどの距離。

「全艦、撃て!!」

夜間故、艦載機の出せない瑞鳳と武装に損害が大きい卯月を除いた全艦が一斉に砲撃を開始する。

「うーちやんだって、魚雷はまだ使えるんだから！」

次いで駆逐艦の魚雷を一斉に発射。返すように敵からも砲弾が飛んでくる。「足を止めないで………止めたら、終わりです」

敵戦艦は電探を装備していると言う話もある、その狙いの正確性を考えれば、足を止めれば砲弾の集中砲火を浴びて一瞬で沈むことは明白だった。

「あと少し…………あと少し…………」

この状況は確かに司令官の思い描いた通りの図ではある。

だが夜が明け、日が顔を出すまでのあと少しの時間。

この砲弾の雨の中をしのぎ続けなければならないと考えれば。今となつてはそれが永遠にも感じられた。

\* \* \*

『日取りが決まつた』

電話越しに上官殿が告げるその言葉に意味を自身の中で反芻する。

「それで…………いつに？」

『二週間後だ…………編成自体は十日前に始まるからな、もう後四日しかない』  
「……………

サーモン諸島付近での深海棲艦の大規模な集結。

その報を受けた大本営からの大規模作戦発令の知らせ。

『確かに半年かそれくらい前にもありましたね』

『ああ…………嫌な思い出だな』

白池襲撃を目的とした大規模作戦が以前にもあつたが、あの時初めてその存在を確認

されたのが。

『…………今回もいると思われる』

「…………同じ、じゃないんですよね？」

『ああ、別の儀装を持った個体と思われる』

鬼、そして姫。そう呼ばれる深海棲艦の中でも上位と思われる存在である。

その固体の持つ強さ、そして数の少なさから、深海棲艦の中でも命令を下す側なので  
は無いか、と推測される怪物。

少なくとも、艦娘が単体で勝てるような相手ではないことは確かだ。

「…………しかし、因果な場所ですね」

『…………言うな、この報を受けた誰もが思っていることだ』

南方海域サーモン諸島。

この辺りではかつて旧日本軍と某国との大規模な海戦があり、その戦いで沈んで行つ

た船の余りの多さにこう呼ばれる。

「鐵底海峡…………ですか」

艦娘たちからすれば、まさに悪夢の海域だろう。

\* \* \*

被害甚大、と言つたところか。

戦艦の砲撃を再度鈴谷から庇つた卯月が早々に大破。お返しとばかりに鈴谷が敵戦艦を一隻沈め。

イムヤが敵半数の攻撃をひきつけながら翻弄する。どうやら半数は水雷戦隊らしい。弥生が魚雷で敵駆逐艦一隻を落とし。

そして飛んできた砲弾を避け損ね駆動機関が損傷、中破となる。イムヤが魚雷でもう一隻の駆逐艦を沈め。

けれど偶然にも飛んできた爆雷が直撃し、中破。実質これで戦力外となる。

そして残った戦艦二隻の砲撃に晒され、鈴谷もまた大破。こちらの残りは中破した弥生と無傷の瑞鳳だけ。

対して敵は戦艦二隻、そして雷巡一隻。

厳しい、と言わざるを得ない。

それでも、もう後が無い。

「もうすぐ夜が明ける…………やるなら…………今、だけ」

空が明るさを帯び始めている。

エンジンはやられているが、移動できなくは無いし、武装は無事だ。

距離もそう離れていないし、先ほどより少しだけ視認もできる。  
それは逆に視認されている、と言うことでもあるが。

逡巡は一秒にも満たない。

「弥生、行きます」

眩きと共に、ぬらり、と動き出す。

エンジンが使えないために、逆に音が消えた今はむしろ奇襲するのは良いのかかもしれない。

「…………後は、頼みます…………瑞鳳さん」

「や、弥生？」

自身の眩きを聞いた瑞鳳が何事かと目を丸くし、そして。

ゆっくりと、敵へと近づく。

敵も味方も今は小休止、互いに様子を伺っているところだ。

もうすぐ朝になる。そうなれば互いをはつきりと視認し、また砲撃戦が始まるだろう。

敵戦艦二隻に対してこちらの火力と呼べるのは瑞鳳だけ。

瑞鳳がやられればもうどうにもならない。ここまで深入りした以上、無事に帰れるかどうかさえ分からない。

故に、生き残るのならここで攻めなけばならない。

距離はもうそう無い。最初から無かつたのもある。ゆらり、ゆらりとゆつくりと近づく。

敵は動かない。

あと少し、あと少しでこちらの距離だ。

そして。

敵がこちらを向いた、それを瞬間的に察知する。

距離は…………微妙。当たるかもしれないし、当たらないかもしれない。撃つか、撃たざるか。

逡巡の間に敵の砲撃は飛んでくる。

不味い、そう思つた瞬間、体ががくん、と引つ張られる。

驚きと共にこちらを見れば、海面から手を伸ばすイムヤの姿。

「こっち！」

言葉と共に、体が引つ張られる。

直後に砲弾が先ほどまで自身が居た場所へと着弾、海面を揺らす。

引つ張られながら少しづつ敵との距離を詰めていくのが分かる。

どうやら彼女もこの賭けの乗るらしい。

あと少し、当たるか？

考えたその時、急に空が明るさを帯びた。

「…………あ…………朝…………」

日が顔を出した海は急激に明るさを帶び始める。距離は多少ある、だがこの明るさなら外さない。

「行つて…………行つて！」

いつもの自分らしくもない、感情的な声。

それでも、願うように、縋るように、その雷跡を目で追う。

真っ直ぐ敵へと伸びた雷跡、そして直後、轟音と共に水柱が巻き起ころる。

「戻つて！」

命中、それだけを確認し、すぐさまイムヤにそう告げる。

損害など見ても見ていなくても変わらない。今のでどちらか沈んでいたとしてももう片方がいることには変わらない。

今の自身たちが非常に危険な状況なのは変わらないのだ。

そう判断し…………直後。

ダダダダダダダアアアア、と背後で爆撃音。

驚き、振り返れば。

「任せなさい…………数は少ないけど、私の自慢の精銳たちなんだから!!」

上空の舞う爆撃機。

そして。

「行つて!!!」

海面を飛ぶ艦攻隊から放たれる魚雷。  
二重、三重の攻撃の嵐が敵を襲う。

そして――――――――――――――――――――

\* \* \*

「…………以上…………です…………」

戦闘経過をまとめた出撃報告を渡し、それを諳そらんじると、司令官が一つ頷く。

「…………そうか」

一つ咳き…………それから、ふう、とため息。

「…………良くやつてくれた、本当に…………良くやつてくれたよ」

少しだけ肩の力を抜いた司令官が咳き、微笑む。

その笑顔に少しだけ胸の奥に温かいものを感じながら、頷く。

「…………あんないし玉、知りませんでした」

「ああ…………俺自身艦載機の違いつてのがどれくらいの差を生むのか未知数だつたしな、悪いがそこまで期待してなかつた部分もある」

隠し玉も隠し玉だろう。まさか『流星改』なんて物を瑞鳳に載せているなんて。「いつ作ったんですか？」

まさしくあの艦攻隊の雷撃で敵が一瞬で壊滅したのだから、驚きもする。

「あの一週間の間に用意しておいたものだよ」

「…………ああ」

一週間ずつと考へてたわけではなく、そのためには色々やつていたらしい。まあその辺りの抜かりなさは司令官らしいと言えばらしいかも知れない。

そこまでするならもう一隻建造すれば良かつた、と思われるかもしれないが、これが存外難しい。

一度編成を決定し、艦隊の面子を固定したなら、実はそう容易くは変えられない。

一人の所属を変えるなら、その抜けた穴に誰を入れるのか、そして抜いた一人をどこに入れるのか、など考へることは多い上に、それを一つ一つ上官などに報告したりしなければならない。

今日は誰々はここ、誰々はあつち、などとそんな気軽に変えれるようなものではないのだ。

今的第一艦隊の面子は五隻。艦隊は六隻以内で編成されるようにするのが基本なので、後一隻しか枠は無い。

そこに一体誰を入れるのか、そう簡単に決定できるようなことではない…………本来は。

「…………驚いたと言えば、私のほうが驚いたぞ」

その言葉が何を指しているのか、すぐに察する。

「…………出てきたものは…………仕方ない、かと…………」

「いや、別に責めているわけではないんだ。むしろ良くやつてくれたと思つている」

そんな司令官の言葉に少しだけ安堵する。

だがまだ完全に安心しきるのも無理だろう。

「それで」

聞いておかなければならない。

「…………どうするつもり…………ですか？」 司令官

彼女たちの配属を。

\* \* \*

艦娘は建造によつて生み出される。

それが海軍が公式に表にしている大原則だ。

だが提督たちは知つてゐる、それ以外によつて艦娘が手に入るることもあることを。

そしてそれによつて生まれた彼女たち。

な  
めり物。<sup>もの</sup>と呼ばれることがある。

だが基本的にはみんなこう呼ぶ。

“ドロップ”と。

「長門型戦艦二番艦の陸奥よ、よろしくね、提督」

そう言つて腕を組みながらその大きな胸を張る女性と。

「あ、あの、こんなちわあ、潜水母艦大鯨です。不束者ですが、よろしくお願ひします。

提督」

少し自信が無さそうな表情の胸に鯨のイラストの描かれたセーラー服を着た少女。  
戦艦陸奥と潜水母艦大鯨。沖ノ島海域最奥の敵中枢艦隊を倒した後に“沸いて”出  
てきた二隻。

知つてゐる、存在 자체は知つてゐる。

稀と言われば極めて稀に。

それでも日常的に戦い続ける提督たちからすればそれほど珍しくも無く。

海の中から生まれる少女たちの存在。

通称落ち物艦ドロップと呼ばれる発祥不明の艦娘。

大本営はそれを表にして肯定していない。つまり、ドロップ艦の扱いとしては存在しないことになるため、その鎮守府で建造したその鎮守府の艦、と見なされる。

「…………まあ難しく考える必要も無いか」

要はタダで戦艦と潜水母艦が手に入つたと考えれば良いのだ。

気を取り直し顔を上げ、自身の前に佇む二人の艦娘を見る。

「良く来てくれた、歓迎しよう。取り合えず所属について考えておくから、今日はゆっくり休んでくれ。部屋は他の艦娘たちに言つて寮に作つてあるはず…………だよな？」

視線を横に向けると、弥生がこくり、と頷く。

「すまんが弥生、彼女たちを案内してもらえるか？」

「…………了解、です」

ペコリ、と弥生が一礼し、二人を伴つて出て行く。  
どさり、と椅子に深く腰掛け、思考を回す。

戦艦、そう戦艦だ。

しかも長門型。あのビッグセブンの片割れ。

こちらは第一艦隊以外に考えられないだろう。

砲撃戦火力の不足は一応鈴谷と瑞鳳の二人によつて補われている。だが戦艦はその二人をして一線を隔す強さを持つている。

ただそうなると…………。

「…………旗艦が駆逐艦で、納得するか？」

そこが分からぬ。幸いこれまでの艦娘たちは皆その辺りが寛容だつたためやつてこれたが、名高い長門型戦艦の片割れをそこを許容してくれるだろうか？

「それに、もう片方もなあ」

潜水母艦。簡単に言えば潜水艦の補給を担当する艦であり、決して戦闘用に向いた艦種ではない。

潜水艦と言えば一応イムヤがいるものの、言つてしまえばそれだけ、一隻だけなのだ。

潜水艦隊を作るのならば、せめて三隻、無いし四隻は欲しい。

他のところではどうやって運用しているのか…………後で上官や同期に聞いておくか。

少しだけげんなりしながら、電話を片手に取る。

取り合えずやらなければならないのは陸奥を含めた第一艦隊の早急な練度の向上だろう。

「北方海域への進撃が認められたなら……。」  
「キス島…………行くか」

そのためにもモーレイ海域の早急な攻略が必要となるのだが……。  
後十四日。今日を抜けば十三日。もう作戦まで二週間を切つた。

「考えることは多いな」  
机に突つ伏して、そう呟いた。

\* \* \*

「第一艦隊の準備は？」

「万全です」

不知火から渡された名簿を見ながら、男は頷く。

「第二艦隊は？」

「抜かりなく」

次いで電から渡された名簿を見て、もう一度頷く。

「第三艦隊と第四艦隊は遠征続行だ」

「…………ふむ？」

「使わないのか？」と言つた様子の不知火に、男が一枚の用紙を渡す。

「…………支援艦隊、ですか」

「ああ、それと夜間作戦も検討されている、なら露払いの先行部隊も出すつもりだ」

「…………なるほど、彼らにそれを頼む、と言うことですね」

「今回の作戦は戦闘の激化が予想される。どこまで頼れるかは分からないうが…………」

「そんな男の言葉に、不知火がくすり、と笑う。

「嘘ですね、どこまで頼れるか、ちゃんと想定しているのに」

「…………いや、こればかりは分からん」

だがそんな男の言葉に、不知火が僅かにきよとんとした様子で目を瞬かせる。

「アイツは本当に俺の予想の上を行くからな、もしかすると期待を軽々と越えてくれるかもしけん」

そして続く男の言葉にくすりと笑みを浮かばせる。

「…………親馬鹿ならぬ、師馬鹿ですか？」

「…………そんなんじやねえよ」

つい、と視線を反らす男に、不知火がまた笑う。

そして二人のそんな様子を見ながら電は睡を吐き捨てていた。

## 二十話 新人提督が上官から指示を受けたりする話

戦争が始まる。

艦娘用の寮内、与えられた一室の中で、駆逐艦弥生はその気配を敏感に感じ取つていた。

沖ノ鳥の攻略から三日後、モーレイ海への出撃を命じられ、苦戦はしたが数も増し、火力も段違いに上昇した今の艦隊ならば撃破は不可能では無かつた敵艦隊。二日かけて攻略を完了し、その二日後にはキス島への出撃を命じられた。

ただし海域入り口周辺にいる敵の掃討を主とし、敵中枢には踏み入らないように、とも言われる。

そこからはハードスケジュールの繰り返しだつた。戦つて、休んで、戦つて、休んで、また戦つて。

まるで何かに憑りつかれているかのように出撃を繰り返す司令官にさすがに物申せば返ってきた言葉は。

「…………大規模作戦」

現在海軍内で進められ、弥生たちもまた参加することになるだろう作戦。

旧力号作戦……………サーモン諸島要地奪還作戦。

聞いた瞬間、背筋が震えた。

きっとそれは、弥生だけに限らない。

あの戦いに参加していた来歴を持つ艦娘全員が同じように震え上がるだろう。かつて敵味方多くの艦が戦い、戦い、戦い、そして沈んで、沈んで、沈んで。今となつては船の墓場、とでも呼ぶべきあの場所。

未だあの戦いを覚えているものからすれば、トラウマ以外の何物でもないその名。

「……………鉄底……………海峡……………」

またの名を。

“アイアンボトムサウンド”

\* \* \*

八月も終われば次は九月。

夏も残すところあと半月と言つたところか。

秋に入れば少しはこの猛暑からも逃れられるだろうか。

そう考えれば、秋が待ち遠しくも思う。

だがその前に、やらなければならないことがある。

八月も残すところ半月。だがその半月は、その前の二か月以上よりも長くなりそうだと思う。

「…………始まるな」

いよいよ、始まる。

戦争だ。

人類と、艦娘と、深海棲艦。

互いの死力を尽くし、互いの生存権を賭けた戦いが。  
いよいよ始まろうとしてた。

「…………旗艦、弥生」

告げる。名を呼びあげ、そうして。

「はい」

答えが帰つてくる。自身の信頼する秘書艦の声。

「二番艦、伊168」

そして最初の戦闘を弥生と共に戦つた仲間。

「ええ」

「三番艦、瑞鳳」

「はい！」

敵の戦艦を相手にどうしても勝てなくて建造した、自身の鎮守府初の空母。

「四番艦、卯月」

「はあーい！」

弥生のためにわざわざ別の鎮守府からやつてきた弥生の姉妹。

「五番艦、鈴谷」

「はいよー」

そのお気楽さから鎮守府のムードメーカーとなりつつある重巡。

「六番艦、陸奥」

「任せなさい」

そしてドロップ艦と言う珍しい経緯を得てやつてきて一気に我が鎮守府の主力となつた戦艦。

すでに都度十度以上の実戦をこの艦隊を行つてゐる。

二日に一度は出撃するようなハードな行軍ではあつたが、それでも全員戦い抜いてくれた。

だから、もう心配はいらない。

「全員に通達、本日より大本營より大規模作戦行動の発令がされた。我が鎮守府もまたそれに参加する」

大規模作戦への参加、その言葉に、事前に通達していた弥生を除く五人の顔に驚きが浮かぶ。

「とは言うものの、この鎮守府の戦力では主力の一角を担うのは無理だということは諸君ら自身も重々わかっているとは思う、よつて諸君らの役割は敵部隊の偵察、そして先行打撃により主力本体を敵中枢まで無傷で連れていくこととなる」

要するに、主力部隊の支援艦隊としての役割だ。それが上官から申し渡された俺たちの部隊の役割。

はつきり言つて、卯月を含めても平均練度が五十を超えないこの部隊では敵本体との交戦は無理がある。故にこの采配はありがたいし、俺たちの部隊の後方からやつてくる主力軍は上官殿のところの艦隊だ。以前の演習の時には世話になつたし、共同遠征などの件もあつて、見知らぬ味方、と言うわけでも無い。

ただ一つだけ、問題があるとすれば。

「諸君らの作戦担当海域は…………ここだ」

今日だけ執務室に持ち込んだホワイトボードに張られたサーモン諸島海域周辺の地図のある一点を指さす。

アイアンボトムサウンド、そう呼ばれる海域を。

\* \* \*

大規模作戦の口火は、互いのその規模に反するかのように、小さなことから始まつた。南方海域サーモン諸島、その周辺海域を警戒する第一攻略艦隊内の味方哨戒部隊と、同じく哨戒を行つていたと思われる敵部隊との接触。一触即発のままに行われた交戦により、小破等多少の被害を出しながらも敵哨戒部隊を突破、続いてやつてくる水雷戦隊をも倒し、敵中枢部隊との交戦を開始。

その交戦に引きずられるように互いが互いに戦力投入を開始し、戦いは次第に激戦へと変化していく。

初戦の戦いと言うのはこの先の戦い全てに関わつてくる。主に戦う艦娘たちの士気の高さなどだ。

故に大本営はここに精銳を配置していた。主力本体にも負けず劣らずの練度を兼ね備えた精銳部隊が敵中枢艦隊を撃破、海軍は初戦を勝利で飾つた。

だがここで終わりではない、何せ今彼女たちが経つている海は、ソロモン諸島海域の入り口に過ぎないのだから。

ここから先に進めば進むほど強大になつていく敵精銳艦隊が続々と現れる。

故に大本営はすぐ様に次の手を打つて出た。

少数部隊による夜間海域突入。

事前に送られた偵察隊による情報で、この海域に集結している空母部隊の多さを知っていた大本営はこれら機動部隊が出てくる前に一步でも海域の攻略を進めようと強引な襲撃をかける。

いくらなんでも入り口周辺の敵を相当したその日に第二部隊攻略艦隊の突入は早すぎる、そう思う人間も確かにいた。

だが結果的にこれが功を奏すこととなる。

機動部隊の準備も整わない内に行われた夜間戦闘によりヲ級eliteを始めとした多くの空母の撃沈に成功し、さらにルンバ沖海域周辺の攻略に成功する。

これで二手、海軍が優位に戦闘を進めた…………そう、思われた時。

続くサンタクロース諸島海域での戦い。

島のすぐ傍に駐留する機動部隊本体を叩こうとする味方攻略部隊とそれを阻止せんと動く敵部隊との激しい戦いが行われた。

だが進撃に次ぐ進撃により一足飛びに敵の懷へと深入りしすぎた。

味方第三攻略艦隊の到着を前に、敵精銳機動部隊が後方より襲来。

空を雲霞のごとき敵艦載機が埋め尽くす。

海が燃えているようだつた、と後に第三攻略艦隊の艦娘は漏らしたほど激しい敵艦載機の爆撃に、味方第一攻略艦隊、第二攻略艦隊が敗退。稼いだはずの有利は一気に形成不利へと逆転した。

大本営が決断を下す。

第三、第四攻略艦隊の連合を結成。敵精銳機動部隊との決戦を敢行することに決定した。

そして第四攻略艦隊。そう呼ばれる複数の艦隊の一つに。

上官殿の艦隊があつた。

\* \* \*

「ふむ…………なるほど…………ふむ、なるほど」

顎に手を当てたまま、何か納得するように一人領く不知火の様子に、けれど誰も言葉を発さない。

誰もが分かっているのだ、彼女の邪魔をしてはならないと。

当然ながら古参の一人でもある、彼女たちの司令官である彼の鎮守府には多くの戦

艦、空母が建造されている。ドロップ艦も多くの種類が存在しており、誰もかれもが練度四十を超える一角の戦力、主力部隊である第一艦隊面々ともなれば練度九十を超える精銳中の精銳である。

二番艦、金剛。三番艦、榛名。四番艦、利根。五番艦、蒼龍。六番艦、飛龍。

誰もかれもが名の知れた錚錚たる面子である。

そして。

旗艦、不知火。

それら面子を率いるのが、駆逐艦。

誰もかれもが納得したわけではなかつた。

当然のように反発したものだつていた。

けれど、もうそれも居ない。

全て彼女…………不知火自身が実力を持つて屈服させたから。

だから誰一人として旗艦である彼女を侮る者はいない。

決して謙つているわけではないが。

けれど一度植えつけられたソレは簡単には拭えない。

全員がそうだ、誰もが一度は彼女にソレを感じている。

否、感じさせられている。

つまるところ。

上下関係。

「私が上で、お前が下だ」と心根の奥底に植え付けられている。  
それが無意識となつて、彼女たちを抑制する。  
彼女に逆らつてはならないと本能が警鐘する。  
故に後は、不知火自身の統率が全てを決める。

「…………ふむ」

そして今までに彼女が出してきた結果を考えれば。

「總員、出撃準備」

この戦いの趨勢など、最早この艦隊の全員が思い描いていた。  
「それでみなさん」

即ち。

「あのうるさい蚊トンボどもを撃ち落としに行きましょうか」  
勝利、それ以外にあるわけがないと。

\* \* \*

鎮守府から南方海域までの距離を測ると、実はかなりの距離がある。

弥生たち艦隊の所属する鎮守府は太平洋側にあるのでまだマシだが、日本海側にある鎮守府は南方海域を目指そうと思うならば、本州をぐるつと半周して迂回しなければならない。

そういう事情もあって、集結の日時はまだあつたが、いつ何時戦場が変化するか分からぬ、早めに行つておくに越したことはないと即日鎮守府を出発した。

鎮守府を出たばかりのころは軽口を叩く余裕もあつた面々だが、南方海域を進むにつけ段々と口が重くなつてくる。

サーモン諸島海域周辺に到達した時など、誰もかれもが重苦しい雰囲気を口を閉ざしていた。

その理由は誰もが理解していた。

アイアンボトムサウンド。

かつて行われた海戦の舞台となつた場所。

第二次ソロモン海戦。実はその時、一度だけ弥生はそこにいたことがある。

たつた一度だけ、それも短い間の砲撃、そして退却。

そこに二度目は無かつた。

だつて――

「…………弥生?」

背後からかけられた声に、はつとなる。

振り返ると、卯月がどこか心配そうな表情でこちらを見ていた。

「大丈夫かぴょん?」

「…………うん、大丈夫、だから」

取り繕うような表情で、けれど上手く笑顔が作れなくて。

どうして自分はこう不器用なんだろうと思わず自嘲してしまう。

そんな自身に卯月が何か言おうと口を開き。

「お疲れさまです」

先手を打つようにかけられた声に、その口は閉ざされた。

振り返ればそこに、陽炎型の制服を着て白い手袋をした少女、不知火がいた。

「不知火…………お疲れさま、です」

「不知火、大丈夫?! さつき他の艦隊から敵と交戦してたって聞いたぴょん!」

元同じ鎮守府だつただけあつて、卯月が親しそうに告げると、不知火がきゅっと手袋をはめ直しながらこちらへと視線を向けすらせずに咳く。

「何か問題があるとでも?」

ちらり、と射抜くような視線を向けると、卯月がびくり、と体を震わせる。

「う、うう…………た、確かに不知火に限つて不要な心配だつたがもしれないびよん」

「それより、良い時に来てくれました」

卯月から、そうして弥生へと視線を向ける。その視線に射抜かれると、どうしてだか体が重くなる気がする。勿論気のせいだと言うことは分かつてはいるが、どうにも弥生はこの視線が苦手だった。それは単に気迫に押されている、と言うだけのことなのかもしないが。

「今晩、鉄底海峡を抜けて敵拠点へと夜襲をかけます」

直後告げられた言葉に、そうして絶句した。

\* \* \*

真夏の日差しは南方海域にあつて尚強く降り注いでくる。

時刻はすでに夕刻になろうかと言う時間にも関わらず、空はまだまだ明るさを失う様子はない。

「…………早く、早く沈んで」

空を見上げ、燐々と海を照らし上げる太陽に思わず毒づく。  
と、その時。

ざあ、と水を切つて進む何かの音が聞こえる。

びくり、と体を震わせて草陰に身を潜める。

気づくな、気づくな、気づくな、気づくな、気づくな。

縋るような思いで必至に祈り、祈つて、祈り続けて。

やがて遠ざかる音に安堵の息を漏らす。

「…………不味いなあ、もう燃料も弾薬も残つてないにやしい」

思わず語尾でおちやらけてしまいたくなる程度には絶望的状況。

「…………大丈夫、だよね？」

きつと味方艦隊は來てくれる。前線を押し上げて、ここまでたどり着いてくれるはず  
だ。

だからそれ待てば良い。息を殺し、気配を殺し、鼓動さえも殺して。  
空を見上げる。

そこには何もない、ただ太陽だけが煌々と世界を照らしているだけだ。  
不安に駆られる。どうしても。  
この場所は思い出してしまう。

「…………早く来て、お願ひだから」

そうして駆逐艦睦月は敵地の只中で祈ることしかできなかつた。

## 二十一話 弥生が南方海域で姉妹を拾つたりする話

海域のいたるところ、あちこちから爆音が響き渡る。

どん、どん、どん、どん、どん、どん、耳に残る聞きなれた音。

砲撃の音、戦いの合図、そしてそこで行われるは決死の殺し合い。

戦場とは即ちそう言う場所である。

戦う以上、いつかは死ぬ。そう言う覚悟は艦娘であるならば……否、軍人であるならば誰だつて持つてている。本来艦娘とはそう言う存在であるし、その艦娘を指揮する提督だつて同じようなものだ。

けれど、だからと言つて。

仲間たちが死して行くことに何も思わないわけでは断じて無いし。

それを当然のことだなんて…………思えるはずがない。

確かに彼女は沈んではいない…………轟沈はしていない。

けれどそれは、沈んでいないだけだ…………生きているのとはまた違う。

だから、駆逐艦弥生は震えた。

目の前で大破しながら…………今にも死んでしまいそうな自身の姉妹を見て。体が震え、動くことすらできなかつた。

青を通り越して白んでしまつた血が通つてゐるとは思えないその姉妹の顔色に。唇は震え、言葉を紡ぐことすら忘れていた。

全身から血を流し、ぐつたりとしてぴくりとも動かないその姉妹の様子に。弥生は…………何もできず、立ち尽くした。

\* \* \*

駆逐艦睦月は走つていた。

夜の闇に紛れて水面を叩くその姿は、けれど探照灯などと言う便利なものを持つていな深海棲艦には極めて気づかれにくい。

最早一刻の猶予も無かつた。

次の作戦開始がいつなのか不透明な以上、あの海域に隠れて潜むと言うのは余りにも博打が過ぎる。

それは知らぬが故の無知、と言うわけではない。実際のところ、睦月の思考は極めて正しい。

そもそも駆逐艦睦月がこんなところに…………第四目標とされた海域に居るのは、第三海域の攻略に詰まつたからだ。だからこそ、睦月たちのいた第三攻略艦隊と第四攻略艦隊との合同での作戦が決行され。

そして第三海域サンタクロース諸島海域の制覇に成功する。

その際、睦月たち第三攻略艦隊の一部は、敗走する敵精銳艦隊の追撃を行つた。続く第四目標海域…………あのアイアンボトムサウンドでの戦いを少しでも優位に進めるためである。

その行動は正しかつた、けれど間違つていた。

引き際を間違えたのだ、睦月たちは。

故に敵陣中に深入りし過ぎ…………そして睦月以外の仲間は皆沈んでいつた。

鉄底海峡の仲間入りを果たした。

そして睦月も…………。

「…………絶対に、絶対に生きるんだから」

本当は第四海域へ攻略部隊が突入してくるまで待つつもりであつた。

だがその決心を変えさせたのは、一体の敵。

睦月なりに敵の様子は伺つていたのだ、脱出の機会は無いか、どこか敵の空白地帯のようなどころは無いか、など。時には島から島に移るような真似もしながら、そして見

てしまつた。

それは少女だつた。その背丈から言つてもまだ少女という言いかたが正しいだろう。少女の全身は白かつた。真つ白な肌、真つ白な髪、けれど目だけは爛々と赤かつた。一目見ただけで理解する、理解させられた。

目の前の少女が自身の想像を絶するほどの怪物であることに。それを理解した瞬間、逃げ出した。

ここに居てはならないと理解した。この事実を仲間に伝えなければならないと理解した。

姫と呼ばれる存在。

深海棲艦の上位種。それは先の南方海域強襲偵察の時にも発見された怪物に着けられた呼称。

一刻も早く、一秒でも早く知らせなければならない。

アレは艦隊一ついともたやすく殺しつくす真正の怪物だ。

駆逐艦睦月はそれを知つてゐる、かつての南方海域強襲偵察に参加し、その折たつた一度だけ姫種との戦いを見たことがある睦月は知つてゐる。

上位個体は他の深海棲艦のような…………それこそ戦艦などとすら比べものにならない、そんな生易しいものでは無い。

今回の作戦で姫種の存在は事前に知らされていた。実際、第三海域でもそれらしき姫種の存在は確認していた。

だがあそこにいたのはそれ以上だ。  
あれは、あれは!!!

\* \* \*

作戦は至つてシンプルだ。

闇夜に紛れ、強襲。敵陣最奥に座すだろう敵中枢艦を叩く。

そしてサンタクロース諸島海域で“姫種”が確認できしたことから、恐らく次の海域ではさらなる姫が存在しているだろうと予測できる。

準備は怠らないように、それだけ告げて不知火は去つていった。  
すでに日は落ちかけている。

あの水平線上に夕日が沈めば……作戦決行だ。

それまで、まあもう一時間程度の余裕はあるだろう。

今のうちに艦隊内で話をしておいても良いかもしない。

そんなことを考えたその時。

「…………第三次攻略艦隊…………追撃…………行方が…………」

他の艦隊で話合う誰かの声が聞こえた。

「…………生存者は…………できず…………全滅…………」

聞こえる言葉の端々に不吉の予感を募らせる。

「…………大丈夫…………だよ、ね？」

今から行く場所がどんな場所か、弥生は知つていてる。

だからこそ、不安に震えることもある、だがそれを誰かに見せるわけにはいかない。

弥生は…………旗艦…………だから。

自身はこの艦隊を率いているのだ。イムヤの、瑞鳳の、卯月の、鈴谷の、陸奥の命を預けられているのだ。

そんな自身が不安そうな顔をしていてはならない。

大丈夫…………大丈夫…………。

不安を押し殺しながら、時間は過ぎていく。

夕刻六時、太陽が水平線上に沈んでいく。

まだうつすらと明るさを残すが、これから目標海域に進軍すればちょうど闇夜に包ま

れる頃合いだろう。

「…………では行きましょうか」

いつの間にか、彼女はそこにいた。

自身が率いる絶対の群れをその背に負つて。

闇の中から溶け出してきたかのように、誰もその存在に気づかなかつた。

「目的地鉄底海峡」

ぐつ、と手袋をはめ直す。

「目的敵深海棲艦の撃滅」

くい、くい、とベストとシャツの裾を軽く直し。

「最優先目標敵中枢の撃破」

ふつ、と真横に手を薙ぎ。

「では、向いましょうか」

その手を真正面へと向け、そう告げた。

\* \* \*

ドンドン、と砲撃音が夜の闇に響く。

「…………うーん、やっぱり厳しいにやしい」

せめて、せめて今夜が新月ならば良かつたのに、生憎満月…………とまではいかない

が、月の光は煌々と海面を照らしている。敵の接近にいち早く気づけるのは利点だが、一人海を走る自身の姿もまたはつきりと見つけられるのは非常に大きなデメリットだ。幸いこの辺りには島がいくつかあるので、そこに隠れながらなんとか見つからずに済んでいるが、それもいつまで持つやら。

けれどもうすぐだ、砲撃音がしている、と言うことは味方が進軍を始めている、と言うこと。

まさか海域を制圧したその日のうちに動きだすと言うのは予想外だったが、けれど第二海域もそれで制圧したのだから、存外有効な戦術には違いは無い。

あと少し、あと少しだの、あと少しで味方と合流できる。  
だと言うのに、そのあと少しが果てしなく遠い。

弾薬も尽き、燃料も尽きた今、睦月には艦装を起動させる術がない。艦隊機動は到底無理であるし、何よりも今襲われれば何もできずに殺される。

だからこそ、慎重にならなければならない。

例え戻った後に全滅の責を負わされようと、そのためには解体の憂き目に会おうと。あの場所で見たことだけは伝えねばならない、そうしなければ多くの艦娘があの鉄屑の海へと沈んでいくことになる。

急いでいた、焦っていた。

だからこそ、それは偶然の一撃であつた。

進軍中の味方部隊と交戦中の敵艦隊。

そう、もう睦月は目の前まで來ていた。あと僅かな距離、そう……互いに目視できる距離まで近づいていた。

だからこそ、故にこそ。

それは敵からも見えてしまうと言うことに他ならない。

それは偶然の一撃であつた、けれどそれは、必然の一発であつた。

砲火が降り注ぐ。

「…………え…………あ…………」

言葉も出ない、燃料も尽き、機動力は無い。

体は動かない、弾薬も尽き、撃ち落とすことも出来ない。

ただ迫りくる敵の砲撃を、目の当たりにして……。

「睦月!!」

誰かが叫んだ、その声を。

「…………あ」

何となく…………魂が覚えているその声を。

確認する間も無く、睦月の意識は闇に飲まれた。

\* \* \*

砲が唸りを上げて鉄塊を撃ちだしていく。

鉄底海峡、この海域に侵入してまだそれほどと間は無いが、幾度とない激戦を強いら  
れている。

夜戦、と言うのは本来ならばこちらに有利な状況だ。

何せこちらは駆逐艦に潜水艦が半数を占める。明るいうちの砲撃戦には不利な要素  
が多い。

だから極限まで接近してから弾丸を叩き込む夜戦は、こちらの攻撃力を爆発的に上昇  
させてくれている。

だがそれでも。

「点呼」

「イムヤ問題無し、夜ならこつちの領分よ、どんどん任せてくれていいわ」

「瑞鳳小破です…………あう、夜戦だと空母は何もできないから辛いわ」

「卯月問題ないつぴよん！　ただ…………やばいかもしない」

「鈴谷は中破だよ、ごめん、一発当たつちやつた」

「陸奥、問題ないわ…………まあいざとなつたら戦艦の装甲で庇うわ…………けど」  
 卯月も陸奥も、言いよどむ。言葉にこそしないが、他の三人も…………そして弥生も同じ。

どこまでやれる、どこまで戦い抜ける。

夜戦は接近戦だ。お互にこの闇の中で目視できる距離まで近づいての殴り合い。  
 だからこそ、こちらの火力が跳ね上がつたように…………敵の火力も跳ね上がつている。

たとえ昼戦ならそれほど気にするほどのものでは無い駆逐艦、軽巡洋艦であろうと、  
 この闇の中では恐ろしい強敵となる。

弥生たちの役割は露払いだ、最奥にまで不知火たち主力艦を導くことが役割だ。  
 だが、そこまで持つか？

そんな不安が頭を過り…………。

「敵艦隊見ゆ！ 数四…………大きいのがいる、戦艦が一！」

瑞鳳の言葉にはつとなる。

慌てて視線をやれば、確かにやや遠くのほうに敵が見える。

「…………先制雷撃、かけます」

「こ、この距離でかひょん!?」

その言葉に卯月が驚いたように叫ぶ。

だがその言葉にゆっくり頷く。

「敵影に異常無し、恐らくこちらに気づいてないわね」

瑞鳳の言葉にこくり、頷き。

「一手でも、多く……稼ぎます、水雷戦隊、用意」

その言葉に、卯月が、そして海中でイムヤが、雷装を展開する。

「射<sup>て</sup>え」

ボンボンボン、と着水の音だけを立てながら、静かに魚雷が進んでいく。

そうして。

「突撃、です」

艦隊総員が動き出す。

一番射程の長い陸奥が砲撃を開始する、と同時に。

ズドオオオオオオ

魚雷が爆破し、敵影を飲み込む。

どれだけ被害が出たかは分からぬ、だがどのみちここからは泥沼の殴り合いしかないのだ。

だつたら…………一歩でも深く、敵に踏み込む。

そうして距離を詰め、水飛沫が晴れたことで……………気づく。

敵戦艦の砲塔がこちらを向いていないことに。

その先は……………敵の少し後方。

そこにいたのは……………一人の少女。

襟元が緑色の真っ白なシャツ。そして緑色のスカート。

知らない見た事が無い、少なくとも、弥生が建造されてこの方一度たりとも……………あんな艦娘は見た事が無い。

けれど知っている、見覚えが無くとも、魂が知っている。理解できる、あれが誰なの  
か。

「睦月!!」

弥生らしくも無い、張り上げた大声に、少女がびくり反応して。  
直後、敵の砲撃に飲まれた。

\* \* \*

ざあ、ざあ、と闇夜の海がさざめく。  
敵の一団を倒し、そうしてすぐさまに駆けつけた弥生が見たのは。

波間に力なく浮かぶ、姉の姿だつた。

「睦月！」

弥生と、そしてそれが誰なのかすぐ様理解した卯月が駆け寄り、卯月が抱き起す。卯月の手の中の少女は、酷く冷たく。そして弱々しかつた。

「むつ…………き…………」

確かに彼女は沈んではいない…………轟沈はしていない。

けれどそれは、沈んでいないだけだ…………生きているのとはまた違う。

だから、駆逐艦弥生は震えた。

目の前で大破しながら…………今にも死んでしまいそうな自身の姉妹を見て。体が震え、動くことすらできなかつた。

青を通り越して白んでしまつた血が通つてゐるとは思えないその姉妹の顔色に。唇は震え、言葉を紡ぐことすら忘れていた。

全身から血を流し、ぐつたりとしてびくりとも動かないその姉妹の様子に。

弥生は…………何もできず、立ち尽くした。